皇子クシ　―　太陽の都を築いた若きインカの伝説　―

yamayuri

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
皇子クシ　―　太陽の都を築いた若きインカの伝説　―

【Ｎコード】
Ｎ５４９３Ｗ

【作者名】
ｙａｍａｙｕｒｉ

【あらすじ】
人々に神童として知られる、ときの皇帝の三男クシは、父王から疎まれ、異母兄から妬まれ、陰謀に巻き込まれていく。しかしその試練が彼に強さを与える。やがて国は大きな危機を迎え、彼は国を救うべく立ち上がる。――――――――

『インカ』の伝承のなかの英雄クシ。彼の武勇伝に最強の女戦士との恋や不思議な部族との出会いを絡めて新しい歴史ファンタジーを創りました。クスコ、マチュピチュ、サクサイワマンの砦など、広

く知られた場所も、独自の視点で背景として表現していきます。あくまで創作です。――――――――

※『インカ帝国』とは後世の人が付けた俗称です。ここでは『インカ』とは皇族や皇帝のことであり、『インカ人』＝『ケチュア族』となります。――――――――

前作『稲妻と星の花』へと続いていくエピソード1になりますが、独立した話としてご覧いただけます。※他サイトで公開中のものです。

1、神童

奪って豊かになるのではなく、

与えて豊かになるのだ。

1、神童

山の上に並んだ若者たちは、強い風に煽られて今にも転げ落ちそうだ。まだ華奢な少年たちは歯を食いしばり、こぶしを握って足を踏ん張り一様に天を仰いでいる。突風が吹くとよろよろとよろめく少年が何人もいた。

しかしその様なことでは、これから行われる過酷な儀式にはとても生き残ることはできないだろう。ふもとで見守る民衆たちには、頂上の人影が点のようであっても、最初に脱落するのが誰かその時点でおおよそ見極めることができた。

その山は都を取り囲む山々の中でも特に険しい急斜面を要しており、剥き出しの山肌には砂のように細かい石粒から拳大ほどの石が無数に転がり一面を覆っている。無造作に踏み出せば足を取られて転げ、垂直にも思える斜面を一気に麓まで転がっていくだろう。そうなれば軽い怪我では済むまい。

ただでさえ危険な場所にも関わらず、さらに悪条件を加えるかのようにその日は朝から突風が吹き荒れていた。風は雲を驚く速さで押し流していく。雲が切れれば真夏の太陽が顔を出し、遮るもののない山の頂上に立つ少年たちの肌を灼熱の光で炙った。

それでも山の上の少年たちにその場を逃げ出すことは赦されなかった。使命を全うするか、大怪我を負って最悪の場合は命を失って棄権をするか、どちらかの選択しかなかった。

今年は二十人の少年が山の上に揃った。

頭に巻きつけたロープにはそれぞれ、色や形の違う鳥の羽が挿してあり、その羽で誰かが分かるようになっていた。上半身は裸で腰布を巻いただけの姿。足には何も履いてはならなかった。

突然轟音とともに今までにない突風が頂上を吹きぬけた。

かろうじて踏ん張っていた足が一気に掬われる。耐え切れずに八人の少年が山の上から転がり落ちていった。

と同時にほら貝の低い音が山を突き上げるように響いた。それを合図に、残った十二人の少年は一斉に山を駆け下り始めた。岩だらけの急斜面はゆっくり下るだけでも至難の業だ。

駆け出した途端に足を滑らせて三人が転倒した。転倒したひとりは石ころとともに勢いよく転がって、正面に突き出した大岩に体を打ちつけ、動かなくなってしまった。残りの二人はそのまま麓まで転げ落ちていった。

九人の少年が広がってようやく山裾近くまでに下りてきたとき、そこに待ち構えていた数人の兵士が思い切り棍棒を振った。加速度は最高潮に達している。勢いの止まらない少年たちは、武器を振り回す兵士たちの中に次々と飛び込んでいった。

避けることも儘ならず華奢な体が次々とはじき飛ばされた。防ぐ物のない裸体に受ける衝撃は大変なものだ。叩かれて動けなくなっ

た者もいれば、はじかれても立ち上がってまた走り出す者もいる。中にはうまく棍棒をすり抜けて走り続ける者もいた。

残る少年の数は五人になっていた。しかしその少年たちをさらに試練が襲う。正面から男たちが石や槍を投げて襲ったのだ。この男たちは何と少年たちの親や親類なのだ。この時点でまた何人かが倒れて脱落した。

試練をくぐり抜けてゴールの旗の下にたどり着いたのは、たった二人だった。真っ赤な鳥の羽根を付けた背の高い少年と真っ白な羽根を付けた華奢な少年。とくに白い羽の少年はまったくの無傷で、傷を負いながらやっとのことでゴールした赤い羽根の少年に大きく差をつけて、一番に旗の柄を掴んでいた。

人々はこの少年たちの勇姿に惜しみない歓声を送った。そのうち多くの民衆が彼らの周りに集まってきた。兵士たちに守られるようにして、ふたりの少年は民衆の間をすり抜け、広間に設けられた壇の上に上がった。彼らには勇者の印のコカの葉の冠が授けられた。コカの葉は、この都のように標高の高い土地に暮らす人々には無くてはならない気付け薬である。その命の元となる葉は勇者のしるしでもあるのだ。そして一人前の大人が身につける褌（ふんどし）が与えられる。彼らはこれで大人の仲間入りをしたのだ。

このふたりは身分は違うが貴族の出身であった。彼らは少し緊張した面持ちで貴族の少年にだけ行われる次の儀式を待った。

立派な羽冠を抱いた神官がゆっくりと壇上に上がってきた。神官はまず赤い羽根の少年に近づき、彼の頭頂を鷲掴みにしてぐいっと横にした。赤い羽根の少年は苦痛の表情を浮かべている。頭を掴まれたからではない。次の痛みに耐えられるかどうかが心配な

のだ。神官は少年の右の耳たぶを掴んで引っ張る。容赦なく伸ばされたそこに一気に黄金のキリを刺し込んだ。キリを二、三度回転させて穴を広げると、傍に侍る召使いが手渡した小さな金の丸板をその穴にぐいぐいと押し込んだ。

赤い羽根の少年はひどく顔を歪めて唇を噛み締め、なんとか声を出さないように耐えている。右に続いて左にも同じことが行われている間、さすがに小さな呻き声が漏れていた。

次に白い羽根の少年にも神官は同じことを行った。あれほど力強く山を駆け下りてきた白い羽根の少年は、意外にも大声を出して騒ぎ出した。しかし逃げ出そうとするわけではなく、大声を出すことで痛みに耐える彼なりの方法だったようだ。民衆はその姿を逆に微笑ましく見守っていた。赤い羽根の少年よりも二、三年下のこの少年はまだどこかにあどけなさを残している。苦痛を素直に表現する姿は、山を駆け下りてきたときの神がかった姿から一転、見た目相応であり、人々に親近感を抱かせたのだ。

儀式はすべて終わった。二人はこの部族の中で立派に大人として、そして一人前の貴族として認められたのだ。

高原の都クスコに暮らすケチュア族の男が必ず迎える成人の儀＝ワラチコ。少年たちは過酷な試練をくぐり抜けなければ大人になることはできない。途中で棄権したり脱落した者は次の年もまたその次の年もこの儀式に臨む。中には不幸にも永遠に大人になることはできない者もいた。

白い羽根の少年は十五で初めてこの儀式に臨み、一度で、さらに兵士たちの激しい攻撃をすべてかわして傷を負うこともなく合格した。そのような例は今までほとんどなかった。この少年の勇姿を見物していた民衆はいつまでも興奮が醒めやらず、儀式が終わっても

少年の名を連呼し続け、彼を取り囲んだ。

「アウキ・クシ（クシ皇子）！　アウキ・クシ！」

今までもその少年の噂は知られていたが、このときはじめて彼が人々の前に姿を現し、その噂を証明したのだった。

少年の名はクシ。ときの皇帝ビラコチャの三番目の嫡子である。少年はそれまでも宮殿の中では神童として知られていた。武術の腕前は数いる皇子の中でも一番秀でており、大人を言い負かしてしまうほどの知恵を持っている。そのうえ整った美しい顔立ちをしていた。非の打ち所のない……いや強いていえば、負けん気が強く、無謀と思えることにでも果敢に挑戦するために、失敗することも多い。しかしその人間臭さ、子どもらしさが、かえって周囲に好感を抱かせ、皇子を慕う者も多かったのだ。

その皇子の噂は一般の民衆の間にも知られるほどだった。

「二年かけてようやく合格したのに、皇子と一緒とはなんという不運だ。私のことなどすっかり忘れられている」

冗談まじりにクシの肩を叩いて笑ったのは、赤い羽根の少年だ。彼の名はワイナ。クシよりも三つ年上で、二年かけてようやく儀式を通過したのだ。

この儀式で無傷で済んだ者などほとんどいない。命を落とす者さえいるほどなのだから、ワイナの受けた傷など大したものではない。クシが驚異の成績を出さなければ、明らかにワイナは人々から大歓声を送られていただろう。せっかく努力が実を結んだというのに、人々は噂の少年クシに夢中でワイナの存在はかすんでしまったのだ。

それでもふたりは、宮殿で一緒に稽古に励んできた気心の知れた仲なので、ワイナも驚異的な成績を残したクシを心から称えていた。

ワイナは傷を負っているにも関わらず、クシを肩車で担ぎ上げた。ワイナの肩車に乗ったクシが人々の間を練り歩くと、人々はますます熱狂して彼を呼ぶ。その声に応えるためにクシは両手のこぶしを握って天に突き上げた。興奮したワイナがくるりくるりと向きを変えるたびに、クシの視界もめまぐるしく変わる。さすがのクシも目が回り、頭がくらくらとしてきた。しかし意地っ張りの彼はそれを振り切るように激しく頭を振ると、また人々の呼びかけに笑顔で応えるのだった。

ふとクシはその姿勢のまま固まった。人だかりの向こう側で自分を見つめる鋭い視線を感じる。クシがそちらに目を凝らすと、人だかりの遥か向こう側で、素早く何かが物陰に身を隠した。しかしうごめく人々の波に遮られて、それが見えたのは一瞬だったのだ。

クシは心がざわついた。姿が消えてもその視線が未だに自分を見ているような気がする。普段滅多に怖れなど感じたことのない自分が、その一瞬でうろたえていることが不気味だった。

クシの感じた不安は、その何かがこれから自分に大きく関わってくることを予感するものだったのかもしれない。

クシの心とはうらはらに、クシを肩にかついだワイナは陽気な足取りで人々の間を練り歩いていた。クシの体はそれに合わせて踊るように弾んでいた。

2、婚礼

2、婚礼

成人の儀の翌日、昨日の疲れでぐっすりと眠っていたクシを兄のリョケが揺り起こした。

「クシ、もうすぐ顔合わせの儀が始まるぞ。早く起きろ！」

クシは半開きの目でリョケを睨みつけた。

「はあ？　顔合わせとは？」

リョケは寝ぼけたことを言う弟の顔を軽くはたくと怒鳴った。

「しっかり目を覚ませ！
今日は皇帝陛下に新しい側室がやってくる日だ。神殿で花嫁の洗礼が行われたあと、宮殿の大広間ですべての皇族との顔合わせがあるのだぞ」

リョケの言葉でようやく大切な行事を思い出したクシは飛び起きた。

「兄上！　今、太陽はどのあたりだ？」

「もう中空だ。早く仕度しろ！他の者はすでに大広間に揃って花嫁が来るのを待っているのだぞ！」

クシは寝台の周りに散らかった装飾品を鷲掴みにして、マントを肩に引っ掛けて部屋を飛び出した。リョケが慌てて後を追い、走りながらクシのマントや装飾を直してやった。

台形型に開いた細長い入り口をくぐると、高い天井の重厚な石造りの大広間が現れる。高窓から差し込む幾筋もの光と、高い位置に掲げられているたいまつの灯りが暗い色の石の壁を美しく照らし出していた。壁に貼られた金箔のラインがそれらをよく反射してさらに広間を輝かせていた。

中央通路の左右には大勢の皇族たちが居並んでいる。皇帝の玉座はまだ空席で、儀式が始まるまでにはまだ時間があるようだった。集まった皇族たちが各々勝手に雑談をしているため大広間全体がざわざわと騒がしい。

その中にクシとリョケが走りこんでくると、何人かが彼らに気づき大声を上げた。

「おお、遅かったではないか！」

「英雄のおでましを今か今かと待っていたぞ！」

「昨日の英雄も、今日は寝坊か」

一斉に笑い声が上がる。

クシは顔を真っ赤にして、そそくさと末席に身をうずめた。しかし皇族たちは隠れるクシに容赦なく声をかけて話題の中心に持ち上げようとする。

「しかし、昨日の成人の儀は実に素晴らしかった。あのように無傷で合格した若者をわしは見たことがないぞ」

「いや。クシ皇子ならやると思っておった」

「宮殿の若者の中では武芸で右に出るものはないからな」

「これからの活躍、おおいに期待しておるぞ」

皇帝の兄弟や従兄弟にあたる年配の皇族たちが口々に褒め称える。クシはリョケの蔭で肩を竦めて、過剰にも思えるその褒め言葉にちょんちょんと頭を下げていた。

「無傷で成人した者なら、ここにもおりますが……」

上座の方から声が響いた。皇帝の玉座の隣に座るウルコだ。クシの腹違いの兄であるが皇帝によって皇太子に指名されているので、皇帝の隣に座ることを許されているのだ。

ウルコは皇帝の側室の息子だ。ウルコの母は貴族ではなく、皇帝の愛妾から側室に成り上がったのだ。正妃の息子はアマル、リョケ、クシの三人だった。正妃が亡くなり、皇帝は溺愛するウルコの母を正妃のように扱い、三人の嫡子を差し置いてウルコを皇太子に指名してしまったのだ。

皇帝の地位は世襲制ではあるが、実は後継者選びには嫡子か庶子かはさほど問題ではない。その方法は皇帝が自ら指名するか、あるいは目ざましい功績を上げて貴族の誰もが王に相応しいと認めるか、そのどちらかなのだ。

しかしウルコは頭が鈍く、武芸の才能もなかった。そのウルコをなんとか成人させようと、数年前、皇帝はウルコひとりのために成人の儀を行った。その儀式というのがまったく異例で、普通の式で使われる険しい山とは比較にならないほど低い丘の頂上から、攻撃する兵士たちもいない中をただ駆け下りるだけのものだったのだ。

人々は心のうちでは呆れていたが、皇帝の意向に逆らうことは許されないため、ウルコを褒め称えた。そしてウルコの合格を祝って盛大な祭りが何日も催されたのだった。

「ああ、これはこれは。そうでありましたな」

「これは大変失礼を」

何人かが取り繕ったように返事をしたが、ほとんどの者は後ろを向いて苦笑していた。

「クシ。お前も無事一人前の皇族になったのだから、今後は皇帝陛下と私のためによく働くのだぞ」

ウルコはクシの方を見遣って、しゃくれた顎を突き出した。

「はい。皇太子殿下」

クシはそう答えたあと、思わず奥歯をきりっと鳴らした。

「いつもの調子だ。軽く受け流せ」

リョケはクシを軽くひじで小突いて小声で声をかけた。

「兄上。屈辱ではないですか。後継者に相応しいのは、まずアマル兄さま、次に兄上だ。彼を皇太子と認める者は少ない。父上のお考えが全く理解できない」

リョケがクシに近づいて小声で叱った。

「しっ。声が高いぞ。この場で他の者にそのような話を聞かれてはまずい」

そしてさらにクシの耳に口を近づけると、それを手で隠してひそひそと耳打ちした。

「クシ。今日の花嫁は十七だそうだ」

「十七？　父上とはまるで娘か孫ではないですか。私とそれほど変わらず、兄上たちよりも年下だ。なんで今さらそのように若い側室を迎えるのですか」

「隣の部族キリスカチェの（天の女王）の娘だそうだ。キリスカチェとケチュアが和睦を結ぶために陛下に嫁いでくる。

キリスカチェは少数部族だが勇猛なことで知られている。向こうは小さな部族が生き残るために大部族と手を結ぼうと考えた。わがケチュアは有能な戦士が揃うキリスカチェの戦力が欲しいのだ。ここでケチュアとキリスカチェが手を結ばなければ、ほかの強大な敵につけいる隙を与えてしまうからな。

ただ、そのように若い娘ならふつう皇太子に嫁がせるものを、わざわざ父上が引き取ったのにはわけがある。

貴族の中には、ウルコを皇太子としての資質がないと批判する者が多くいる。ウルコが即位する前に、そんな者たちが反乱を起こす危険がないとは言えないのだ。そんな危うい立場の皇太子に、大事な人質の姫を嫁がせて、万が一ウルコとともに失脚させることになったとしたら、キリスカチェは黙っていないだろう。ウルコを皇太子にと望みながら、父上もウルコの評価を無視することができない証拠だ。現皇帝の妃であれば、たとえ父上が亡くなったとしても地位が落ちることはないからな。

キリスカチェは誇り高い部族ゆえ、たとえ自分たちが滅ぼうとも

屈辱を受けたことに対して報復するであろう。最後にはケチュア族が不利な立場に立たされてしまうわけだ。
だから父上自ら、同盟の証である花嫁を引き取るしかなかった」

「しかし……この婚礼にはあまりにも無理が。花嫁が哀れだ」

「そんなことはどうでも良い。つまり父上……皇帝陛下でさえ、ウルコを後継者とすることに不安を感じているということだ」

ふたりがひそひそとやっているとき、貴族たちが前の列から順々に跪いて頭を垂れていった。皇帝が広間に入ってきたのだ。前の列がすべて跪くと、クシとリョケも慌ててその場にしゃがんで頭を下げた。
皇帝がゆっくりと玉座に身をうずめると、深く頭を垂れていた貴族たちが顔を上げてご機嫌伺いを始めた。

「この度はまことにめでたいことでございます。若い花嫁をお迎えになって、陛下におかれましてもいつまでも若々しくご闊達であられますこと、お喜び申し上げます」

「ほんに……。いつまでもお達者でうらやましい限りですな」

まるで仙人のような皇帝よりもずっと年上の皇族が、ところどころ歯の抜けた口を大きく開けて笑う。
しかし、皇帝の方はお世辞を並べる皇族たちを憂鬱な表情で見つめ、何度も大きな溜め息をついていた。

「クシ。お前の言うとおりだな。花嫁に同情するよ……」

リョケが頭を下げたままクシを振り返って言った。その言葉にク

シはクックと肩を震わせて笑った。

「クシ！」

突然宮殿に低い声が響いた。クシが驚いてはっと顔を上げると、皇帝がじっとこちらを見つめている。さては今のやりとりが皇帝に聞こえたのか。クシは慌ててまた視線を下に落とした。

「昨日の成人の儀は大変立派であった。余はそなたを誇りに思うぞ」

クシは驚いて再び顔を上げた。

「ありがたきお言葉にございます」

末席に隠れていたクシは一歩前に進み出ると皇帝に深々と敬礼をした。クシが父に褒められたのは初めての事だった。

宮殿では有名なクシの奔放な性格を、父が嫌っていることは薄々感じ取っていた。クシはおそらく若い頃のビラコチャに似過ぎているのだろう。似た者同士はその粗までもが見通せる。クシの姿を見るとビラコチャの中に若い頃の挫折や苦悩が蘇ってくるのかもしれない。

理由は何であれ、父が自分を避けようとしていることにクシは前々から気付いていたのだ。その父がいま、大勢の前で自分を褒め称えてくれた。それはクシにとって何よりも嬉しいことだった。

周囲の者たちがまた騒ぎ始めた。みな一様にクシに賞賛を送ったが、ウルコだけは横を向いて拗ねていた。

「キヌアさまのお着きでございます！」

台形型の入り口に神官が顔を出し、告げた。その言葉で皇族たちはいっせいに壁側に身を寄せて中央通路を広く開けた。すると間もなく大神官が現れ、そのあとにふたりの侍女が花弁を通路にまきながら入ってきた。

やがて入り口に姿を現した娘の姿を目にして皇族たちはみな息を呑んだ。大きく溜め息をつく音も聞こえてくる。しかしそれは決して感動から出たものではなかった。

皇帝の新しい后はケチュアの民が理想とする女性像とは程遠かった。棒のように長く細い肢体は見事な赤褐色に染まっている。細い体といっても肩幅は広く二の腕や太腿には見事に鍛えられた筋肉がせり上がっている。細かく編み込んで後ろにきつく束ね上げた髪につられて目尻がこめかみまで吊り上がり、その目つきが刺すように鋭く見える。

ケチュアの一族となるためにいまさっき太陽神殿で誓いを立ててきたばかりだというのに、動物の毛皮をまとった異民族のいでたちはそのままだ。なめした毛皮を体にぴったりと貼り付けるように纏い、そこから長くしなやかな四肢が伸びていた。

貴婦人たちは口に手を当て眉間に皺を寄せて、おぞましいものでも見るような眼で新婦を睨みつけた。そしてひそひそと囁き合った。

その違和感は花嫁も感じ取っているはずだが、彼女はまるで動じず、背筋を伸ばして正面を見据え、堂々と花弁の散らばる通路を歩み出した。はばかることなく顕わになっている長い四肢は優雅に彼女を運んでいく。その姿が野原を駆ける鹿を思い起こさせる。彼女が進んでいくに連れて、大広間にすーっと異国の風が吹き込んでくるような感じがし、その風に当てられた広間の者たちは今までの騒ぎを止めて彼女の姿に見入った。

クシはこの花嫁の姿にひと目で惹きつけられ、その姿から目が離せなくなった。しとやかな物腰を躾けられた貴族の女性ならいくら

でも目にするが、このように野性的な女性には会ったことがない。
クシが思わずその姿をじっと目で追っていると、その視線を感じたのか花嫁の方もクシを振り返って見つめた。
花嫁と目が合った瞬間、クシの心臓がドクンと大きく鳴った。その視線は確かに昨日の成人の儀のあとに自分を見つめていたあの視線に違いない。クシの鋭い感覚がそのことを確信した。

（彼女はどうして私を見ていたのだろう……）

クシが驚いた表情になったのを見て、花嫁は一瞬クスッと口元に笑みを浮かべた。しかしすぐさま無表情に戻って正面を向き直り、何事もなかったかのようにそのまま通り過ぎて行ってしまった。クシはそのとき何ともいえない屈辱感を感じ、思わず唇を噛み締めて俯いた。

皇帝の御前に来ると、一見礼儀など心得ていそうにないこの花嫁が、すっと背筋を伸ばして跪き、ゆっくりと頭を垂れていった。今まで野卑な異民族と思って軽蔑の目で見ていた貴族たちは意外な顔をした。それは、彼女のいでたちからは想像できない優雅な振る舞いだったのだ。
頭を垂れたまま花嫁は、横に従えていた侍女に何やら話しかけた。侍女がその言葉を訳して皇帝と広間の者たちに聞こえるように伝えた。

「キヌア様はこうおっしゃっています。
このたびは偉大なケチュアの皇帝陛下の元に嫁ぐことができたこと、大変嬉しく思います。ケチュア族の仲間入りをした今日この日より、末永く陛下にお仕えすることを誓います」

「うむ」

皇帝は短く答えて頷いたが、それ以上は何も声をかけなかった。明らかにこの若い花嫁に戸惑っている様子だった。

「野生のピューマのようなあの女を飼いならすことなど、父上には到底できないだろうな」

リョケがまたクシを振り返って囁いた。クシは今度は何も返事を返さず、ただ花嫁の後姿をじっと見つめていた。

3、戦士の娘

3、戦士の娘

キヌアは重いショールをうらめしそうに眺めていた。立ち上がると首に幾重にも重ねられた装飾品が肩に食い込んでくるようだ。自分はまるで縄で縛られた家畜のようだとさえ思う。高窓の向こうに広がる青空を見つめて長い長い溜め息をついた。

『姫さまのお気持ちも分かりますが、もうキリスカチェの生活はお忘れになって、早くクスコの生活に慣れることです』

ここに来てからというもの毎日同じ溜め息を聞かされている侍女のティッカが諭した。

『ティッカはもうここに慣れたというの?』

『ええ、ここもなかなか楽しいところですよ。それは故郷で高原を走り回っていたときのような開放感は得られませんが、ここには本当にいろいろな人間がいて、毎日新しい発見がありますから』

ティッカは、キヌアがキリスカチェにいたときから仕えている娘だ。王女と侍女の間柄とはいえ、キリスカチェは上下関係に厳しくないため、まるで親友か姉妹のような関係だった。

ティッカにも、今までの自由を奪われ狭い空間に閉じ込められてしまったキヌアの憂鬱は痛いほど分かっていたが、キヌアに早くクスコの生活に慣れてほしくて、無理に強がって見せた。

『どこへ行ってもすぐに慣れるあなたがうらやましいわ。私はこの数日でもうすっかり年を取ってしまったような気がする……』

ティッカの慰めの言葉も虚しく、キヌアはさらに長い溜め息をついた。

婚礼の日から数日が経った。あの日身に纏っていた毛皮はその日のうちに取り上げられて、代わりにひどく重い分厚い布を体中に巻きつけられてしまった。足くびまである長いスカートが脚に絡み付いて前に進むことさえ儘ならない。いつも後ろにきつく束ねて持ち上げていた縮れっ毛を無理やり引き伸ばして垂らしているため、首や体にまとわりついて鬱陶しいことこの上ない。

さらにキヌアに与えられた部屋は四方を石で囲われて穴ぐらのようだ。陽の光は常に一筋しか差し込んでこない。寝るときにしか建物の中に入らなかったキリスカチェの生活とはまるで違っていた。

儀式のときに大広間で顔を合わせた皇帝とは、それ以来まったく会うことはなかった。

『何もお部屋の中に閉じ篭っていることはないのですよ。せめて外に出てみてはいかがですか?』

心配してティッカがいろいろと提案をする。

『こんな服を着ていては走るどころか歩くことさえ儘ならないわ。この髪も邪魔で仕方ないし。それに外に出ようとすると番兵がいちいちどうしたのかと聞いてきて、面倒なのよ』

あのはつらつとしたキヌアが数日で変わってしまったことに、ティッカのほうが溜め息をつきたくなった。

『キヌアさまは皇帝のお后なのですよ！　番兵が何と言おうと自由に行動していいんです！』

そう叫んでティッカはキヌアのショールを剥ぎ取ると、強引に手を引いて部屋の外に連れ出した。

案の定、番兵がどうしたのかと聞いてきたが、ティッカは「あなたごときに関係のないことです！」と言い切って取り合わなかった。番兵があっけに取られているのを見て、キヌアは小気味良くなってケラケラと笑い出した。

迷路のような宮殿の通路を走り抜けながら、ふたりはスカートの裾をビリビリと裂きはじめた。そして切り裂いた布を使って長い髪を束ねあげる。スカートの裾が無くなり、邪魔な髪を纏めると、カモシカのように軽やかに動けるようになった。故郷の高原を走り回っていた懐かしい感触が蘇ってくる。

やがて狭い通路が途切れ広い中庭へと出た。中庭は青々とした草が生えているだけで、ほかに何もない空間だった。普段貴族たちが武術の練習のために使っている場所だ。

ふたりは大声で笑いながら中庭の真ん中に走りこんでいって勢いよく転がった。倒れこんだ衝撃でたくさんの草がふわっと舞い上がった。草まみれ土まみれの格好でそのままゴロゴロと転がりながらふたりは笑い続けていた。

『ああ楽しい！　そうよ、私は皇帝の后なんですもの！　どんなことをしても許されるはずだわ！　ねえ、ティッカ』

『そうです。キヌアさまはそうでなくては』

ようやくいつものキヌアに戻ったのを見て、ティッカは嬉しくな

った。中庭はかなりの広さがあるが、周囲を石の建物に囲まれた限られた空間だ。しかし今まで石壁の中に押し込まれていたキヌアにとって久しぶりに味わう開放感だった。

ひゅううう

そのとき空を切る音がして何かが飛んできた。幼い頃から武術の訓練を受けてきたキヌアは、とっさに身を翻してそれをかわした。その『物』は、キヌアのすぐ後ろに落ち、ボコッと鈍い音を立てて土ぼこりを舞い上げた。それは狩猟や戦いで使われる綱の両端に石をくくりつけた（ボーラ）と呼ばれる武器だった。誰かがキヌアを狙って投げたのだ。

キヌアは素早くそれを拾い上げ、瞬時に投げた相手がいる方向を見定めて投げ返した。その一瞬でキヌアには自分を狙った敵の影が見えていた。やがて広い中庭のはるか向こうで小さな人影が動くのが見えた。

「何者！」

ティッカがキヌアを庇うように立ちはだかると、大声で叫んだ。小さな人影は観念したのかゆっくりとこちらに近づいてきた。ティッカはキヌアを守りながらその人影に目を凝らす。次第にその姿がはっきりしてくると、ティッカが驚きの声を上げた。

「クシ皇子！」

片手でボーラをくるくると回しながら近づいてきたクシは、名を呼ばれてその場に立ち止まった。

「私を知っているのか？」

「聡明で有能と名高い皇子のことは聞き及んでいます。その皇子がこのような悪ふざけをなさるとは！　しかも皇帝陛下のお后を狙うなどと正気の沙汰ではありませんよ。それともこれがクスコの流儀なのですか！」

ティッカは憤慨して、まくし立てた。

「さすがはキリスカチェの戦士だ。私はその腕前を見たかった」

「だからといって寛いでいるところを狙うとは何と卑怯な！」

ティッカは怒りでワナワナと震え出した。キヌアはティッカを落ち着かせようと、彼女を優しく抱えるようにして自分の横に立たせた。

「皇子、どういうことです？」

まだ覚えたてのクスコの言葉を思い出しながら、キヌアはクシに直接問いかけた。

ケチュア族の者が遠縁にいるティッカはクスコの言葉にも精通している。だからティッカが通訳も兼ねてキヌアの供をしてきたのだ。しかしキヌアはここに来てはじめてクスコの言葉を覚えた。簡単な言葉なら聞いて理解できるほどにはなったが、話すのは容易ではない。

「戦士の実力は不意を狙われたときに発揮される。

キリスカチェ族は老若男女誰もが優れた戦士だと聞いている。その中でも特に（天の女王）の娘は有能だと……」

クシが回していたボーラを止めると、その腕に血が滲んでいるのが分かった。キヌアの放ったボーラはクシの腕をかすっていたのだ。相手の顔も分からないような距離でキヌアは命中させるでもなく外すでもなく絶妙なタイミングで相手に狙いを定めていたのだ。相手が敵だと確信できていれば間違いなく急所を狙っていただろう。

「私を試して何を……」

「別に何も……。ただ有能なキリスカチェの戦士の技をこの目で見てみたかっただけだ。

ついでに、成人の儀で私を探っていた理由も知りたかった」

キヌアはさっと表情を変え、隣のティッカを振り返ると肩を竦めて見せた。

「気づかれていたのね」

ようやく落ち着きを取り戻したティッカがキヌアに代わって説明した。

「キヌアさまは婚礼の前にクスコの様子を見に来られたのです。ちょうどケチュア族の成人の儀が行われており、あの儀式でいまのケチュアの軍事力を窺い知ることもできました」

「それでどう思われた？」

キヌアは視線を下に落としてしばらく考えていたが、顔を上げると口先でふふっと嗤って言った。

「まるで子どものお遊戯のようだった」

「キヌアさま！」

歯に衣着せぬキヌアの言葉に、ティッカがハラハラしながらキヌアとクシを何度も交互に見た。クシは唖然としてキヌアを見つめた。キヌアは構わずに続ける。

「キリスカチェではあれくらいの試練に耐えられない弱い者は生き残れない。ケチュア族は平和な一族だ……」

それを聞いてクシは大声で笑い出した。

「やはり君は素晴らしい戦士だ。クスコにはそんな疑問を持つ人間はひとりもいないよ。……そう、この国は平和に慣れすぎて本当の試練を知らないんだ」

笑ってそう言いながら、最後には悔しそうに目を伏せた。

「この国ではあなたは変わった存在ね。儀式の内容はともかく、あなたの能力には感心した」

「いいや。私は未熟だということが今日よく分かったよ……」

クシが腕を押さえた。さっきボーラを回していた腕が腫れあがっている。キヌアの投げたボーラはクシの腕にかすり傷だけでなく、かなりの衝撃を与えていたようだ。

「まあ、手当てを！」

ティッカがクシの腕を取ろうとしたが、クシは体をねじって腕を

隠してしまった。

「このくらい、大丈夫だ。
敵が反撃できないように、あの距離で、そして一瞬で確実に腕を狙うことができるとは。そんな戦士が存在するとは思わなかった。
お願いがある。どうか私にキリスカチェの武術を指南してほしい」

クシはキヌアの正面に来て跪き、頭を下げた。

「そんなこと、無理です。キヌアさまはケチュアとキリスカチェの架け橋となるために皇帝陛下に嫁いできたのです。皇帝陛下の許可無く勝手なことができるはずないじゃないですか！」

「ほう。勝手に部屋を抜け出し、服を破って、宮殿中を飛び回ることは陛下が許したというのか？」

ティッカは「うっ」と唸ってキヌアを見た。キヌアはケラケラと笑い出した。

「皇帝は……父上は何も言うことはできまい。君を后に迎えたものの、年老いてすっかり臆病になってしまった父上は、勇猛な戦士である君もキリスカチェ族も怖いのだ。
それに君も、これから毎日宮殿の中に篭って暮らしていくことなどできるのかな？」

キヌアは暗い石壁の中でじっとしている自分を想像して吐き気がしそうになった。

「わかった。その話、受けましょう」

クシの顔が輝いた。

「その代わり途中で逃げ出すことは許さないわよ」

久しぶりにキヌアの目が戦士の鋭い光を宿した。

「キヌアさまがここで活き活きと暮らすにはそれが一番良い方法でしょうね……」

ティッカはそう言って苦笑いするしかなかった。

4、　キヌアの教室

4、キヌアの教室

カツ、カツ、カツン……。

早朝の中庭に響く音でリョケは目を覚ました。空はまだ薄暗い。

「相変わらず、熱心だな……」

ぼやいて再び寝付こうとしたがうまくいかず、結局起き上がってマントを羽織ると、中庭に行ってみることにした。

朝もやの中に二人の人影が見えた。向かい合った人影は中庭の中心でゆっくり回るように歩きながら、、近づいたり離れたりしている。近づいたときにお互いの持つ石斧をかち合わせる乾いた音が、静かな宮殿に響いているのだ。

リョケは中庭の隅に腰掛けてその二人の動きをぼんやり眺めていた。

「クシと、キリスカチェから来た側室か……」

突然後ろから声がして、リョケは驚いて振り返った。兄のアマルが腕を組んで立って同じようにもやの中の人影を見つめていた。

アマルはすでに独立して王宮の外に自分の館を構えている。将軍職にある有能なふたりの武将とともに、クスコの軍部を執り仕切る重要職に就いている兄は、このところやけに忙しいようだ。毎日の

ようにまだ夜の明けきらないうちから宮殿に出向いて軍部の会議に顔を出す。軍部とは違う役職にあるリョケには兄の仕事について余計な口出しすることはできないが、兄が早朝にここにいること自体、あまり穏やかな状況ではないということは察することができる。

「兄上。おはようございます。随分とお早いことで……。もう何日になりますか。ああやって毎朝稽古しているのですよ」

「クシも妙なことを考えたものだ。異部族の女に武術を教わろうとは……」

「女と言ってもキリスカチェの戦士ですからね。腕前は確かな筈です」

「しかしあの女はケチュアとの和平の証として皇帝陛下に嫁いできたのであって、武術の指導に来たのではない」

「そんなことはクシも彼女も百も承知ですよ。皇帝陛下の后であるのは事実なのですから、逃げ出そうとしない限り、彼女が何をしようと、とやかく言うことはできません。

それどころか、クシのお蔭でかえって父上もほっとなさっているのではないですか？　何せあの女戦士を娶ったものの、どう扱ってよいのか分からず、未だに彼女に会おうともなさらないのですから。クシが彼女の相手をしてくれるのでキリスカチェの機嫌を損ねずに済んでいるのですよ。もちろん、クシは純粋に武術を教わりたいだけでしょうけど」

「なんという物言いだ、リョケ！」

「本当のことです」

リョケは、すっかり老け込んでしまったかつては勇猛だった父王に苛立っているのだ。アマルにも同じような思いがないわけでもないが、あまりにもあからさまな事を言うリョケを睨みつけた。

「いくら自由が許されているとはいえ、皇子と側室が早朝に二人きりで会っているなど、ほかの貴族たちに知られたらどのような噂が立つか分かったものではない。クシにあまり派手なことをするなと申し伝えておけ、リョケ！」

そう言い捨ててアマルはその場を後にした。リョケは顔を顰めて兄の後姿を見送った。

アマルは冷静沈着で思慮深い。それを買われて今の重要職に就いているのだが、実は保身的で事を荒立てるのを好まないだけなのだ。あの兄にはウルコから王位継承権を奪おうという気概はなく、ウルコが皇帝の座に就いたあとも、何食わぬ顔で従順に仕えていそうだ。兄の姿が消えたあと、リョケは脇にペッと唾を吐き出した。

クシは必死だった。

――この戦士にはまだ敵わない――

向き合ってみると、ますます相手の強さを思い知り、今まで誰よりも強いと称されてきた自分が恥ずかしくなった。しかし同時にそれは喜びでもあったのだ。高い位置にいる彼女に追いつくという新たな目標ができたのだから。

必死になって斧を振り回すクシとは対照的に、キヌアは斧を持つ腕をダランと下げたまま、ただするするとクシの攻撃をかわす。そしてときどき自分の正面に来たクシの斧を自分の斧で軽く受け止め

る。しかし自分のほうからクシに攻撃をしかけることはしなかった。彼女が薄ら笑いを浮かべているようにさえ思えてくる。クシは余計に焦り苛立った。

キヌアの視線が一瞬横に逸れた。その瞬間をクシは見逃さなかった。今までの苛立ちを全てぶつけるように、渾身の力をこめて斧を振り上げた。

リョケの視線の先で、朝もやの中のひとりが「うっ」と声を上げて倒れこんだ。リョケは慌ててそちらに駆け寄った。クシが腕を押さえてうずくまっていた。

「なんと、クシが倒されるとは！」

「兄上、見ていらしたのか！　恥ずかしい」

恥ずかしいというよりも、悔しいというのが強いのだろう。クシは唇を噛んで拳で地面を思い切り叩いた。

キヌアは座り込んでいるクシを見下すような格好で立ち、彼の目前に斧を向けた。

「私の隙をついたと思ったのでしょうが、あなたの動きはすべて見えていましたよ。クシ皇子。

焦れば焦るほど視野が狭くなるものです。戦いは力だけで勝てるものではない。全神経を研ぎ澄ませて自分の周りの空気を読み取ることが大切なのです。常に命がかかっていると思えば自然と感覚が鋭くなるものですよ」

「悔しいが、私には勉強することが山ほどあるようだ」

クシはそのまま手足を投げ出して地面に転がった。

「少し休みましょう」

キヌアも自分の斧を置こうとしたとき、

「キヌアどの、私と手合わせしてくれまいか」

と言って、リョケがクシの斧を拾ってキヌアに向かって突き出した。

「ええ、どうぞ。手加減はしませんよ」

キヌアはニッと笑って、またゆっくりと斧を構え直した。

筋肉質のしなやかな体躯にぴったりと張り付くような服を着ている。キリスカチェ族が着る毛皮をクスコでしかも宮殿内で着ることは許されない。しかしクスコの女物の服といえば、裾も袖も長いものばかり。この稽古のためにわざわざ侍女に仕立てさせたのか、あるいは長い服の袖と裾を切って腰紐でぴったりと巻いたのだろうか。いずれにしてもその特別な服を着て、長い髪の毛をしっかりと纏め上げたキヌアは非常に好戦的に見えた。キリスカチェの伝統であり相手を威嚇する目的のある、眉間や頬や手足に刻まれた刺青が、余計に攻撃的に見せている。

「私はクシと違い、戦の覚えがある。こちらも容赦はしないぞ！」

リョケはキヌアの迫力に気圧されないように凄んで見せた。クシよりも五つ年上のリョケは、確かに辺境の部族との小さな諍いに出征したことがあるのだが……。

リョケは斧を担ぐように構えると、キヌアに突進していき、彼女の頭めがけて「やぁっ」と斧を振り下ろした。斧の刃先が額を掠めたかと思われた瞬間、キヌアは素早く身を引いた。

全身の力を込めて斧を振り下ろしたため、リョケは勢いを止めることができず、躓いてよろけた。前のめりになったリョケの首筋にキヌアが肘てつを加える。リョケは目の前が真っ暗になりそのまま顔から倒れこんでしまった。

すぐさまキヌアが倒れたリョケの両肩を掴んでグッと力を入れる。リョケはすぐに目を覚ました。

「兄上、なんと無様な！」

泥だらけの兄の顔を見て、クシはお腹を抱えて笑い転げた。

「キリスカチェの戦士は聞いていた以上の腕前だ」

「腕前？　私の腕前をお見せする前に倒れておしまいに……」

「やあ、これは……そうであった。すまん！」

リョケが頭を掻いて笑う姿を見て、キヌアも笑い出した。ひとしきり三人で笑い合うと、リョケがキヌアに切り出した。

「キヌアどの、貴女の指導をクシに独占させておくのはもったいない。ほかの貴族の子どもたちも指導していただけないか」

「私が？　私は子どもの相手などしたことがないので、できるかどうか」

「子どもと言っても、成人式を迎える直前の少年たちだ。ケチュア

の未来の戦士を育てるために協力していただきたいのだ」

「兄上、その申し出はあまりにも大胆です。皇帝の側室である彼女に、公に武術の指導をしてほしいとは」

クシが口を挟むと、リョケはクシを睨みつけた。

「大胆なのはお前の方だろう。いくら武術の練習とはいえ、側室と皇子が二人きりで会っていては、どのような噂を立てられるか分かったものではない。彼女が正式な指導者であれば、お前も堂々と習うことができるではないか」

「なんという下世話な勘ぐりだ。大人はそのようなことを疑うのか！」

クシは横を向いて拗ねた。

「クシ、貴族たちがいまウルコを擁護する派と改革派に大きく分かれて反目し合っていることはお前も知っておろう。まだお前には理解できないのだろうが、われらを陥れようとする者たちはどんな些細なことも醜聞に仕立てようとするのだ。慎重に行動せねばならない」

リョケはキヌアの方を向き直ると続けた。

「キリスカチェとケチュアが手を組んだのは、大国の脅威に備えるためだ。しかし貴女も気付かれたと思うが、われわれはしばらく大きな戦いを知らずに来たので若い世代は戦い方を知らぬ。今、大国に攻められればまともに戦える戦士はいないのだ。

父王も皇太子もキリスカチェと手を組んだことで安心しているが、

それは大きな間違いだ。貴女がここで戦士を育てればクスコに来た意味が大いにあるというものだ」

それを聞いてキヌアは目を閉じ額に人差し指を立てて考え込んだ。しばらくの間そうしてから、ゆっくり顔を上げると言った。

「私にその大役が務まるか分かりませんが、お引き受けしましょう。しかしお二人にも私の侍女にも手伝ってもらわなければなりませんが」

「それはありがたい！　キヌアどの、是非頼む」

リョケはキヌアの肩を掴んで頭を下げた。キヌアは微笑んで頷くと、リョケとクシを見て言った。

「キヌアと呼んでもらって結構です」

しかしクシは難しい顔をして考え込んでいた。彼は兄の話の中にあった重要な部分を聞き流してはいなかったのだ。

「兄上、大国の脅威とは、もはや単なる危惧ではないというのですか」

「危惧に終わるかもしれないし、そうでないかもしれない。いずれお前自身も現状を知る時が来るだろう」

空が明るくなり、三人の姿を朝焼けが真っ赤に染めていく。やがて不穏な朱い太陽が静かにクスコの街全体を照らしていった。

数日後、宮殿の中庭に貴族の少年たちが大勢集められ、キヌアの教室が始まった。

面白いことに、婚礼の儀で蔑む様な目でキヌアを見ていた貴族たちも、クシを負かすことのできる女戦士から直々に自分の子どもを教えてもらえるとあって、競って子どもを参加させようとした。故にこの教室に反対する声など上がる隙はなかったのだ。

すべてはリョケの巧みな触れ込みのお蔭だった。

あまりの評判にキヌアだけでは到底手が足りず、侍女ティッカとクシとリョケもその対応に大わらわだ。

派手なことをするなと伝えておいた筈なのに全く逆の状況になってアマルは頭を抱えたが、今更どうすることもできなかった。

「リョケ兄さまは、悪知恵にかけては天下一品なのだ」

クシがキヌアに囁くと、キヌアは噴き出した。

「皇子、私にも手伝わせてもらえないか？」

後ろから声をかけられて二人が振り向くと、成人の儀でクシと一緒に合格したワイナが立っていた。ワイナは成人の儀からそれほど経っていないというのに、見違えるような逞しい体つきになっていた。日に焼けた黒い肌がそう見せているのかもしれない。

彼は儀式のあとすぐに、自ら願い出て辺境の視察団に付いて西の外れまで行っていたのだ。

「ワイナ、戻ったのか？」

クシは喜んで親友に飛びついた。

「ああ、ちょうど昨日帰ってきたところなのだ。この面白いことに皇子も絡んでいると聞いてね。是非私も参加したいと思ったんだ」

「それは心強い！」

クシがワイナを紹介すると、キヌアは

「ええ、よく存じ上げています」

と言って笑った。それもそのはず、キヌアは成人の儀の様子をすべて見ていたのだから。クシとともに合格した赤い羽根の少年を知らない筈はない。しかしそんないきさつを知らないワイナは不思議な顔をした。

「勇敢な青年ワイナの噂は、キリスカチェまで届いていたそうだよ」

冗談めかしてそう言うと、クシはキヌアの方を見て肩をすくめて見せた。

クスコの宮殿に活気が戻ってきたのは何年ぶりだろうか。戦いを忘れ、意味も分からずに形式だけの稽古をしていた少年たちは、部族を身をもって守ろうとしてきた戦士キヌアの気迫に触れ、意欲が湧いたらしい。今まで嫌々訓練を受けていた少年たちの目が皆輝いていた。

そんな少年たちを見て、クシやリョケやワイナも身の引き締まる思いがした。自然と指導にも熱が入る。

中庭に元気な子どもたちの掛け声がこだまする。自分の子どもを見守る親たちだけでなく、子どものいない貴族や貴婦人たちもその

様子を興味深々に見に集まってきた。
キヌアを侮蔑していた貴婦人たちも、自分たちとは違う特技を持つキヌアに対して見る眼が変わったようだ。逆に憧れるような眼差しで彼女を見つめていた。

毎日賑わう中庭の様子を見ていて、面白くないのはウルコだ。ただでさえ、クシの成人式から『ウルコさまの式のときとは大違いだ』と噂する声を耳にして苛立っていたのだ。
皇帝には「側室が勝手なことを始めたのですが、あのまま放っておいて良いのですか」と告げたが、関わるのが面倒な父王は「皆が必要だと思うのなら、それでいいのではないか」と全く煮え切らない。
ウルコの視線は常に、キヌアの教室でも中心的な存在であるクシに注がれていた。

「あいつがすべての元凶だ。この平和なクスコに余計な揉め事を持ち込む。いつか思い知らせてやらねば」

キヌアの教室が開かれてから特に、ウルコのクシに対する恨みが募っていった。今やクシを陥れる計画を練ることで彼の頭の中はいっぱいだった。

ウルコの気持ちを他所に、キヌアの教室は連日大賑わいだ。
生徒たちの一番の楽しみは稽古のあとに行われるクシとキヌアの合わせ稽古だった。少年たちの指導が終わると、クシの指導を兼ねてキヌアとクシが合わせ稽古をするのが日課になっていた。生徒たちはその試合の観戦を心待ちにしているのだ。小さな観客たちに囲まれて対戦するふたりは緊張を隠せない。少年たちは皆、憧れのクシに勝ってほしいと応援する。
しかし何度対戦しても、クシが一方的に攻撃をしかけ、キヌアが

それをかわして最後に一撃を加えるという態勢は変わらなかった。大勢の小さな観客がいる手前、クシに恥をかかせまいとしてキヌアが負けてみせることもあった。少年たちはクシが勝つと大歓声を送ったが、クシにとってこれほど屈辱なことはなかった。しかし、屈辱感を味わう度にクシの腕は少しずつ確実に上がっているのだった。

いつかキヌアに追いつき追い抜こうと、クシはひたすら練習に励むのだった。

5、狩り　（その1）

5、狩り

ざわざわと騒がしく、朝から宮殿中が落ち着かない。大勢の走り回る音、話し声、ときどき怒鳴りつける声も聞こえてくる。そんな喧騒を他所に、クシはひとり部屋の中で作業に没頭していた。

拳ほどの石を細かく編み上げた縄で包みしっかりと固定する。そこから一筋の縄を伸ばし、その反対側にも同じように石を結わえ付ける。片腕を伸ばしたくらいの長さの縄の両端に同じ大きさの石が均等に結び付けられたもの、（ボーラ）と呼ばれる道具を、昨晩からもう十数個仕上げた。

最後のボーラの縄をしっかりと引き締めて準備を完了させると、それらを束ねて腰に提げ、肩に斜めに掛けたたすきに挟むようにして背中に小ぶりの石斧を携えた。

部屋を出ると宮殿内の騒ぎがますます賑やかに聞こえてきた。皆が慌ただしく動き回っている中を、クシは悠々と歩いていた。

その日は、年に一度、貴族たちが揃って狩りを行う日なのだ。それなりの地位のある者たちは大勢の侍従を遣って狩りの支度をする。主人のために侍従や召使いが粗相のないようにと必死で走り回っているのだ。

成人したばかりのクシは、初めてこの行事に参加することを許された。新参者の若い皇子には代わって支度をしてくれる侍従などいない。しかし自分の納得のいくように準備するほうがよほど楽だ。

ばたばたと走り回っている侍従、召使いたちを横目に見ながら、クシはつくづくそう思った。

宮殿の出口に続く広い廊下を歩いているとき、突然見知らぬ女性が声をかけてきた。

「大物を仕留められるといいわね」

クシは怪訝な顔で女性を見る。

女性にしてはやけに背が高く、そのせいで着物の丈が合わずに、本来隠れるはずの細い足首がむき出しになっている。体つきもこれまた女性らしくなく頑丈そうで、随分と肩幅があるので裄(ゆき)がきつそうだ。無造作に垂らした長い髪にはあまり艶がなく、縮れて大きく広がり顔を半分隠している。優雅な宮殿の貴婦人とはとても思えない。

はて、どこで会ったのかと考えを巡らせながら、しばらく女性の顔を見つめていると、彼女の背後から見慣れた顔の女性が声をかけてきた。

「クシ皇子。今、狩りのお見送りに行くところだったのですよ」

そう言ったのはティッカだ。

「さあ、行きましょう。キヌアさま！」

「キヌアなのか？」

クシは驚いて、女性の顔をしげしげと覗き込んだ。

顔の左右に垂らした髪の毛に隠れてよく分からなかったのだが、彼女が軽く首を振って髪が払われると額や頬に小さな刺青があるの

が分かった。よくよく見ればその顔は確かにキヌアのものだった。

「ほら御覧なさい、ティッカ！　私、やはり広場には顔を出さないわ！」

キヌアはすっかりふてて、踵を返すと自分の部屋に向かって歩き出した。

「キヌアは狩りに参加しないのか？」

勢いよく振り向いて、キヌアが怒鳴った。

「女は参加してはいけないそうよ！　盛装をして殿方を送り出すのが慣わしなんですって！」

狩りには誰よりも自信のある自分が女という理由だけでどうして参加できないのかと目で訴えている。さらに慣れない着物は窮屈なうえ似合わないこともよく分かっていて、その姿で人前に顔を出したくないのだろう。

毎日武術の指導をしているキヌアがクスコの女性用の着物を身につけることは今までほとんどなかったので、おそらくキヌアの丈に合う着物の用意が間に合わなかったのだ。

ぷいっと後ろを向いて歩き出したキヌアの腕をクシが追いかけて捕まえた。

「良い所がある。ティッカも一緒に来てくれ」

クシはキヌアの腕を無理やり引っ張り、廊下の奥へと歩き出した。

「何を！」と言いながらもクシに引かれるままにキヌアも付いていく。ティッカが慌ててその後を追った。

長い廊下の突き当たりに広い部屋があった。立派な構えの部屋だが人気はない。中へ入るとすべてがこぎれいに整理されていて、今さっきまで部屋の主が身支度をしていたかのように、身につける様々な物が並べられていた。きれいに畳まれて重ねられた色鮮やかな織物や美しく輝く銀や青銅の装飾品は、その部屋の主が女性だったことを物語っている。

「ここは一体……」

「私の母の部屋だ」

「母……と言うことは、皇后さま？　勝手に入ったことが知れたら……」

ティッカが怯えて後ずさった。

「母は私が幼い頃に亡くなった。この部屋には母の遺品がそのまま置いてあるのだ」

キヌアは美しい織物や装飾品にうっとりと見入った。

「この中に、どれかキヌアに似合うものが見つかるかもしれぬ」

クシはあれこれと物色すると、積み上げられた織物の一番下にある薄手の布を引っ張り出した。

「キヌアにはこれが合いそうだ」

クシが手にした小さい長方形の布には、極彩色の模様が細かく織

り込まれている。

「この頭巾を被れば髪が気にならないだろう」

クシはキヌアを石の寝台に座らせると、頭にその布を軽く掛けた。ティッカがクシに替わって布をキヌアの頭に押さえつけると、広がった髪を丁寧にまとめて頭巾の中に押し込み、布に付けられた細い紐を顎の下で縛って固定した。

「まあ、キヌアさまのお顔の色によく似合って素敵だわ！」

ティッカは自分で作った作品を眺めるように、キヌアの顔を見て感嘆の声を上げた。そうしている間にもクシはまた部屋の中を探し回って、今度は厚手で大きめの布と青銅製の長いピンを持ってきた。

「着物の丈が合わないのは、このショールを掛ければ目立たないだろう」

クシから受け取った布をティッカが広げてみると、それはキヌアが被っている頭巾よりもさらに色彩豊かな模様が織り込まれた大判の布だった。キヌアもティッカもその色の鮮やかさに思わず揃って溜め息をついた。

「クシ、亡くなった方とはいえ皇后さまの物ですもの。勝手に持ち出せばすぐに分かってしまうわ」

心配そうに言うキヌアにクシは首を振った。

「大丈夫。これらは母が自分には似合わないと言ってほとんど身につけたことがなかった物なのだ。この青銅のピンも、皇后が公で身

につけるものは銀と決まっているから、人前でつけることはなかった」

クシがキヌアの肩に布を掛けると、ティッカが丁寧に前を重ね、ピンを刺して留めつけた。

「キヌアさま、お立ちになって」

ティッカに促されてキヌアが立ち上がると、クシとティッカが同時に「おお！」と声を上げた。

先ほどまで鬱陶しく顔に掛かっていた髪の毛を色鮮やかな頭巾が覆って、キヌアの日にやけた凛々しい顔を際立たせていた。丈の合わない不恰好な着物はすっぽりとショールに隠れ、その極彩色の模様がキヌアの長身の体をかえって引き立てている。

「これなら外に出るのも恥ずかしくないだろう」

「恥ずかしくないどころか、ほかのご婦人よりもずっと美しいですよ！」

クシとティッカは、キヌアをままごとの道具にして遊ぶ子どものようなはしゃぎようだ。ふたりのおもちゃにされているようであまり気持ちは良くないが、いつまでも拗ねて篭っているわけにはいかない。キヌアはふたりに抱えられるように広場へと向かった。

広場では、黄金で装飾された皇帝の輿の周りに大勢の貴族が集って出発を待っていた。その周りでは歌や楽器が奏でられてお祭り騒ぎだ。

クシが遅いのであちこち捜し歩いていたリョケが、広場に入って

きたクシをいち早く見つけて駆け寄った。

「婚礼の儀のときといい、お前というやつは！」

文句を言おうとしたが、クシの後ろに立つ女性を見て言葉を切った。

「クシ、こちらの方は……」

クシはティッカと顔を見合わせてクスクスと笑った。その様子を見てリョケは女性に向き直り、驚いた顔で頭から足先まで何度も視線を往復させた。

「まさか、キヌアなのか？」

クシとティッカが同時に深く頷く。キヌアは恥ずかしそうに顔を伏せた。

「ほう。なんと見違えた。どうやって化けたのだ？」

近づいてそう言ったリョケの脛をキヌアが思い切り蹴飛ばした。ショールの中でビッと着物の裾の裂ける音がすると同時に、リョケが脚を抱えてうずくまっていた。

狩りに出る男たちの列を女たちが左右に並んで見送る。特に皇帝の輿の右側に居並ぶ側室たちの列は華やかだ。ウルコの母を先頭に順々と若い后が並んでいる。

輿がゆっくりと進んでいく間、見送る側室たちの顔をひとりひとり眺めていた皇帝は列の最後に並んだ后に思わず目を留めた。驚い

た顔になった皇帝は、輿が行き過ぎても振り返ってその后を見つめている。輿のかなり後ろの方を歩いていたクシとリョケにも、皇帝の表情の変化が見て取れた。

「これで父上も、キヌアを少し見直してくださるといいのだが……」

リョケの言葉にクシも頷く。ちょうどふたりはキヌアの横を通り過ぎるところだった。ふたりが手を上げると、キヌアはショールの陰から片手を出し、力強く握って見せた。そして二人に鋭い視線を送りながら深くゆっくりと頷いた。

「私の分まで大物を捕らえてこいと言っているぞ！」

「格好は変わっても、中身はそう簡単に変えられるものではないな……」

クシとリョケはそう囁きあってクスクスと笑った。クシがその応援に答えるようにキヌアに向かって同じように拳を握って頷くと、キヌアは柔らかな表情に戻ってにっこりと頷き、ショールの陰から出した手を小さく振った。

クスコからだいぶ離れ、一行は見渡す限り丈の低い草しか生えていない広大な平原に着いた。

周囲が広く見渡せる場所にすみやかに天幕が張られ、下ろされた輿が据えられて、そのまま皇帝の玉座になった。皇帝の天幕の周りに貴族たちは各々天幕を張り、自分の持ってきた道具を点検し、どの辺りで狩りをするかを仲間と話し合った。

最大の見せ場は狩りの最後に行われる。目星をつけた大型の獲物

を貴族たちが一斉に追いかけ、罠に追い込んで捕らえるのだ。立派なリャマや鹿を総出で追いかけていく様は壮観だ。

しかし大掛かりなその猟が行われる前に貴族たちは各々小型の動物を獲りに行く。特に初めて参加した者は、そこでどのような動物を捕らえたかによって、古参たちに自分の実力を見せ付けることができるか否かが決まるのだ。

新米のクシは同じく新米のワイナと顔を突き合わせて何を狙おうかと作戦を立てていた。

そのとき突然、クシのいる天幕へ大勢の侍従を引き連れてウルコがやってきた。

「お前たちは今日が初めてなのだ。あまり気負うでないぞ。何も捕らえられなくて当たり前なのだ。ウズラ一羽で十分。ビスカッチャ【野うさぎの一種】など捕らえたら大したものだからな。グァナコ【鹿くらいの大きさの動物】を狙おうなどと考えるでないぞ。せいぜい大怪我をして終わりだ」

ふたりを覗きこんで馬鹿にしたようにそう告げると、ウルコは高笑いをしながら自分の天幕へ戻っていった。

「今に見ていろ。グァナコでもリャマの群れでも、あいつに獲れないものを獲って驚かしてやる！」

ウルコの言葉でクシがひどく興奮し出したことに気付き、ワイナは慌てて忠告した。

「皇子、皇太子の口車に乗ってはいけない。皇子の気持ちを煽って恥をかかせようとしているのだ」

「私が気負って何も獲れなくなるとでも思うのか、ワイナ。失敗しなければ恥をかくことなどない。ウズラしか獲れずに終わったら、あいつは私を馬鹿にしてあざ笑うだろう！」

そう言うと、クシは斧とボーラをひっつかんで広い平原へと駆け出していってしまった。　残されたワイナは嫌な胸騒ぎを覚えたが、クシに限って失敗することはあるまいと思い直し、自分の獲物を探しに行った。

5、狩り（その2）

その日は穏やかな良い天気だったが、平原にはほとんど動物の姿が見られなかった。狩りの腕には自信のあるアマルやリョケでさえウズラ一羽すら仕留めることができず、高原を彷徨っていた。誰よりも早く出発したクシはそんなことなど知らない。自分のアタリの付け方が悪いのだと考えて、平原のずっと先まで獲物を探して歩いていった。

皇帝や貴族たちの天幕もすっかり視界から消え、ほかの貴族たちの姿もどこにも見えない。クシはいつのまにかひとりぼっちになっていた。しかし誰にも知られないうちに大きな獲物を捕らえられるかもしれないという期待で胸が高鳴り、不安などまったく感じていなかった。

行く手にみすぼらしい小屋が何軒か寄り集まって建っているのが見えてきた。ほんの数家族が暮らす小さな集落なのだろう。

しかし小屋に近づいてみると人の気配はまったくなく、どの小屋もうち捨てられたあばら屋のようだ。住人はとっくにここを捨ててどこかへ移り住んだのだろう。今は人が住んでいないにしてもかつて集落があったということは、狩りに適した平原を逸れてしまったのだとクシはがっかりした。

来た道に引き返そうとしたとき、すぐ脇にある潅木の茂みが揺れて、ひとりの老人が姿を現した。老人はひとり集落の周りを散歩でもしていたのだろうか。クシの姿を見て目をまんまるにして驚いた。そして貴族の身なりをしたクシを畏れ、慌てて跪き、頭を地面に擦り付けた。クシはあまりにも恐縮している老人に優しく声を掛けた。

「私は狩りの途中で誤ってここへ迷い込んでしまったのだ。ほかには誰もいない。そんなにかしこまることはない。面を上げてくれ」

老人は恐る恐る顔を上げて、上目遣いにクシを見た。

「今日は獲物がまったく見つからないのだ。どこかでリャマの群れなど見かけなかったか？」

クシは老人の緊張を解こうとわざと親しげに声をかけてみた。老人はしばらく無言でおどおどとクシを見上げていたが、何かを決心したように腰を浮かせると、クシに縋り付いてきた。

「貴方さまならわしらの村を救ってくださるかもしれない。実は、わしらの村の畑が黄金のビクーニャ【グァナコと同じく鹿くらいの大きさの動物】に荒らされて困っているのです。追い払っても追い払っても何度もやってきて、作物の芽はほとんど喰い尽くされてしまいました。わずかに残る作物の芽を喰われてしまったら、わしらはみな飢え死にしてしまいます。そうなればこの村と同じように滅びるしかありません。

ビクーニャは神の遣い……捕らえたことが知れれば死罪です。わしはこの老いぼれの命を捧げて村を救いたいと思い、ビクーニャを追いかけてきたのです。しかしあのすばしっこい動物をどうやったら捕らえられるのか思案に暮れておりました。しかし貴方のように立派な方なら……。どうか、わしの代わりに黄金のビクーニャを捕らえていただけませんか？」

老人は哀願するようにクシの服の裾を掴んだ。

「しかし……貴族であってもビクーニャを捕らえるのは特別に皇帝

の許可を得た者でなくてはならないのだ。それは難しい相談だ」

「捕らえたビクーニャを皇帝に献上すればお赦しを得ることもできましょう。わしら庶民には決してできませんが、貴族の方なら皇帝に差し出すことは可能でございましょう」

「例え皇帝に差し出したとしても、許しを得ずに捕らえたことには変わりない。そのようなことが赦されるかどうか……」

「ここに迷ってこられたあなたを、わしは勝手に天が遣わした救い主だと思い込んでしまいました。しかし無理なお願いなら諦めるしかない。わしがうまく捕らえてひとり罪を被るか、そうでなければ村人はこのまま飢え死にするのを待つほかはないのでしょうな……」

老人は縋り付いた手をするするとクシの脚に沿って下ろし、そのまま地面についてその上に顔をうつ伏した。

クシは老人がうつ伏したまま肩を震わせて泣くのをしばらく見下ろしていたが、溜め息を深くつくと、しゃがんで老人の肩に手を置いた。

「ビクーニャはどの辺りにいるのか、案内してくれ」

老人ははっと顔を上げると、クシの腕を掴んで今度は嬉し涙を流した。

「ありがとうございます。ありがとうございます」

目の横にある大きなホクロがますます老人を憐れに見せて、クシは助けてやらねばという使命感にかられた。

老人に連れられてクシは集落を越え、さらに向こうに続いている平原へと歩いていった。

遥か向こうのほうに二頭のビクーニャが草をはんでいるのが見えた。太陽に照らされて、繊細な体毛に覆われたその動物は黄金に輝いているように見える。その姿は太陽神の遣いと呼ぶにふさわしい。ビクーニャの毛はどの動物の毛よりもなめらかで美しいので、その毛織物は皇帝しか身につけることを許されていないのだ。

「あの二頭です。ビクーニャは敏感で逃げ足が速い。慎重に近づいてください」

老人が親切に教えてくれるが、クシは緊張から返事も返せず手にじっとりと汗をかいていた。ボーラが滑らないようにしっかりと手に巻きつける。

「あとは任せて、そなたは後ろに下がっているがいい」

クシは草の蔭に身を潜めながら、少しずつ少しずつ獲物に近づいていった。ビクーニャは相変わらずのんびりと草をはんでいる。

ボーラが届く距離まで近づいたとき、一頭がさっと顔を上げて耳を立てた。クシが素早くボーラで頭を狙う。ボーラが見事に命中して一頭目が倒れ込む前に、二頭目は向きを変えて走り出した。二頭目の足を目がけてクシはボーラを放つ。縄の両端にくくりつけられている石が遠心力でビクーニャの後ろ足にくるくると勢いよく絡みついた。

後ろ足にボーラを絡ませたまま、ビクーニャは疾走を続けるが、動きは明らかに鈍い。もうひとつの後ろ足に向けてボーラを放つとボーラが引っ掛かり、そのまま横の脚も一緒に締め上げてビクーニャの動きを止めた。両後ろ足を縛り上げられ走ることのできなくな

ったビクーニャは、前足をいざるように動かしたが自分の身体の重みでそれ以上進むことができずにその場に倒れ込んだ。
クシは素早く駆け寄って、一頭目の喉を斧で切りつけてとどめを刺し、さらに二頭目にも走り寄ってその体を押さえつけとどめを刺した。汗を拭いながら初めて自分で捕らえた獲物を眺めた。
神の遣いと呼ばれる神聖な動物を二頭もその手にかけたことへの罪悪感は、村の人を救ったという正当性と俊敏な動物をひとりで仕留めたという高揚感が覆い隠し、そのときのクシには感じられなかった。
この大きな獲物はあとで遣いの者をよこして皇帝の天幕へ運ばせよう。一度天幕へ戻って事の次第を話さなければ……。そんなことを思いながらビクーニャを縛り上げ、老人のほうを振り返ったとき、はるか向こう側でこちらを眺めている老人の後ろに、ウルコと侍従たちが揃って立っているのが見えた。

一番の見せ場となるはずの囲い込み猟も、その日はまったく成果を得られなかった。唯一迷い込んできたグァナコにまんまと逃げられ貴族たちはみな意気消沈していた。狩りの成果は国の運命を占うことにも繋がる。貴族たちの中には狩りの不猟とは別の不吉な何かを感じている者も多かった。

ワイナがやっと捕らえた野ねずみを袋に詰めていると、リョケがやってきて声を掛けた。

「ワイナ、クシと一緒ではなかったのか？　囲い込み猟のときにも姿が無かったのだが……」

「はい。クシ皇子は私よりもずっと早く出発しましたが、まだ戻ってきてはいません。天幕を出る前に皇太子さまに声を掛けられ、大

物を捕まえて見返すのだと大変意気込んでいましたから」

「勇み足をしていなければいいのだが……」

リョケの表情が曇った。

皆が帰り支度を終えても、ウルコとクシだけはなかなか戻ってこなかった。皇帝がふたりを置いて出発せよと命令したとき、クシがこちらに向かってくるのが見えた。

「クシ！」

リョケとワイナが駆け寄ろうとしてはたと止まった。クシは両腕を後ろ手に縛られ、ウルコの側近がその縄を持って付いてきている。さらにその後ろからウルコと侍従たちがぞろぞろとやってきた。侍従たちは二頭のビクーニャの死骸を抱えてよろよろと歩いてきた。

皇帝の輿の前に来ると、クシはウルコの侍従たちによって罪人のように跪かされた。クシの横にはビクーニャの死骸が並べられた。貴族たちは呆然と立ち尽くしたまま、その様子を見ている。

「これは一体……」

皇帝が目の前の光景の意味を理解できずに呟いた。

「こ奴は、恐れ多くも神の遣いであるビクーニャに手をかけたのでございます！」

ウルコが声を張り上げた。

「クシ、何故このようなことをした……」

皇帝はクシの凶行をまだ信じられない様子だ。

「ビクーニャの毛を皇帝陛下に献上するつもりでした」

「それなら何故先に陛下のお赦しをいただかなかったのだ」

ウルコが腕を組みクシを見下して言う。

「このビクーニャに畑を荒らされて困っている村人がいたのです。その退治も兼ねて捕らえようと思ったのです」

「それはこの老人か？」

ウルコは侍従が連れてきた老人を前に引き出すように命令した。皇帝の御前なので、老人は素早く侍従たちに頭を押さえつけられた。

「皇子の言うことは本当か？」

頭を押さえられたまま、老人は苦しそうに話す。

「い、いいえ。私はこの方に獲物がいる場所を教えるように脅されて……。ほかに何もいなかったので、仕方なくビクーニャのいる場所を教えてしまったのです」

クシははっと顔を上げて俯いている老人の背中を見つめ、次にウルコを睨みつけた。

――　嵌められた！　――

「貴族の立場を利用して、なんという横暴なことを！」

ウルコが大げさに驚いてみせた。

「クシ、ビクーニャが神の遣いであることを知らなかったとは言わせないぞ。ビクーニャを殺せばどのような罪が待っているのかも承知であろう」

皇帝が静かに問いかける。クシがここで言い訳をしたとしても証拠はない。仕方なくクシは無言で深く頷いた。

クスコに帰ってきた貴族たちの列を、送ったときと同じように后や召使いたちが並んで出迎えた。

キヌアも窮屈な着物やショールを一日脱がずに我慢し、ようやく出迎えの時間がきてホッとしていた。

宮殿前の広場を皇帝の輿が通り過ぎ、次に貴族たちが獲物を抱えた侍従を従えてぞろぞろと通り過ぎ、宮殿の中へと入っていく。

キヌアは自然とクシの姿を探していた。

ウルコ、アマル、リョケの一団が通り過ぎていった。リョケが通り過ぎるときにキヌアと目が合い、眉間に皺を寄せて辛そうな顔を見せた。キヌアはさっと顔色を変え、今度は必死でクシの姿を探した。

大勢の貴族と従者が後から後からやってくる。しかしどこを探してもクシの姿が見当たらない。列も終わりに近づき、ワイナが自分で袋を抱えてとぼとぼと歩いてきた。ワイナも暗い顔でじっと俯いている。

列はひととおり通りすぎ、出迎えた人々はその後ろに付いて、祝宴に参加するために宮殿の大広間へと入っていった。広場にはキヌアとティッカだけが取り残された。

「ティッカ、クシがまだ帰ってきていない……」

「ええ、見当たりませんでした」

キヌアは広場の向こうにじっと目を凝らした。しばらくすると大通りのはるか向こうから六、七人の集団がやってくるのが見えた。近づいてくるとそれは皇帝の衛兵たちだった。ふたりの衛兵に抱えられるようにして、真ん中を歩くのはクシだ。クシは病人のように弱々しい足取りで深くうなだれて歩いてきた。

「クシ！」

キヌアが駆け寄ると、うなだれていたクシが顔を上げ虚ろな目を向けた。しかしクシに近づく前に衛兵が手を広げてキヌアを払いのけた。その三人の後から、四名の衛兵が付いてくる。彼らが担ぐ棒には手足を縛られた大きな動物の骸（むくろ）が下がっている。その骸は二体。

キヌアに気付いたクシは衛兵に両腕を掴まれたままなんとかキヌアの方に顔を向けようとしていた。通り過ぎてもキヌアの方を振り返り、何かを彼女に訴えかけようとしたが、とうとう一言も発することもなく神殿へと姿を消した。

「どういうことなの？」

キヌアの声は震えていた。

「あれはビクーニャです。ケチュア族はビクーニャを神の遣いと崇めているのです。赦し無く捕らえたら厳しい処罰が与えられるのです。クシ皇子はほかの動物と間違えてビクーニャを捕ってしまったんですよ」

「ティッカ、クシがそんな間違いを犯すと思う？」

「そうですね。クシ皇子に限ってそんなことはありえませんよね」

「何か誤解されているのよ。誤解が解けるといいのだけれど……」

今まで見たこともないクシの弱々しい姿にひどくショックを受け、キヌアはティッカの手を強く握り締めてその場に立ち竦んでいた。

6、流刑

6、流刑

祝宴は形だけで、まったく盛り上がらなかった。狩りで起きた予想外の事件に衝撃を受けている者が多かったのだ。狩りに参加した者たちは事情を知っているが、留守番をしていたものたちは事情を知らない。しかし重々しい雰囲気に満ちているその場で理由を問う勇気のある者はいなかった。

初めて参加したクシとワイナを称える祝宴のはずだった。期待の皇子が大人の仲間入りを果たしたことを称えようと、皆この祝宴を待ち望んでいたというのに、その主役はいま罪人として神殿で尋問を受けているのだ。事情を知らない者たちも、主役の皇子の不在ということで良からぬことが起こったのだと察することはできた。

キヌアは一応大広間に顔を出したが、気持ちは落ち着かなかった。無言で下を向いてただ時間が過ぎるのを待っていた。場を取り繕うために演じられる陽気な歌や踊りは虚しく聞こえるどころか彼女の心を苛立たせた。

クシがどこでどうしているのか、それだけが知りたかった。

やがて皇帝の傍に寄ってきた側近が何か耳打ちをすると、皇帝はすっと玉座を立ってどこかに姿を消した。

皇帝に続いてウルコが席を立ち、そのあとにアマルとリョケも続く。ワイナも気が気でなく、もうひとりの主役にも関わらず、彼らに続いて広間を出ていった。残されたものたちはザワザワと騒ぎ出

す。キヌアはたまらなくなって騒ぎに乗じて広間を抜け出し、ワイナの後を追った。

彼らは間を空けて点々と太陽の神殿へと入っていく。ワイナもその中に姿を消した。キヌアがその後から神殿に入ろうとしたが、入り口を守る兵に行く手を阻まれた。

「ここからは入れません。お引き取りを」

キヌアは伸び上がって番兵の背後を覗いたが、薄暗く静まり返った神殿の中で何が行われているのかまったく分からなかった。諦めて神殿を何度も振り返りながら部屋に戻っていくキヌアだった。

クシは太陽の神像の前に座らされて、神官たちから尋問を受けていた。何故『神の遣い』を手にかけたのか、何度問われても答えることはできなかった。

「皇子、貴方が何の理由もなく、このようなことをするとは信じられない。正直におっしゃってください」

神官が屈んでクシの顔を覗きこみ、親身になって説得する。

――ウルコの悪巧みに嵌ったのだ。謎の老人が自分を騙したのだ――

そんなことを誰が信じるだろう。あさましい嘘で罪を逃れようとするとは何と情けない人間なのだと思われて、クシの自尊心が傷つくだけだ。どちらにしろ有罪になるのなら、下手な言い訳をして見苦しい姿を見せるのは止めよう。

クシはどんな罰でも受ける覚悟を決めた。

「すべては神のご意志に従います」

「皇子……」

説得していた神官は残念そうに目を閉じてため息をつくと、クシの前から退いた。

ちょうどそのとき、皇帝が側近たちを従えて神殿に入ってきた。ウルコがその後を付いてくる。少ししてアマルとリョケが足早にやってきて、遅れてワイナが飛び込んできた。クシは兄たちとワイナの姿を見て少し緊張が解けると同時に、急に弱気になっていくのを感じた。思わず縋るような目を兄たちに向けていた。

神像の許に立った皇帝に神官が今までの経過を告げる。クシが何も語らないと聞いて皇帝はクシに厳しい眼差しを向けた。

「理由もなく神の遣いを殺したとなれば、死罪。クシは手柄を立てたいという自己満足からビクーニャに手をかけた。弁解の余地もない」

皇帝の横に立つウルコはわざと気難しい顔を装ってそう言うと、自分で何度も頷いた。

「理由なら、心当たりがあります」

突然アマルが声を張り上げた。

「もうすぐシトゥアの大祭　――春分の厄払いの祭り――　があります。

クシは兼ねてより大切な行事を迎える前に、皇帝陛下に上等な織物を差し上げたいと申しておりました。そこで狩りに出た際には是非立派なビクーニャを仕留めようと考えたのだと思います。陛下がお召しになる織物を作るためにビクーニャを捕ることは赦されるはずですから。

本来なら先にお許しを請うべきでしたが、まだ若い弟は果たしてうまくビクーニャを仕留めることができるかどうか自信が無かったことと、陛下がご存知ない方が喜んでいただけるのではないかと考えたのでしょう。そこは若さゆえの無知とお許しください」

クシは驚いた顔でアマルを見つめた。クシと目が合うとアマルは深く頷いた。

「そ、それならそれで、何故自分で申し開きをしなかったのだ！嘘をついて誤魔化そうとしたのは何故だ！」

アマルの進言は予想外の出来事で、ウルコは動揺して叫んだ。

「行動してしまったあとで事の大きさに気づき、気が動転してしまったのでしょう」

「は。なんとでも言えるわい。そんな理由で赦される罪ではないぞ！」

ウルコは興奮してアマルに食って掛かる。クシはそんなウルコの姿を憎しみを込めて睨みつけた。

――　こんな状況でなければ、殴りかかっているところだ！　――

クシは唇をきつく噛んで怒りを必死で抑えていた。

「ウルコは黙っておれ」

皇帝がやっと口を開いた。まだアマルに何か言ってやろうと思っていたウルコは、グッと喉を鳴らしてやっとのことで言葉を飲み込んだ。

「クシ、お前がビクーニャを余に差し出したいという気持ちであったことはよく分かった。

しかし、市民を脅したり、罪を問われて嘘をついたことは赦されん。さらに神聖なビクーニャはいかなる理由であろうと黙って手をかけてはならないのだ。

本来ならば死罪だが、お前が若く無知であったことを考え、最果ての地に流刑とする。

期間はリュウゼツランの苗が生長し、花を咲かすまで……」

リョケとワイナが同時に息を飲む声が神殿に響いた。

サボテンの一種リュウゼツランは生長して咲くまでに十年以上掛かると言われている。極刑は免れたものの、それに次ぐ程重い罪であった。

ウルコは、極刑まで追い詰めてやることはできなかったものの、邪魔者のクシを遠くに追い払うことができると心の底でほくそ笑んでいた。十年あれば自分が王座を継ぎ、クシなどに大きな顔をされることもなくなるのだ。堪えきれずに思わず笑みが浮かぶ。

皇帝は簡単に判決を申し渡すと、すぐに神殿から出て行ってしまった。ウルコも慌ててその後を追った。

皇帝が去ってしばらくすると、罪人には変わりないクシは、衛兵に縛られた腕を乱暴に引き上げられて立たされた。立ち上がったクシはアマルの方を向き、力なく頭を下げた。

「兄上、私を庇ってくださって、ありがとうございます」

アマルは俯いて大きくかぶりを振った。

「一体……どうしてこんなことになったのだ……クシ……」

アマルの言葉は溜め息に混じってほとんど聞き取れない。

「クシ！　ウルコの策略だろう。何故正直に言わなかったのだ！」

リョケがクシに飛びつこうとして衛兵に止められた。

クシは兄たちの方から正面の神像に視線を移し、キッと睨みつけた。

「今は何も言うことはできない。しかし私は必ず帰ってきます」

クシの強い決意を感じさせる表情を見て、兄弟とワイナは、少しだが心配が和らいだ。

「クシ皇子！　私は正式に辺境の警護兵に志願する。そして皇子のいる場所まで頻繁に会いに行くからな！」

引き立てられるクシにワイナが必死で声をかけた。クシは微笑んで頷いた。

乾季の空はどこまでも澄み切った藍色をしている。幾筋もの筋雲が空に縞模様を描いていた。

クシが西の最果てに出発する日だ。
出発に先立って、宮殿の中庭の片隅に刑期を計るリュウゼツランの苗が植えられる。皇帝と神官とクシがそこに立ち会った。
そのときクシは、回廊の柱の向こうからその様子を眺めているウルコの存在に気付いた。ウルコの横に従えている侍従たちの中に派手な首飾りと羽根冠を付けた呪術師がいた。目の良いクシは、その呪術師の目の横に大きなホクロがあるのを見つけた。それは間違いなくビクーニャを捕まえてくれと頼んだあの老人だ。
今更気付いてももう遅い。罪の確定したクシには何も訴えることはできない。ウルコはそれを知っていて、わざとクシに見せ付けているのだ。ここで動揺してはウルコの思うつぼだ。クシはいっさい表情を変えず、ふたたび植樹の作業に視線を戻した。

宮殿内の誰もが目にする中庭にクシの運命を決めるリュウゼツランが植えられ、誰も掘り返すことができないように、周囲には太い木の杭がびっしりと立てられた。

数人の衛兵に付き添われて、クシはいよいよ最西の僻地に向けて出発する。
荷物は当座の食糧以外はほとんどなく、粗末な麻の服に巻かれた細い帯に小さな斧を挿すことだけが赦された。耳にはめられた金板も抜き取られて、クシが皇族であることを証明するものは何も無くなった。
貴族たちが大勢クシの見送りに詰め掛けたが、言葉を交わすことは禁じられているため、黙ってクシが通り過ぎるのを見ていた。

宮殿の門を出る間際、クシがもう一度名残惜しそうに宮殿の中を見回すと、柱の陰からじっとこちらを見つめているキヌアの姿を見つけた。
そこに居たのはあの勇ましいキヌアではなく、蒼ざめて今にも泣

き出しそうな顔をした弱々しい女性だった。彼女は、そうしていなければ倒れてしまうのではないかと思うほど頼りなく、柱に全身を預けて立っていた。

『短い間だったが、師として尊敬し、姉のように慕った人……』

クシは、門を出てその姿が見えなくなるまで、キヌアを振り返って目を離そうとしなかった。

広場にクシが姿を見せると、人々がどっと押し寄せて自分のことのように嘆いた。

約一年前、成人の儀で勇者として賞賛された皇子が、今度は一転、罪人となって人々の前に晒されているのだ。ほとんどの市民がそれを信じることができなかった。どこからかあの時と同じ掛け声が湧き上がってきた。

「アウキ・クシ！　アウキ・クシ！」

「止めろ！　止めるんだ！」

衛兵が掛け声を止めさせようとすると、ますます声が大きくなった。

衛兵は群がる人々を乱暴に払いのけて道を作ろうとするが、人の波は次から次へと容赦なく襲いかかってきた。もみくちゃになりながら、衛兵たちはようやくクシをクスコの郊外に連れ出すのに成功した。

クシが去ったクスコの街からは相変わらず人々の喚声が響いている。多くの人が自分を呼ぶ声を背に受けながら、クシはこの都に必ず戻ってくるのだと決意を新たにした。

6、流刑（後書き）

※リュウゼツランは日本では数十年から百年に一度開花すると言われていますが、気候によって十年あまりで開花するのだそうです。

1、　呪われた部族

1、呪われた部族

冷たい石壁と湿った石の階段は暗い地の底へと続いていく。先は漆黒の闇でどんなに目を凝らしても何も見えない。少年は肩に担いだ大きな麻袋の口を片手で握り締め、もう片手で石壁の肌を伝いながら闇の中へと下りていった。足に伝わる感覚だけを頼りに階段の終わりを確かめて、下り立った地下通路をさらに奥へと進んでいく。通路の遥か先に仄かに明かりが見え、ようやく自分の目指す方向に見当をつけることができた。

果たして明かりの灯ったその場所には壁を大きく抉って作られた空洞があり、通路とその空洞を仕切るように何本もの木の杭が立てられて、杭の隙間には鋭い棘を持つ蔦が張り巡らされていた。手前の壁に掲げられているたいまつの明かりも絡み合った蔦に邪魔されて空洞の奥にまで届いていない。木の杭の向こう側は真っ暗でその中に何が潜んでいるのかまったく分からない。

少年は空洞の前に麻袋を置くと中から蝋の塊のようなものを取り出した。そして松明の炎の下にそれをきつく縛り付けた。その塊は動物の脂身を乾燥させたもので、そうしておくことでやがて括りつけた燃料に火は燃え移っていき、松明は絶えることなく燃え続けるのだ。

それが済むと少年は、空洞のほうに向き直って声を張り上げた。

「おばばさま、変わりはないか？」

ややあって、空洞の闇の中から微かにしわがれた声が響いてきた。

「ああ、哀しいことに、何の変わりもない」

続けて自嘲するような嗤い声が聞こえてきた。

「今日はご馳走だ。干し芋に干し肉もあるぞ」

麻袋を探りながら少年が得意げに声を張り上げる。

「また首領の館から盗んできたのか」

「人聞きの悪いことを言うでないよ。首領さまは遠征に出ていなさるので処分に困った食料を片付けてやったのさ」

そう言いながら少年は、立てられた杭の上の方に僅かに開いた隙間めがけ、大きな木の葉で包んだ食料を次々と放り込んだ。食料が投げ入れられるやいなやそれを開こうとするガザガザという音が響いてきた。

しばらく包みを開いてはムシャムシャと頬張る音が響いていたが、やがてそれが止むと再び空洞の中の声が少年に語りかけてきた。

「いつも済まない。情けないことにこんなことになっても腹は減るものだ」

「当たり前だ。おばばさまは神でも何でもない。人間なんだから」

「そう言ってくれるのはそなただけじゃ。ほかの者たちは私のことを飲まず食わずでも生きていける特別な存在だと信じておる。私は未来を見通すことができるだけじゃ。それなのにいつのまにやら、私が予言することで事が起こるのだと思い込むようになった。良い

ことなら喜んで信じるが、悪いことを忠告すれば私が悪いことを引き起こすのだとして疎まれる。その結果がこれじゃ！」

暗闇の中から響く老婆の声が怒気を孕んだ。

「首領たちに何を言ったの？　おばばさま」

「何も……。見えたことを伝えたまでのこと！　しかしそれには救いの手段も付け添えたはずじゃ！

今の凶行を続けておれば、やがてわれらを滅ぼす者が現れるであろうと……。われらは昔のようにこの地で必要な獲物を仕留めて暮らしていくのが道理なのだと。われらほどの大部族が周りと争わずして繁栄していくのは少々無理な話であろうが、せめて罪もない民を捕らえてきて生贄に捧げることは止めなくてはならないとな。そうでなければ必ずわれらは滅ぼされる。

……いや、子どもに向かってする話ではなかったな」

「子どもじゃないやい。おいらは今度、大首領さまの軍に付いて戦に出るのだからな。ああ、もちろんちゃんとした戦だ。小さな村を襲って人をさらってくるのではないよ」

「はて、今はもうこの大国と戦おうという度胸のある部族など、この辺りには存在しないはずじゃが……」

「日の昇る未知の大地に向かうのだ。日の昇る地の果てには大変な富を湛えた国があるという噂だ。その過程に陣を作るため、道中に存在する部族を征する戦なのだ」

「ほうか…。それで得心がいった。新たな戦いの武運を祈るために盛んに生贄が集められていたのじゃな。日の昇る大地……首領たち

の目当ては東の征服か」

「おいらが戦いに出る前におばばさまを出してやらねば、おばばさまは飢え死にしちまう」

「ああ、心配はいらない。そなた以外にもときどき世話役の少年がやってくる。油粕のようにふやけた雑穀を持ってな……。首領たちも私が死んでは困るのだ。それに万が一のために今までお前が持ってきてくれた食料を少しずつ蓄えておいたのだよ」

「しかし、首領たちが新たな戦争に出ていってしまったら、おばばさまのことなど忘れられてしまうよ」

「私を誰だと思っておるのじゃ。長年この部族の命運を占い、ここまで導いてきた呪術師キータであるぞ。愚かな首領たちよりもこの国のことを知っている。そして未来の姿も。私にはこの場所から出て、新たな世界へと旅立つときがやってくる。しかしな、それはわれら一族が滅びるのと時を同じくすると天は告げた。もしも私の先読みが誤っているのであればそれは幸運なことだ。私は喜んでこの命を捧げようぞ」

「何と恐ろしい予見だ。だから首領たちは聞き入れたくなかったのだよ。おばばさま」

「恐ろしいのは自分たちの力を過信してこの大地に恐怖を撒き散らしている首領たちの奢り高ぶった心じゃ。分相応に生きねばわれらは神さえも敵に回すことになる。やがて神々を味方につけた大きな敵が現れることであろう……」

「神々を味方に付けた大きな敵……。それはどこの部族だ？」

「さあ、そこまでは知り得ない。われらが無用な戦いを挑んでいけばやがてその敵と対峙するときがくるであろう。

……東の地か。どうもその辺りに不穏な空気を感じるがな。

それにしても、少年。お前はなかなか聡明な子じゃな。こんな年寄りの戯言（ざれごと）によく耳を貸してくれることよ。この罪人にただ食事を運ぶだけの役目であったのであろうに」

「おばばさまの話は戯言などではない。おいらの親父さまはおばばさまの予言は正しいと言っている。それを聞かないいまの首領たちがおかしいのだと。

どうかおばばさま、おいらが戦から戻るまで生きのびておくれよ」

蔦の向こうの暗闇から石壁を震わせるような高らかな笑い声が響いてきた。

「なんと頼もしい若者じゃ。ばば、ばばと呼ぶがな、私はそれほど耄碌（もうろく）してはおらん。大首領に従えている大呪術師よりはずっと若いのじゃ。まだまだ何年でも生き延びていくぞよ。

ところで、そなた名は何と言ったかのう」

「アンコワリョだ」

「ほうか……。そなたとは何やら深い縁を感じるぞよ。お前こそ戦地より必ず生きて戻るのだぞ」

少年は「必ず」と力強い声で返事をすると、空になった麻袋を掴んで地上へと戻っていった。

彼は年若いが、がっしりとした体格と逞しい手足の持ち主であることを、このときの老婆は知り得なかったが、やがて彼が自分を救

う存在になるであろうことは確信していたのだ。

「われらは呪われた運命から抜け出すことができるであろうか……」

深い闇の中で感覚だけを頼りにめぼしい小石を集めて、それを一筋に並べると、小声で何かを唱えながら、老婆は己と己の一族の運命を占い続けるのであった。

2、　西の果て　（その１）

2、西の果て　（その１）

荒地は果てしなくどこまでも続いている。石ころの転がる大地に、強い風に運ばれた枯れ草の束が転がっていく。食べ物になりそうな植物も動物も、どこにも見当たらない。

植物といえば、蜘蛛の足のように地を這うアロエの一種や空に向かって高くそびえるサボテンが、ところどころ唐突に地面から生えているだけだ。

クスコを中心として栄えているのはほんの僅かな範囲でしかない。村々が密集する地域を外れてさらに西へ向かえば、そこは一面の荒野であり、人が暮らす集落には数日間歩き続けてもたどり着けるかどうか疑わしい。そもそもその土地に人が住めるのかどうかさえ分からないのだ。

その一帯も一応はケチュア族の支配する領域とされているが、国によって特に管理されているわけではない。

その昔、アヤルマカという大部族が治めていた広大な地域を、先代の皇帝がかの大部族を征服したことをきっかけとして領土に取り込んだのだ。しかし今では都からの警護兵が忘れかけたころに時折巡回にやって来る程度で、それ以外は都の目の届かない辺境の地である。

神々が住まうといわれる高く美しい峰が連なる山脈の、その懐に抱かれた風光明媚な高地クスコとは天と地ほどの差がある。乾いた荒野が果てしなく続くその土地はまさに死の大地である。人が暮ら

すには大変酷な場所だ。

クシに課せられたのは、その辺境に自力で生きる場所を見つけ出し、何時とも知れない刑が解かれるその日までただひたすら生き抜いていくという、単純でありながら最も過酷な試練である。

クスコからの道はとっくに途絶えた。クシが逃げ出さないようにと、彼の両脇をしっかり抱え込んで引き連れてきた兵士たちは、道が途切れた途端、ひび割れて使えなくなった土器を投げ捨てるようにクシを突き放し、さっさとクスコへ戻って行ってしまった。

かろうじて数日生き延びられようかというほど僅かな食料と、氷点下にもなるこの土地の夜の寒さにはほとんど役立ちそうにない薄い毛布を投げ与えて……。

役に立たない自尊心など捨てて、兵士たちに哀願し縋りつくように後を追う方法もなかったわけではないが、それならば潔く死を選ぶのがクシである。

あれから何日この荒野を彷徨っているだろうか。

終わりの見えない地平線に向かって歩き続け、枯れ草に溜まった朝露で喉を潤し、夜は地面を掘って寒さをしのぎ、何とかクシは生き延びていた。

ここはまさに地の果てだとクシは改めて実感した。語り部の語りや、父王とともに遠征に出てこの地を訪れたことのある兄たちの話に聞いてはいたが、他人から聞く話は所詮絵空事であり、自らの足で踏みしめているこの大地とそれとは全くの別物であった。

すべての物をさらって吹きすさぶ風は、空腹でふらついているクシの身体を一気に空へ舞い上げようとする。クシは這い蹲るように重心を低くして脚を踏ん張り、風にさらわれるのを堪えた。風に逆らって進もうとするものの、どうやら後ろに押しやられているよう

だ。

西の果ての異国との境界辺りにひとつ村が存在すると聞いたことがある。唯一の頼みであるその噂を信じてそこを目指すしか方法はないだろう。当てのない目標に向かってひたすら歩き続ける。

『本当にそんな村など存在するのだろうか？

そもそも流刑などとは建前で、実は自分がこの荒野でのたれ死ぬことを期待して、この罰が下されたのではないだろうか？』

厳しい環境に晒され続け、日を追うごとにクシの心は疑念でいっぱいになっていった。

数日間荒野に吹き荒れた砂嵐が止んだとき、地平線に近い遥か彼方に一筋碧い線が見えてきた。クシの歩調に合わせ茶色一色の地面に時折濃い群青色が見え隠れする。近づくたびにその筋は幅を増し、やがてかなりの広さを持つ碧い大地となってクシの前に姿を現した。

脚がもつれ思うように速く歩けない。片足を引きずるようにして、それでもクシは残る力を振り絞り、ようやくその蒼のふちへと辿り着くことが出来た。

「水だ！」

そこには平原の真ん中にぽっかりと口を開けたような広い湖があった。

空よりも深く濃い群青の上に時折風が吹き渡り、無数のさざなみを作って水面を白く染め変える。そして通り過ぎればまた、深い藍色は雲を映して沈黙した。美しい光景よりもまず、クシはその豊富な水に心が躍った。

クシは湖の入り江にジャブジャブと入り込み、水を手で掬っては頭から浴びた。何日も荒野を彷徨っていた身体には固まった砂が厚くこびり付いており、流れ落ちた泥砂が足許の澄んだ水を濁らせていった。全身に水を浴びぐっしょりと濡れても、荒野の乾いた風はあっという間に乾かしてくれる。

汚れを落として喉の渇きを潤すと、今度は猛烈な飢えを感じた。湖の周りには緑の草や背の低い木が茂っていた。木や草の中には小さな実をつけているものもあり、草や実をひととおり口に含んでみる。あまり美味くはないが何とか食べられそうだ。クシは夢中になってそれらを漁った。

こびりついた汚れが落ち、腹が落ち着くと、それまでクシの心を覆っていた怖れや疑念がいつの間にか消えていた。

クシは誰もいない広い湖に向かって大きく手を広げると、叫んだ。

「私はもう皇子ではない。この地で自由に生きていくのだ！」

そう決意した途端、クシの心は軽くなり、新たな希望が湧いてきた。

湖のほとりは湿気を帯びた心地よい風が吹いているものの、その日差しは刺すように鋭い。強い日差しをよけるため、潅木の茂みに顔を潜らせて横になる。すると今までの疲れがどっと襲ってきて、彼を深い眠りに引き込んでいった。

まどろみの中で何故か鮮明にキヌアの姿が浮かんできた。あの強く逞しい彼女が、幽魔のように蒼白い顔で自分を見つめている、宮殿を出るときに見たあの姿だ。

彼女の痛々しい姿に目を伏せようとする一方で、不屈の精神をもつ彼女が自分のために嘆く姿に快感を覚えている自分がいる。

夢とも現実ともつかないその世界で、クシは自分の心の奥底を知った。

――そうか。武術を教わろうなどとは建前で、その実は単に彼女と居られる時間がほしかっただけのだ。私は彼女より強くなることで彼女に認めてもらおうと必死になっていたのだ。だからあのとき、彼女が私との別れを嘆いてくれたことで私の心は満足している――

「今更……愚かなことに気付いたものだ……」

眼を閉じたまま、うわごとのように呟いて、やがてクシは深い深い眠りに落ちていった。

2、　西の果て　（その2）

どのくらいの時が経っただろうか。

誰かに服の裾を引っ張られているような感じがした。まだうつらうつらとしながら無意識に手をやって裾を戻すが、何者かがまた引っ張り返す。

クシは異様な気配にはっと目覚め、足元に視線をやった。真っ白なリャマが枝の間から覗き込んでいた。食べ物と勘違いしているのか夢中でクシの服の裾をかじっている。

「うわっ！」

驚いて飛び起きようとして、低い木の陰で寝ていたクシは覆いかぶさる木の枝で顔を傷つけた。同時にリャマの方もクシの声に驚いて一瞬飛び退いたのだが、またすぐに寄ってきて服の裾をかじり始める。クシは夢中でそれを払いながら、何とか木の陰から抜け出そうと背中でいざった。

「××！　××××……」

枝の向こう側から人の声が響いてきた。声の主は近づいてきてリャマの首に手をかけると、その身体を一所懸命引っ張っている。しきりに何かを叫んでいるのだがクシにはその言葉が理解できない。クシは、今居る地がクスコの言葉が伝わらない辺境であることを改めて悟った。

リャマがようやく外へと引き出されて、解放されたクシは茂みを

抜け出した。そこには、抗うリャマの首に縄をかけているひとりの少女がいた。リャマの首を縄で引き寄せ必死に押さえながら、少女はクシを振り返って怪訝な顔をした。

クスコの周りでは見かけない服装だ。厚手の毛織物を幾重にも着て、頭に丸い頭巾を被っている。この辺りの強い日にやかれたためか、肌の色は暗褐色でところどころ表皮が剥けた痣がある。

クシが立ち上がると、驚いて一歩下がった少女は、威嚇しているつもりなのか険しい顔で何かを必死に叫んだ。それもそうだろう。見慣れない服を着た薄汚い男が茂みの中からぬうっと現れたのだから。

「××××！」

大声で叫ぶ少女に気付いて、今度は向こうから中年の男が慌てて駆けてきた。

色鮮やかな模様を編みこんだ耳あて付きの毛編みの帽子を被り、腰まで隠れるような毛織の貫頭布を羽織っている。男は少女よりもずっと日に焼けて黒々とした顔をしていた。

ふたりはどことなく顔つきが似ているので親子と思われる。何も持たずに湖のほとりに倒れていた男を怪しげに思っているのだろう。ふたりとも詮索するようにクシの頭から足先まで何度も視線を往復させた。

「この辺りに村があるのか？　私は行くところがない。あなたたちの村に泊めてくれないか？」

言葉が通じないことは分かっていたが、クシは何も持っていないという身振りを交えて、とりあえず親子にそう頼んでみた。

クシが必死に訴える姿を見て、親子は顔を見合わせ、あれやこれやと相談し始めた。

先ずはクシの言った言葉の意味を議論しているのだろう。随分と時間をかけて話し合ったあと、ようやく二人はクシに向き直って笑顔を見せた。

クシの言葉を正しく理解できたかどうかは分からないが、気持ちは通じたようだ。父親と思われる男がクシの肩をたたいて『付いて来い』というような仕草をした。

クシが男に付いて歩き出すと、その後ろからリャマの首にかけられた縄を引きながら、少女が付いてきた。

クシが振り返ると少女はニッコリと笑みを返した。少なくとも怪しい男という誤解は解けたのだろう。クシはホッとして少女に微笑み返すと、また前に向き直って歩いていった。

湖のほとりに沿って向こう岸まで歩いて行き、その先にある小高い丘を上っていく。丘の頂上から下ろうとしたとき、クシは思わず声を上げた。

丘を下ったその先に、一面を丈の短い草が覆う広大な緑の平原と、そこでのんびりと草を食むリャマの群れを見た。今まで彷徨ってきた乾いた荒地とはまるで違う光景だ。

広い野原にはぽつんぽつんと泥レンガを組み合わせて造った家が点在している。

リャマの群れの中にそれを追う人の姿も見えるが、人の数よりもリャマの数のほうが圧倒的に多い。リャマの群れの中に立つ人たちは、群れを外れたリャマを追っては再び群れの中に返していく。

彼らはどうやらリャマを放牧しながら暮らす遊牧民らしい。

クシを見つけた少女はおそらく、丘の向こうまで冒険に出てしまったリャマを連れ戻しに来たのだ。帰りが遅いことを心配した父親も一緒に丘を越えてきたのだろう。

群れからはぐれた悪戯なリャマのお陰でクシは命拾いをしたのだ。

男は点在する泥レンガの家のひとつに入って行った。クシが入るのを躊躇っていると、後ろから少女がクシの背中を押して中に入るように勧めた。

中は薄暗く、明るい外から入った瞬間は目が眩んで何も見えなかった。目が慣れてくると、家の奥に少女と同じくらいの年の少年がひとり座っているのが見えた。少年は竈（かまど）に火をくべて食事の支度をしている。竈の上で炙られた肉の香ばしい匂いが家中に漂っていた。

クシの腹がそれに反応してぐぐっと音を立てた。少女はそれを聞いてくすくすと笑うと、竈の肉を土器の上に載せてクシに勧めた。

クシの体は思うよりも早く動いて肉にかぶりついていた。もうなりふりなど構わない。ちぎれそうな空腹を満たすことだけしか考えられなかった。

幼い頃から皇族として厳しい躾を受けてきた自分にもこんな原始的な本能が残されていたのかと、心のどこかで驚いている自分がいた。しかし他方で何が何でも生き抜こうとする強さを残していた自分を頼もしく思った。

空腹が満たされて、改めてクシは自分が今いる場所を観察した。

四方を土壁で囲い、天井には藁が葺いてある小さな家。空気抜きの高窓から細い明かりが差し込むだけの狭く薄暗い空間には、隅に小さな竈があり、反対側には備蓄の食料が入った袋が積まれている。その間の藁と毛織の敷物が敷き詰められた床に、寄り添うように親子三人が座り、膝を突き合わせて無言で肉をかじっている。その中に自分も幅を取っているので、家の中はいっぱいいっぱいだった。

人の良さそうな父親と負けん気の強そうな少女、そして少女と瓜二つだが、彼女よりも気の弱そうな少年。二人はおそらく双子なの

だろう。何故かそこに母親の姿は見当たらなかった。

食事が済むと、少女がクシの肩を叩いて呼んだ。意味の分からない言葉でしきりに何か言っている。クシは首を傾げて少女の動きを観察した。だんだんと少女の言おうとすることに察しがついてきた。

少女は自分の胸を何度も叩いて繰り返している。

「オルマ、オルマ……」

そう、それは彼女の名前だった。クシが少女に頷くと、今度は父親と少年が順に胸を叩いて名乗った。

「ポコ」

「チャキ」

初めて通じた異民族の言葉にクシは嬉しくなり、自分も胸を叩いて告げた。

「クシ！　クシ！」

すると三人の親子は顔を見合わせた。クシがもう一度名前を告げると、少女がプッと噴き出した。あとのふたりもそれに続いて笑い出し、やがて三人はお腹を抱えて笑い出した。

驚いたクシは何か可笑しなことを言ったかと慌てた。しかし親子は構わず笑い続ける。彼らの言葉を話せるようになるまで、彼らにとって何が可笑しいのかクシには知ることはできない。未知の地で生きる難しさをそんな些細なことで実感するクシだった。

クシのいなくなったクスコでは、今までと変わらない日常が流れていた。

キヌアの教室も毎日開かれて子どもたちも熱心に指導を受けている。成人の儀を控え張り切る少年たちに影響されて、キヌアの指導にもますます熱がこもっていた。

そのキヌアが部屋に帰ると、ひとり涙が枯れるほど泣いていることなど、誰も想像しなかった。一番傍にいるティッカだけが、日に日にやつれていくキヌアを心配していた。

クシがキヌアに武術の指導を申し入れたお蔭で、このクスコでもキヌアは居場所を見つけることができたのだ。そのクシを失ったことでキヌアの心は拠り所を失くしてしまったのだろうとティッカは考えた。

しかし帰るあてのない人を待ち続けるのは辛すぎる。

ティッカは、キヌアが武術の指導に夢中になることでクシを忘れてくれることを願っていた。

クシがクスコを去ってからだいぶ経ったある日、ティッカがキヌアの部屋に慌てて飛び込んできた。

「キヌアさま、大変です。今晩、お部屋に皇帝陛下がいらっしゃるそうです。

早くお支度をしないと……」

ティッカは衣装籠をひっくり返してあれこれと選び始めた。相変わらず武術の指導ばかりしているキヌアには適当な服がない。

衣装をほとんど籠から出して、一番底には見事な織りのショール

と頭巾が残った。

「キヌアさま、さすがにこれはまずいですよね」

ティッカがおずおずとそれを広げて見せた。

「これはクシのお母さまの……」

キヌアはそれをティッカから受け取ると、懐かしそうに眺めた。

「クシさまにお借りしたまま返せずに……。
私たちであのお部屋に返しに行くのは難しいですよね。黙って入ったことが知れたらどんなお咎めを受けるか分かりませんもの」

「ティッカ、これはこのまま仕舞っておきましょう。クシが帰って来るときまで」

キヌアはそれらの着物を丁寧に畳むと、籠の底に大切に収めた。

「別に着飾らなくていいのよ。無理に作っても仕方ないでしょ？
これからずっとお傍にいるのだから。いま着ているものでいいわ」

キヌアは、散らかった服を畳んでその上に重ねながら言った。

「では、せめて御髪（おぐし）を整えて香油を塗るだけでも」

ティッカは慌てて準備を整えると、いつも束ねて絡まっているキヌアの癖毛をほぐし始めた。

「キヌアさま、良かったですね。

クスコに来た意味が見出せず、さらに懇意にしてくださったクシさまが居なくなられて沈んでいらしたので、心配だったんですよ。皇帝陛下がキヌアさまをお后と認めてくだされば、それこそキヌアさまがここに来られた意味があるというもの。立派にお役目を果たすことができますもの」

「……そうね」

キヌアは少し口の端を上げて笑ってみせるが、その表情は固かった。ティッカは婚礼の日以来会うことのなかった皇帝の突然の訪問にキヌアがひどく緊張しているのだと思った。

「そうですとも！　お母様……『天の女王』さまもお喜びになります！」

キヌアはまだ強張った表情のまま軽く頷いた。

日が落ちると、数人の侍従を従えて皇帝がキヌアの部屋に姿を現した。キヌアが挨拶を済ませると侍従もティッカも速やかに部屋を引き上げていった。

まだ腰を低くして頭を下げたまま畏まっているキヌアに近づくと、皇帝は彼女の顎に手を伸ばして持ち上げ、彼女の顔を自分に向けた。婚礼の日に大広間で挨拶をして以来、全く顔を合わせることがなかったので、キヌアが皇帝の顔を間近で見るのも初めてだ。

キヌアの婚礼が決まった途端、これまでキヌアの戦士としての技

術と精神力を鍛えることだけに腐心してきた彼女の教育係たちは、俄かにクスコ風の女性としての振る舞いを身につけさせることに執念を燃やし始めた。

普段の彼女の行動をすべて否定されることから始まったその躾は戸惑うことばかりで、何度も逃げ出してはまた連れ戻された。

しかし、それはまだ序の口だったと彼女が知ったのは、最後の教育が始まったときだった。

まだ若い王女は、側后として何を為すべきかということを一から覚えねばならなかった。

今までの生き方を変え、屈辱にも耐えて、ひと通りのことを身に付けたというのに、クスコに来てみればその大役を果たす機会は与えられず、ただ漫然と時を過ごすことしかできなかった。ようやく本来の役目を果たす時が来たのだ。

キヌアは仄暗い松明の明かりに照らし出されている皇帝の顔をじっと見つめた。

僅かにクシに似てはいるが、深い皺を刻んだその顔は、弱々しく憐れな老人にしか映らない。かつてはその名を聞けば誰もが震え上がると言われた勇猛な皇帝の面影はどこにも感じられない。

キヌアの顎を持ち上げているその指も細く骨ばって血が通っていないのではないかと思うほどひんやりと冷たい。

皇帝は、顔を近づけて彼女の瞳を覗き込むようにして言った。

「間近に見ればなんと似ているのだ。そなたは母上にそっくりだ。野蛮な娘かと思っていたのは、余の大きな誤りであった」

そう言うとキヌアの身体を抱きかかえ、甘えるように縋りついてきた。

キヌアは背筋に水が走るような嫌悪感を抱いた。

擦り寄る皇帝の身体を受け止めながら、クシと無邪気に合わせ稽古をしていた日々をありありと思い返していた。

3、流浪の民　（その1）

3、流浪の民

クシが西の地で暮らし始めて、もうすぐ季節が変わろうとしていた。その頃にはリャマの放牧をする民の中にも少しずつ溶け込めるようになっていた。

どこか遠い地からやってきた謎の少年を、放牧民たちははじめ、物珍しく少し怖いものでも見るような目で遠巻きに眺めていたが、本来気さくなその民は、いつのまにか昔からの仲間のように彼に親しげに接するようになっていた。

やがて誰も彼もがクシに興味を持って話しかけてくるようになり、クシがこの民の言葉を理解するようになるまでにそれほど時間はかからなかった。

そのうえ少しおせっかいなオルマが発音から細かい言い回しまで厳しく教えてくれるので、クシの覚えは格段に早かった。

彼らは自分たちのことを『ロハ』と呼んでいた。

オルマ親子がクシの名前を聞いて笑った理由もほどなく分かった。ロハの間では、『クシ』というのは、【くしゃみ】のことだったのだ。

慣れ親しむようになってからも、いや親しくなれば尚更、彼らはクシのことを、わざと【くしゃみ】の意味の方の発音で呼んだ。からかい……というよりも、もう自分たちの仲間だという親愛の情を込めてそう呼んだのだ。だからクシのほうもそう呼ばれて悪い気はしなかった。

宮殿で家来に傅かれて生活していたときよりも、気の置けない仲間と暮らしている今の生活のほうをクシは気に入っていた。

オルマとチャキの双子は、男女が入れ替わったかのように性格がまるで逆だった。オルマは男勝りで体力があり、父親とともにリャマを追うのは主にオルマの仕事だった。一方、チャキはあまり家から出ずに、家事をしたり、リャマの毛を紡いだりしていた。

オルマはクシに、まるで男同士の親友のように接する。

「【くしゃみ】は気持ちのいい奴だな。街の方から来たというから最初はすました嫌な奴かと思ってた」

「オルマも女とは思えないほどさっぱりしている。チャキのほうがよほど女らしい」

「きっと神さまはあたしらに付けるものを取り違えたのさ！」

あっけらかんとして言うと、オルマは豪快に笑った。日にやけた顔に白い歯がやけに目立つ。

オルマとは特に気が合うのか、彼女といるだけでクシは心から楽しかった。リャマを追いながら、一日中二人は笑い合っていた。

しかし放牧民の生活は気楽で楽しいばかりではなく、むしろ危険に晒されることが多い。平原とはいえ、ところどころに地の裂け目があり、リャマとともにそこへ滑落して命を落とすものもいたし、夜になるとリャマを狙ってくるピューマなどの猛獣を追い払わなくてはいけなかった。

クシはそこに暮らすうちに自然と危険を察知する感覚が研ぎ澄まされていった。

やがて平原の草が霧雨で湿る季節になった。乾季の終わりに毛を刈り取ったリャマたちを放ち、ロハの民は移動をするために家の荷物をまとめ始めた。

「いったい、どこに行くのだ?」

「雨季は谷間に下りて作物を育てるんだよ」

ポコが半年間眠っていた木製の足踏み鍬を一本一本磨きながら言った。

「リャマたちは?」

「この季節は野生に返す。乾季になったら戻ってきてまたリャマを集めるのだ」

彼らはこの平原に定住しているわけではなかった。季節ごとに場所を移動し、生活に必要な物を育てたり、集めたりしながら生活しているのだった。

クシにとっては不思議なことばかりだ。

「【くしゃみ】には珍しい生活だろ?

谷間の暮らしは忙しいぞ。必死で働かないと半年間食うものが無くなってしまうからな」

オルマはたくさんの干し肉を袋に詰めていた。チャキは前の年に採れたとうもろこしの種を丁寧に選別している。

「今年はうまく育つかな?」

チャキが呟いた。

「昨年は本当にひどかった。種に残す分を取ったら食べる分は僅かしか残らなかった」

「虫にやられてしまったからな」

食べ物もろくにない半年をどうやって生き延びてきたというのか。リャマの干し肉を分け合ってようやく暮らしてきたのだろうか。そんな苦労は感じさせないほどオルマの家族は明るく逞しい。クシがひとり増えてもそんな不自由など微塵も感じさせずに彼を歓待してくれた。

クシも種の選別を手伝いながら「今年はうまく育つように」と祈りを込めた。

ロハの民は、一斉に泥レンガの家を後にした。大人はもちろん、子どもたちも生活に必要な荷物を体中にくくりつけてよろよろと重そうに歩き出す。乳飲み子を持つ母親は荷物とともに赤ん坊も布に包んで体に縛り付けている。大きい荷物を運ぶためにリャマも数頭連れるが、ほとんどの物は人間が自分で運ばなくてはいけない。リャマは山道を行くのが苦手なのだ。

ポコの一家も、背中に藁束やとうもろこしの種の入った袋や鍬など、それぞれが大荷物を背負って家を出た。

平原は果てしなく広い。谷に下りると言っても、どこまでも平らな大地に渓谷があるようには思えなかった。

荷物で重くなった体を抱えながら、ロハたちは広大な平原を何日もかけて歩いていった。

何日歩き続けても、景色は相変わらず見慣れた平原ばかりで渓谷が見えてきそうな気配もなかった。ただ広く、ほかに何も見えない大地の真ん中で、何度も野宿をした。

ロハたちは、疲れを癒す方法をよく知っている。

夜は焚き火を囲んで干し肉をかじりながら、昼の疲れなど感じさせないほど陽気に歌ったり踊ったりする。踊りつかれてぐっすりと眠り、翌朝はまた元気になって颯爽と歩き出すのだ。

しかし全員が寝入ってしまうわけではない。必ず交替で見張りが立ち、夜の平野に出没する猛獣から民を守る。長年同じ暮らしを繰り返してきた遊牧民の知恵だった。

平原の家を後にしてから何日経ったのか分からなくなる頃、ようやく山道に入っていった。荷物を抱えて山道を行くのは、平原を歩いているときより数段きつい。慣れたロハたちは山道などものともせずどんどん進んでいく。クシは息も絶え絶えに、ロハの列をやっと追いかける。

やがて頂上を越えると、目的地の深い渓谷が現れた。

一列に並んだロハたちは、慎重に渓谷を下っていく。木々などほとんど生えていない平原から、木々が鬱蒼と生い茂る山の中へ、その生活の変化はとても大きい。

渓谷の中腹あたりに、木が切られて土が均(なら)された場所がいくつかあった。細い木を丈夫な蔓で組んだ小屋がそのまわりに点々と建っている。それはロハたちの雨季の住まいなのだ。

ポコが入り口を覆う伸びた枝を掃うと、ひとつの小屋に入っていった。チャキが続く。

「さあ【くしゃみ】、入って」

オルマがクシの背中を押した。

ひと季節放置されていた小屋の中はかび臭い匂いがした。細い木を組んだだけの隙間だらけ壁からは、木の枝や蔦が容赦なく侵入してきている。

ポコが家の中の枝を掃い、クシとチャキがそれを外に運び出す。オルマが腐りかけた敷き藁を手早くかき集めて外に出し、各自が背負って持ってきた新しい藁を敷き詰める。

壁や屋根に掛かる蜘蛛の巣を払うと、ようやくこざっぱりとして、生活できそうな空間になった。

その日は小屋の掃除で一日が終わった。夜になると、刈り取った枝を薪にして火を焚いた。それで干し肉を炙って夕食にする。ポコは小屋の隅にある甕から蓄えてあった酒を出して晩酌を始めた。

ポコはクシにも酒を勧めると、話し始めた。

「わしらはずっとこんな生活を続けている。同じ地に定住できればいいが、家畜も畑も手に入る土地というのはそうそう見つからないのだ。

食べ物もその年の気候次第。気候が悪ければどんなに大事に育てても全滅してしまうこともあり、気候が良くても虫が増えてやられてしまうこともある。

収穫が多すぎれば蓄えた分は腐らせ、ほかの家族と収穫の量が違えば、争いになることもある。

平原の暮らしはここよりは気楽だが、食べ物はここの畑の蓄えと、リャマの肉しかない。それにあそこには凶暴なピューマが出る。ピューマは滅多に人を襲わないというが、あの土地のピューマは人を襲うことがあるのだ。

わしの妻、この子たちの母親もピューマに襲われた」

クシは、したたか酔って潤んだ目をしているポコの横顔を見つめた。

「厳しい暮らしだ。しかし、わしらの先祖が長い間かけて編み出した生活の知恵だ。ほかの方法は考えられない。

【くしゃみ】もここに暮らす限り、いつ何が起こるかわからないと覚悟しておくんだぞ。わしは知らないが、【くしゃみ】のいた大きな街の暮らしとはだいぶ違うだろうからな」

ポコはそう言うと木のカップに注がれた酒を一気に飲み干した。

ポコの話を聞いたクシは考え込んだ。

『ロハの民の暮らしを豊かにする方法は無いのだろうか』

次の日から、とうもろこしの植え付けが始まった。半年掘り返していない谷間の畑には木の根や草の根が広く深く這っていて、土を耕すには時間と労力がいる。

いつもは家に篭っているチャキも出てきて手伝うが段取りが悪く、オルマに叱られてばかりいた。

そのオルマは手際が良く力もある。太い根をひとりで掘り起こして引き出しては脇にどんどん積み上げていく

「さすが、オルマだな」

クシが感心して言うと、オルマは手を休めずに声を張り上げる。

「当たり前だよ。チャキがああだから、あたしがしっかりしなかったら大変なことになる」

本当に神さまはオルマとチャキに付ける物を間違えてしまったようだ。クシはオルマの言葉を思い出して、つい噴き出した。

「けど、今年は助かった。【くしゃみ】のお蔭で仕事が倍はかどるよ」

オルマは泥だらけの顔をほころばせて笑った。どんなに勝気で男勝りでも、笑顔はあどけなさを残す少女の顔だ。

「おい【くしゃみ】。ポコの畑が終わったら、こっちも手伝っておくれよ」

向こうのほうから声をかけてきたのは隣の畑を耕すティトーだ。

「やなこった！　【くしゃみ】はうちの家族なんだ！」

オルマは手に持った太い木の根を大きく振って、ティトーを怒鳴りつけた。

「オルマ、いいじゃないか。ここが早く終ったら手伝ってくるよ」

「ダメだ。あいつらは前の年、うちの作物が虫にやられてしまっても何も分けてくれなかったんだ。なあ、チャキ」

いつもは物静かで自分を主張することのないチャキが、ティトーたちを睨みつけて大きく頷いた。

同じ一族でありながら互いに恨みを持つ家族たちにクシは不安を

覚えた。

3、 流浪の民 （その2）（前書き）

（ご注意）

自然災害の描写があります。敏感な方は閲覧をご遠慮ください。

3、流浪の民　（その2）

その年の雨季はほどよく雨が降り、ほどよく日が差して、作物の育ちが良かった。

とうもろこしはオルマの背もクシの背も越えて伸びていき、見事な林を作った。

「やっぱり【くしゃみ】は神の遣いだ。今までこんなに立派に育ったことなんかないよ。今年は空腹で生きるか死ぬかの心配をしなくて済みそうだ」

オルマはとうもろこしの梢を見上げてクシの腕を握り締めた。

ちょうどオルマの顔の辺りに大きなとうもろこしが頭を覗かせていた。クシがそれを取って皮を剥くと、中から艶やかな黄色い実が出てきた。

「うわぁお」

オルマが嬉しそうに声を上げた。

収穫は枝が枯れて実が乾いてからになる。しかしここまで立派に育てばもう豊作に間違いはなかった。

「楽しみだな」

オルマがとうもろこし林の間を無邪気に走り回って声を上げた。

事件は突然に起きた。

穏やかな雨季が終わろうとしていた頃、スコールが度々やってきたのだ。雨は集中的に激しく降り続き、地盤をもろくしていった。もしも土砂が流れたら谷の中腹に暮らすロハたちは一瞬で流される危険がある。しかし彼らには、それぞれの小屋に篭って震えながらひたすら祈り続けることしか方法がなかった。

激しい雨音が不安を余計煽り立てる。

グゴゴゴ……

雨音に混じって微かにくぐもった唸り声のようなものが聞こえてきた。

「土なだれだ！」

ポコが叫んでチャキ、オルマ、クシを急いで小屋の外に押し出すと、自分も飛び出した。

ポコは三人の背を押しやりながらぬかるんだ谷の斜面を登っていった。小屋から少し離れた高台の林に飛び込み、斜め下方に自分たちの小屋と畑を見下ろす。

ポコたちが避難した林の中には後から次々とほかの家族が飛び込んで来た。最後にティトーの家族が走り込んできた。

ティトーたちが林に走りこんだと同時に、彼らのすぐ背後に轟音が響いた。巨大な茶色の濁流が恐ろしい勢いで斜面を流れていく。ロハたちはみな叫ぶことも泣くことも忘れて呆然とその光景を眺めていた。

雨が上がり、林の中に身を屈めて体を寄せ合っていたロハたちがぽつぽつと立ち上がり、自分たちの住まいと畑の方を見た。

遥か向こうに見える小屋や畑はそのままの形で残っていた。しかし、彼らの目の前には幅広いのっぺりとした土の斜面が横たわっていた。

土石流が渓谷に古くから根付いていた木々とともにすぐ手前にあった畑と小屋をも押し流してしまったのだ。緑深い谷の斜面は、その場所だけ耕したばかりの畑のようなまっさらな空間に変わっていた。

そこにはティトー一家の所有地があった。しかし今は跡形も無くなっていた。ティトーの畑のすぐ横にあるポコの畑も一部が流されていた。

ティトーは呆然と立ち尽くし、彼の妻はうずくまって悲鳴のような泣き声を上げた。ティトーの小さな子どもたちも、意味は分からないが母親の泣き声に怯え、母親の体にすがりついて震えていた。

天候が落ち着くと、男たちが木の皮や蔓で丈夫な縄を作り、その先端に括りつけた棒を土の斜面の向こう側に残っている木に投げ渡した。族長のカチカリャが張られた縄を最初に渡って安全を確かめると、その後に続いてロハたちはひとりひとり土の斜面を渡っていった。

自分たちの家に戻った人々はようやく安心した。しかしティトー一家には帰る家がない

ポコは敷地の一部を分けてやった。ティトーの家族はそこに小屋を建てて身を寄せることになった。

ポコとクシは小屋を建てるのを手伝ったが、オルマはよほど昨年のティトーの仕打ちが忘れられないらしく、一度も顔を出さなかった。

土なだれですべてを失ったティトーはすっかりやる気を無くしてしまった。小屋が出来上がってしまうと、新しい作物を育てようと

もせずに毎日ポコから分けてもらった酒を飲んで寝ていた。

とうもろこしの茎や葉が黄土色になって乾き、いよいよ収穫ができるようになった。ロハたちは喜びの歌を歌いながら一斉に刈り入れを行う。どの畑もいつにない豊作だ。ポコの畑も、一部は流されたものの、残された畑で失った部分の収穫を十分補えるほどの実りを得ることができた。

収穫に忙しい人々の様子を酔っ払ったティトーは恨めしそうに眺めている。彼がポコから分けてもらったとうもろこしの酒はもうすぐ底をついてしまうだろう。そしてその後の一家の生活をどうするつもりなのか。ティトーには全くそれを憂える気配はなかった。

収穫が終わればそれらを袋に詰めて、ふたたび草原へ戻る準備をする。持ち運べる量に分けて袋に詰める筈なのだが、オルマはひとつの麻袋に収穫したとうもろこしをめいっぱい詰め込んでいた。

「そんなに詰めたら麻袋が破れるよ。もう少し少なくしないと……」

クシが言うと、

「これはティトーの家にもっていくんだ」

袋の隙間を探しては器用にとうもろこしをねじ込みながら、オルマが答えた。

ティトーに恨みを持っていたオルマだったが、彼の妻と子どもたちのことは不憫に思えたのだろう。収穫した作物を分けてやることにしたのだ。クシがぱんぱんに詰まった麻袋を持ってやり、オルマの後を付いてティトーの小屋を訪ねた。

「あたしらもこれで半年食っていかなくちゃならない。少しで悪いんだけど……」

ティトーの妻は何度も何度も頭を下げていた。

「余計なことをするな。畑が流されたのは当然の報いだと他の者たちもみんな思っているんだろ」

奥のほうからティトーの呻くような声が聞こえてきた。

「これはタラサにやるんだ。あんたには関係ない」

オルマはティトーの妻の顔を見ながら答えた。

「流された畑だけがわしら家族に与えられた分なのだ。それを急に神サマは取り上げなすった。何の気まぐれなのか、わしら家族を気に入らなくなったんだろうよ」

呂律の回らない口調でぼやいてティトーは軽く鼻を鳴らした。そんなティトーの姿をちらりと見たあと、彼の妻は大きく溜め息を吐いて申し訳なさそうに胸の前で手を組み俯いた。

「ロハは収穫を皆で分け合わないのか？　困った人がいたら助け合うことをしないのか？」

ティトーの小屋を出たあと、クシはオルマに問いかけた。

「土地は一族皆で占ってその割り当てを決める。それは各々に豊穣の神が分け与えてくださったものだ。それを活かすのは各々の努力

次第。神から分けてもらった土地を活かせないのは自分のせいだ。それが昔からのロハのしきたりなんだ。

前の年、ティトーは同じことを言ってあたしらを助けてくれなかった……」

「しかし、オルマたちが見舞われた虫の被害やティトーが受けた土なだれの被害は自分のせいではないだろう」

「そうだ。それは神に嫌われたのだから仕方ない。皆、毎年誰かが何かしらの被害を受け、収穫の量には必ず差が出る。どの家族も楽をして収穫を得るわけではないし、豊作といっても人に分けても余るほどの実りにはならない。苦労してほかより収穫を得た者が、いちいち不幸に見舞われた者の面倒を見ていたら損をするのは苦労した者じゃないか。働き者はいつも損をすることになる。あたしらは昨年我慢した分、今年は神から恵みを与えられた。それだけのことだ」

『……それではまた新たな恨みが生まれるではないか』

クシは、ロハたちの考え方に納得がいかなかった。

雨季は最後の嵐とともに終わりを告げ、風が少し涼しく感じられるようになった。

ロハたちは、収穫したとうもろこしで作った酒の甕だけを残し、谷を後にした。谷にやってきた時の荷物に加え、収穫した作物を抱えてまた平原に戻っていく。彼らの荷のひとつひとつが、これからのひと季節、ロハたちの命を支えることになるのだ。

谷間を上がり、小高い山を越え、リャマの群れが待つ平原まで、ロハたちの長い旅がまた始まった。

4、ピューマ（その1）

4、ピューマ

ロハたちは平原に戻り、また放牧の生活を始めた。

ポコは、平原の暮らしは厳しいと言うが、クシはのんびりとリャマを追って一日を終えるこの暮らしが気に入っていた。リャマを追いながら広い大地を走り回るオルマも、谷間の暮らしよりずっと活き活きと輝いているように見える。

豊作のお蔭で食べ物に不自由しないことが、この何もない土地の暮らしも穏やかに楽しく感じさせてくれるのかもしれない。数粒のとうもろこしを挽いて作るパンを分け合ったり、一頭のリャマの肉を保存して少しずつ何日かに分けて食べるという質素な食事だが、ロハにとっては十分恵まれたものだった。

乾季も深くなり、草平野には刺すように冷たい風が吹きつけるようになった。空の蒼はさらに深みを増して吸い込まれそうな色をしている。雨の降らないその季節の日差しは今までよりもずっと鋭い。気温は低いが、一日中外で働くロハたちは誰も、黒リャマにも負けないほど色濃く焼けていた。

昨季はまだロハに来たばかりで何もできなかったクシも、ようやくリャマを追うコツが掴めてきたところだ。相変わらず厳しいオルマの指導を受けながら、放牧民としての仕事をなんとかこなせるようになってきていた。

ときどきリャマに水を飲ませるために、クシが最初にオルマと出会った湖までリャマたちを移動させる。たくさんのリャマを追いな

がら移動するのは大変な作業で、行って戻ってくるにはまるまる一日かかった。

その日も、クシとポコとオルマの三人は湖までリャマを率いて行った。留守はチャキが守っていた。

湖から戻る途中、数頭の仔リャマが群からはぐれてしまい、クシが探しに行くことになった。幸い仔リャマたちは反対側の岸辺でまとまって草をはんでいた。

クシは慣れない手つきで仔リャマたち一匹ずつに縄をかけると、必死にそれを引っ張って丘の向こうに連れて行こうとする。そうすると悪戯ざかりの小悪魔たちはクシをからかうように違う方向へと駆け出した。

いくら力のある者でも一度に別方向へ引っ張られては、その場に抑えておくのが精一杯だ。大汗をかきながら縄を離すまいと全身で踏ん張り、仔リャマたちとクシはその場で長い間縄を引き合っていた。やがて仔リャマたちが虚しい抵抗に飽きて自らおとなしく従うまで、クシの悪戦苦闘は続いたのだった。

「思っていたより時間がかかってしまった……」

寒い季節にもかかわらず汗だくになっているクシが意地になって平静を装おうとしているのを見て、オルマは指を指して大笑いした。

「まだ放牧に慣れないのは仕方ない。段々とコツを覚えていけばいいのさ」

そう言ってポコは優しく慰めてくれたが、オルマは容赦ない言葉を浴びせる。

「いつも冷静な【くしゃみ】が、仔リャマごときに必死になってい

るなんて、おかしいったらありゃしない！」

クシはオルマを睨みつけたが、オルマはお腹を抱えて涙まで流しながら笑い続けていた。

ロハの集落に着いたのは、もう日が暮れた後だった。

帰り着く前に暗くなってしまったので、三人は途中で火を熾してたいまつに灯りをともした。やっとのことでリャマたちを彼らの塒（ねぐら）の草原に帰すと、三人はたいまつの灯りを頼りに家の方に向かった。

チャキが家に灯りをともしているはずだが、どこまで行っても家の灯りは見えてこない。昇りはじめた月の明かりに助けられて目を凝らすと、暗闇に沈んだ泥レンガの建物が見えた。空気抜きの穴からも入り口からも、まったく灯りは漏れていない。

ポコが顔色を変えて走り出した。オルマとクシも続く。

家に飛び込んだポコは、たいまつの灯りで慎重に家の中を照らしていった。ポコの目にまず飛び込んできたのは真っ赤に染まった床だった。震える手でたいまつを握り、その先を照らしていく。

人の足先が見え、腿が見え、その先の上半身はとうもろこしの山に埋もれていた。

「チャキ！」

ポコの後から家に入ってきたオルマは金切り声を上げてポコを押し退け、倒れている体に駆け寄った。上半身にかぶさるとうもろこしの山を狂ったように払いのける。

クシもオルマを手伝って、必死にとうもろこしを払い除け、腿を抱えてチャキの体を引っ張り出した。チャキの腹も胸も血だらけで、顔は蒼白だ。もう生きてはいないかもしれない。オルマは泣き叫んでチャキの体を抱きかかえた。

「一体、何が？」

クシが呟くと、ポコが頭を抱えて答えた。

「ピューマだ。ピューマがチャキを襲ったんだ。しかしチャキは日が暮れたら必ず火を焚くはずだ。それなのに何故ピューマが入ってきたのか……」

ポコは頭を振りながら、何故だ何故だ……と繰り返した。彼の妻もピューマに襲われ、悪夢がまた繰り返されたのだ。ポコのショックは計り知れない。

クシは、オルマが抱きかかえるチャキの無残な姿を悲痛な面持ちで見ていた。しかし、ふと何かに気付き、チャキの頭の横にしゃがみ込んだ。

チャキの耳に顔を近づけ、彼の名を呼ぶ。

「チャキ、チャキ……」

何度か呼ぶうち、チャキの指先がそれに反応してぴくんと動いた。

「生きているぞ！」

クシが叫ぶと、ポコとオルマが驚きの声を上げた。三人で手を持ったり体をさすったりして何度も呼びかける。チャキの体はときどきそれに応えてピクピクと動いた。傷だらけだが、よく見るとどの傷も急所を外れているようだ。

「良かった！　チャキ！」

オルマの涙が嬉し涙に変わった。手早く自分の服の裾を裂いてチャキの傷の手当てをする。

「ピューマが暴れたときに積み上げてあったとうもろこしの袋から中身が落ちてきたんだ。ピューマはとうもろこしに埋もれてしまったチャキをそれ以上襲うことができず、諦めて逃げていったんだろう」

ポコがホッとした顔で言った。

「しかし……チャキの血の匂いを覚えたピューマはまたやってくるかもしれない。ピューマを退治しなければ危険だ」

クシが入り口の外に広がる闇の平原を睨んだ。

「ピューマを退治するなんて、そんなこと無理だよ」

チャキを介抱しながら、オルマが溜め息をついた。

「ピューマはチャキの血を付けて逃げていった。夜が明ければ血の跡を辿ってピューマの塒（ねぐら）を探し当てることができるかもしれない」

「塒を探し当てたって、どうやってピューマを倒すんだい！」

オルマが顔を上げ、クシを睨んで聞き返した。

「私が行く。私はこれでも故郷で戦士としての訓練を積んできた。今ならチャキが与えた傷でピューマは弱っているはずだ。勝てるかもしれない」

そう言うと、チャキが埋もれていたとうもろこしの山の下から、血だらけの石斧を見つけて引っぱり出した。それはクシがクスコから唯一持ってきた物だが、ロハの村では使う機会がなかったため、普段は竈の横に置いてあったのだ。

チャキは咄嗟にその斧を掴んでピューマに抵抗したのだろう。斧の刃には血がこびりついていた。

「ダメだ、【くしゃみ】！　人間がピューマに敵うはずはない。しかも奴は傷を負っているのだ。気が立ってさらに凶暴になっている。【くしゃみ】がいくら訓練を積んでいたとしても勝てるわけがない」

ポコが必死で止める。

「随分と見くびってくれるな、ポコ。私は武術の腕には自信がある」

クシは笑って見せた。しかしその後で真顔になって続けた。

「それに……。

実は、私は故郷（くに）で死罪に等しい罪を犯したのだ。しかし運良く故郷を追われるだけで済んだ。かろうじて死罪を免れたこの身なのだ。万一ピューマに敵わなかったとしても、その命を、助けてくれたロハの為に捧げられるなら本望だ」

「莫迦なことを言うんじゃないよ、【くしゃみ】！

あんたは大事な家族なんだよ。ピューマが襲ってきたら、皆で一緒に戦えばいいじゃないか！」

オルマがクシを怒鳴りつけた。

「オルマ、万一の話だよ。私は命を粗末に考えているわけではない。

勝てる自信があるのだ。オルマまで私を見くびるのか？」

「だって【くしゃみ】。相手は獣の中の王なんだ。相手にしようなんて気が狂っているとしか思えない」

「獣の王でも獣は獣だ。人間には知恵がある」

クシはこめかみに人差し指を立てて得意気な顔をして見せた。

本当はクシに自信などなかった。逆に恐ろしくて息が詰まりそうだった。戦で敵を倒したこともない自分に凶暴な獣など倒せるのだろうか。

しかし、いったんその味を覚えたチャキの血を求めて、獣はまたやってくるに違いない。そうなればチャキだけでなく、オルマもポコも、自分も襲われるだろう。

命の恩人を救うために投げ出す命なら惜しくはない。クシは無理に自信満々の様子を装っていたのだ。

どんなに止めても聞く様子のないクシに、オルマ親子はそれ以上何も言うことはできなかった。

「ポコ、頼みがある。これくらいの石と縄をできるだけ多く集めてくれ」

クシは入り口に転がっていた握り拳ほどの大きさの丸い石を拾ってポコに見せた。

「それと、リャマの皮を厚く巻いて腕当てを作ってほしい」

「そんなことはお安い御用だが……」

（本当に行くつもりなのか）という言葉の代わりに、ポコは訴えるような目をクシに向けた。

「父さん、【くしゃみ】を信じよう。あたしらに協力できることがあるなら、できる限りやってやろうよ」

溜め息をつきながらオルマが呟くように言った。

ポコが集めてきた石と縄で、夜が明けるまで三人はボーラを作った。

「これをどうするんだい？」

クシに言われるままに作ったはいいが、その用途に見当がつかず、オルマはそれを顔の前に持ち上げて、垂れ下がった石がぶつかり合う音を聞いている。

「回して勢いをつけて投げ、動物の首や脚に絡ませて倒す」

言いながらクシは軽くそれを回し、部屋の隅に立て掛けられた鍬の柄めがけて投げた。ほんの少し回転させただけだが、ボーラは勢いよく飛んでいき、柄に固く巻きついた。オルマがそれをほどこうとしたが、びくともしない。

「へえ、【くしゃみ】は頭がいいな。これなら勝てる自信があるはずだ！」

オルマはボーラの威力に感心して、これならクシがなんとかしてくれるだろうと信用した。

『キヌア、獣に勝つにはどうしたらいい……』

縄に石を括りつけながら、クシは心の中の師に問いかけた。

――　全神経を研ぎ澄ませて自分の周りの空気を読み取ることが大切なのです　――

突然脳裏に、鮮やかにキヌアの声が蘇ってきた。

『キヌア、どうか私とともに戦ってくれ』

今、クシが頼れるのは、記憶の中のキヌアの教えだけだった。

夜が白々と明けるころ、クシは泥レンガの家を出た。

かち合って音がしないようにボーラを束ねて腰に結わえ付け、たすき掛けにした縄の背中側に斧を挿し、両腕にはリャマの皮を幾重にも重ねた丈夫な腕当てを巻いた。

「【くしゃみ】、必ず無事に帰ってくるんだぞ！　敵わないと思ったらすぐに諦めて逃げてくるんだぞ！」

オルマは心配のあまり、クシの姿が小さくなるまで大声でいろいろと呼びかけていたが、声が届かないくらいに離れてしまうと、いつまでも勢いよく手を振って見送っていた。

土の上には既に乾いて黒ずんだ血の跡が点々と付いている。ピューマの足跡も微かに残っている。

その日は風が穏やかだったのが幸いだ。黒い染みは風に運ばれた土に覆い隠されることなく、はるか遠くまでピューマが辿った道を示してくれていた。

血の跡が小さく薄くなってきたとき、小高い丘に突き当たった。丘を上り切り、その先を見下ろすと干上がった川の跡が見えた。水はないが、湿った土が蛇行する流れを描いており、それに沿って背の低い木がぽつぽつと生えている。

丘の上に身を潜めて慎重にその周辺に視線を走らせる。すると大きめの繁みの陰から動物の脚らしき物が覗いているのが見えた。

「あいつだ」

クシはそれがチャキを襲ったピューマであることを察した。黒い染みは微かではあるが、丘を越えてその繁みの手前まで続いていた。

視線をそこに向けたまま、ゆっくりと腰に手をやり、ボーラを留めている縄をほどく。そしてそのひとつを取り出して軽く放ると、ボーラは半円を描いて繁みの前にすとんと落ちた。

落ちてきたボーラに誘われるように、繁みの中から琥珀色の丸い頭が覗いた。突然目の前に降ってきた謎の敵の正体を確かめようと盛んに鼻を鳴らしながら近寄っていく。続いて現れた頭に似つかわしくないどっしりと大きな体には、ところどころ肉が裂けた跡があり、乾いた血がこびり付いていた。

チャキが必死に負わせた傷だ。しかしその傷がピューマの頑丈な体を弱らせている様子は見られない。

クシは二つ目のボーラを取り出し、今度はそれを勢いよく回して力いっぱい放った。ボーラは高速で回りながら空を切り、ピューマの後ろ足を捉え、絡みついた。

猛獣は敵の奇襲を察して、素早くボーラが放たれた方へ向き直り、

突進してきた。その脚を捕らえていた筈のボーラは、強靭な後ろ足を完全に締め上げることはできておらず、虚しくほどけてしまった。

クシは向かってくるピューマの眉間を狙って再びボーラを投げつけ、すぐさま斧を構える。

ボーラを眉間に浴びたピューマは一瞬たじろいだが、さらに獰猛さを増して一気にクシに飛び掛ってきた。

クシはリャマの皮が厚く巻かれた左腕を突き出し、ピューマの牙を食い止めた。ピューマはクシの腕に喰らいついたまま、頭を左右に激しく揺すった。クシの腕をちぎり取ろうとしているのだ。クシは喰いつかれた腕と両脚に力を入れてピューマの動きに抵抗する。そしてもう片方の腕で、ピューマの首に向かって斧を何度も振り下ろした。

首の苦痛に耐えかねたピューマはクシの腕から口を離して後ろに飛び退いたが、再びクシに飛び掛ろうと身を屈めた。

クシはピューマの動きを慎重に観察しながら、斧を握る反対側の手を腰のボーラにかけ、石の部分を持って引き抜いた。

ピューマは低く唸ると前脚で地面を引っ掻いた。

ピューマが牙をむき出して飛び上がった瞬間、クシはピューマの口の中めがけてボーラの石をまっすぐに投げ入れた。石がピューマの喉にすっぽりと納まった。そして飛び上がったピューマの腹の下に素早く転がり込み、そこに一撃を加える。

ピューマはクシの身体を飛び越えてその向こうに仰向けに転がったが、すぐさま身を翻して起き上がった。

しかしすぐに襲い掛かってくる気配がない。むせながら、しきりに頭を振っている。クシの投げ入れた石が喉を塞いでいるのだ。

その隙をクシは見逃さなかった。真正面から向かっていくと、ピューマの脳天に斧を振り下ろした。

気付いて獣はクシに飛び掛ろうと前後の脚をぐっと伸ばしたが、クシの斧が獣の額を打ち砕くのが僅かに速く、脚を突っ張ったまま

ドッと横に倒れた。
クシは気を失った獣の身体に跨り、その喉をかき切ってとどめを刺した。ピューマが再び起き上がることはなかった。

戦いが終わり、クシはしばらく呆然と獣の遺骸を見つめていた。

――獣の王に勝った――

ふと我に返って自分の体を見回すと、流れ出る自分の血と獣の血で全身が赤い斑模様になっている。
うまくかわしたと思っていたピューマの爪は、クシの体をあちこち傷つけていた。
腕に喰いついたピューマの牙は厚いリャマの皮を貫いて腕の肉にまで達していた。ボロボロになった腕当ての下から血が後から後から滲み出てきて、地面にぼたぼたと滴り落ちた。

それをぼんやりと見つめているうちに、クシの意識は薄れていった。

4、ピューマ（その2）

「クシ、クシ……」

誰かが呼んでいる。懐かしいその声にクシは目を開いた。

ゆっくりと上半身を起こすと、目の前にはキヌアがいた。いつもの稽古の格好で、真っ白な朝もやを背にして立っていた。

「キヌア……。私はクスコに戻ることができたのか？　罪を赦されたのか？」

問いかけると、キヌアは何も言わずに微笑んで頷いた。

「そうか。しかし……。

私は、ビクーニャを殺した罪よりも、もっと重い罪を犯してしまった。

ピューマを殺したのだ。ビクーニャが神の遣いならばピューマは獣の王、神そのものだ。あのように強健な獣に挑むなど無謀なことだと分かっていながら捨て身で挑んだのだ。そして私はその不可能なことをやってしまった。ただ夢中だった。恩人を助けたかったのだ。

後悔はしていない。この上は天の裁きに従うのみだ」

クシはそう言ってうな垂れた。

キヌアはクシの前に跪くと両手を差し出した。その手でクシの手を取り優しく包み込む。　クシが再び顔を上げると、キヌアは微笑んだままゆっくりと首を振った。キヌアの笑顔を見つめていると、

負い目を背負った彼の心が少しずつほぐれてくる。

「でもキヌア……。私は獣の動きを察することができたのだ。あのときキヌアの教えを思い出した。

――　全神経を研ぎ澄まして自分の周りの空気を読み取る　――

今まで分かっていてもなかなかできなかったことが、命がけの闘いでようやく掴み取ることができたのだ。皮肉なものだ。私にはもう先はないというのに」

クシは淋しく笑った。キヌアがクシの顔を覗き込んで静かに口を開いた。

「その感覚は稽古では得られないわ。自分の命が懸かってはじめて得られるものだわ。あなたはそれを体得したのよ。

神の裁きがあるとすれば、それはあなたがその技を民のために使っていくという使命だと思うわ」

「キヌアは優しいのだな。そんな慰めを言ってくれるな。私に待っているのは死罪だ」

「いいえ。慰めなんかではない。その使命は死罪よりも辛く苦しいことかもしれない。それでもあなたは生きてその使命を果たしていくのよ」

クシがキヌアを見つめていると、キヌアはまた微笑んで深く頷いた。

そしてクシの手を離すと立ち上がり、くるっと背を向けて濃い朝霧の中に消えていってしまった。

「どこに行くんだ。待ってくれ、キヌア！」

クシは立ち上がって追いかけようとするが、体は鉛のように重く動かない。

やがて周囲の霧が晴れてきて、目の前に壁が見えてきた。それはクスコの石壁ではなく、ロハの泥レンガの壁だったのだ。

「私は戻ってなどいなかった。キヌアは幻だったのか……」

しかし、何故か手にはキヌアの手のぬくもりが残っていた。また霧が流れてきて、今度は自分の体さえも見えないくらいに何もかも真っ白に覆い尽くしてしまった。

天井に開いた穴に吸い込まれるように、煙がゆらゆらと立ち昇っていく。ぼやけた視界の中でその白い筋の動きだけがやけにはっきりとしていた。

気付くとクシは横になって天井に立ちのぼっていく煙を見つめていた。体を起こそうとしたが、地面に縛り付けられているかのように、ぴくりとも動かない。無理に力を入れようとすると、全身を多数の槍で一斉に突付かれたような激痛が走った。

まったく動くことができず、ただ煙の動きを目で追っていると、その視線の先に誰かがひょいと顔を出した。しかし目が霞んでよく見えない。

「キヌア？」

じっと目を凝らしていると、ぼんやりとした人影が次第にはっき

り見えてきた。

「【くしゃみ】目を覚ましたんだね」

目にいっぱいの涙を溜めて、オルマが見つめていた。

オルマはクシの手をきつく握り締めている。さっき夢の中でキヌアのぬくもりだと感じたのは、オルマの手だったのだ。

「おお、奇跡だよ。【くしゃみ】が生き還った！」

ポコが叫んでクシを覗き込んだ。オルマがクシの体をそっと抱えて、水の袋をあてがい、それを飲ませた。クシの喉に冷たいものが走り意識がしっかりとしてきた。

「よかった。もう二日も目を覚まさなかったからダメかと思った。本当に良かった……」

「二日？」

クシは不思議な顔をした。

ピューマを倒して気が緩んだ途端、意識がなくなり、キヌアの夢を見ていた。しかしそれはほんの一時のことではなかったか？

「【くしゃみ】がピューマを探しに行ったあと、オルマは心配のあまりお前を追いかけたのだ。ようやくお前を見つけたときには、ピューマの遺骸の上に覆いかぶさるように倒れていたそうだ。

オルマはひとりではお前を連れ帰ることができず、村に助けを呼びに来た。【くしゃみ】が死んじゃう！と半狂乱だったよ。

わしらが駆けつけたときには、お前は大量の血を流したせいで冷たくなっていた。それから二日間、まったく目を覚まさなかったの

だ。わしらはもう諦めろと言ったのだが、オルマは必死でお前の体を温め続けた。そうしたら青かったお前の顔に段々と血の色が戻ってきて、目を覚ましたではないか。オルマがお前を生き還らせたんだ」

ポコが説明すると、オルマは顔を赤らめた。

「【くしゃみ】に生きる力があったからだ。あたしは手伝っただけさ。でも、本当に良かった」

オルマがぽろぽろと涙を流した。この二日間よほど心配して、必死に看病してくれたのだろう。

「ありがとう、オルマ」

オルマは泣きながら首を横に振った。

「お礼を言うのはこっちだよ」

向こうから声がして、体中に布を巻いたチャキがよろよろと近づいてきた。

「チャキ！　気付いたのか？」

「うん。まだ傷は痛むけど、もう大丈夫。
でも【くしゃみ】がピューマを倒してくれなかったら、やっと良くなっても、またあいつに襲われて命を落としていたところだよ。ありがとう【くしゃみ】」

「そうか、良かった。本当に……」

言いながらクシは、全身に痛みが走るのを覚え、顔を歪めた。

「さあ【くしゃみ】、もう少し寝ていたほうがいいよ」

オルマは母親が子どもを寝かしつけるように、クシの胸に手を当てて優しくとんとんと叩いた。その響きに誘われるように、クシは深い眠りに落ちていった。

「……を、ロハから追放しよう」

「そうだ。あいつのやったことは決して赦されないことだ」

数人がぼそぼそと話し合う声を聞いて、クシは再び目を開けた。話し声のするほうに顔を向けると、ポコと二人の男たちが膝を突き合わせて話し合っていた。壁に積まれたとうもろこしの袋の上にオルマとチャキが座り、彼らの様子を上から神妙な面持ちで覗き込んでいる。

「あいつのせいでチャキは襲われたのだ。チャキは命を落としていたかもしれない。殺人と同じだ」

「昨年のポコの災害のときには一粒のとうもろこしも出さなかったくせに！」

「そうだ。ああいう奴がいる限り、ロハの団結が崩れるではないか」

クシは、ただ事ではないと感じて無理に体を起こした。だいぶ眠ったせいか、体はだいぶ軽くなっていたが、やはり体中に鋭い痛みが走った。

「どういうことだ？　チャキがピューマに襲われたのは誰かのせいなのか？」

クシが後ろから声をかけると、五人が一斉にクシを振り返った。

「いや、大したことじゃない。心配いらないよ。お前はまだ寝ていた方がいい」

ポコが慌てた様子で言った。

「穏やかには聞こえなかったが。
お蔭で私はもう大丈夫だ。詳しく聞かせてもらえないか？」

クシが真剣な顔で言うので、ポコは少しの間考えてから言った。

「そうだな。【くしゃみ】にも話しておいたほうがいいな」

ポコがほかのふたりに同意を求めると、彼らは顔を見合わせ、お互いに頷いた。

「あの日、わしらの留守の間に、うちにティトーがやって来たそうだ。ティトーはチャキに足踏み鍬の先を向けてとうもろこしを出せと言った。オルマや村の者が少しずつ分けてやったとうもろこしでは足りず、うちのとうもろこしを無理やり奪おうと考えたのだ。
チャキが断ると、ティトーは鍬の柄でチャキの頭を殴った。チャ

キが意識を失っている間に、やつはとうもろこしの袋をいくつか奪っていったのだ。

チャキは日暮れになっても目を覚まさなかったので火を焚くことができなかった。さらに殴られた頭の傷から漂う血の匂いに誘われて、ピューマが忍び込んで来たのだ。

チャキはそのとき意識を取り戻したが遅かった。ピューマはチャキに襲い掛かってきた。暗闇の中で竈の横にクシの斧があることを思い出し、手探りで斧を取り出すと、覆いかぶさるピューマを切り付けた。ピューマがひるんだ隙に逃げ出そうとして、とうもろこしの袋の山に当たり、落ちてきたとうもろこしの下敷きになってしまったのだ」

チャキはポコが話すのを頭を抱えて聞いていた。チャキにとっては二度と思い出したくない出来事だ。

「だから、すべての原因はティトーにあるのだ！」

ポコが力強く言い切った。

「……本当にそうだろうか？」

クシは、ポコと、ほかの二人の男をゆっくりと見た。ひとりは背中の曲がった老人、ロハの長老。もうひとりは大柄の男カチカリャ、ロハの実質的な族長だ。

「本当にティトーを追い出せば済む問題と思っているのか？」

クシはもう一度、三人に向かって聞き返し、さらに奥にいるオルマとチャキにも問いかけるように二人に目を向けた。

「悪いのはティトーだ」

オルマが声を上げた。

「一族の秩序を乱す者を、ここに置いておくわけにはいかない」

長老は毅然として言った。

「私は気さくで親切なロハが大好きだ。でも、ひとつ気になることがあった。収穫をめぐって小さな争いがよく起こるということだ。私のような異邦人を親切に受け入れてくれるのに、なぜ同じ部族の者同士で争うのか。不思議でならない」

「畑の収穫は、家族の命を守る大切な糧だ。不運に見舞われた者がいたとしても、助けてやれる余裕などない。それに毎年誰かが天の災いを受ける。それは誰にでも起こりうることなのだ。それに耐え抜けばまた豊作の年もあるのだ。すべては天と大地の神の思し召しだ。」

族長のカチカリャが説明した。

「そうだろうか。天災を受けた者だけが不運と割り切らずに、一族でその被害を請け負えば、ひとりが大きな被害を背負って苦しむことはなくなるではないか」

言葉に力を込めたため、クシはまためまいを覚えてふらついた。

オルマが慌てて袋の山から飛び降りて駆け寄り、クシを支えた。

「【くしゃみ】、あたしらはこうやって何十年も暮らしてきたんだ。それに従えない奴はロハとして暮らす資格はないんだよ」

「今のままでは、またティトーのような者が出てくる。その前にロハのやり方を変えていった方がいい。私に考えがある」

クシはポコと長老とカチカリャの三人の顔を見て言った。

「なんだ？話してみろ」

カチカリャが訝し気な顔で聞く。若造が生意気な口を聞くなと言わんばかりだ。

「ロハたちは、自然から与えられた土地を活かせないのは自分の責任だと言うが、それは違う。

ロハに与えられたすべての作物が自然から与えられたものなのだ。一部の土地が災害に見舞われてもほかのすべての作物を合わせて分ければ苦しむ者が生まれない。全体が不作になったとしても、収穫を分け合って協力してしのいでいけば乗り越えられる。少なくとも一家族だけが苦しんで恨みを持つこともなくなるではないか。争いも生まれない」

「しかし、すべての収穫を等しく分けるなんて無理だ。それに自分の土地が豊作だった者は、それを不作だった者に分けてしまうのは嫌がるだろう」

「土地を分け与えてしまうからだ。畑はすべてロハの一族のものだ。そして人々はそこを協力して耕し、一族の倉庫に蓄える。そこから長が等しく分けていくのだ。倉庫は、数年間の蓄えができるような造りにしておく。その年に余った食料は次の年が不作だったときのために取っておくのだ。

最初は抵抗があるかもしれない。しかしこの生活がうまく回っていくようになれば、何年も飢饉が続かない限り、飢えも争いもなくなる……」

一度に話したため、クシは額にじっとりと脂汗をかき、言葉を切ってからがっくりとうなだれた。

「分かったよ。分かった。少し休め、【くしゃみ】」

オルマは自分の袖でクシの汗を拭き取ると、クシの身体を抱えて横たえた。クシはしばらく苦痛に小さく呻いていたが、やがて眠ってしまった。

まだ苦しそうなクシの寝顔を見ながら、オルマが呟いた。

「【くしゃみ】は本気でロハのことを心配してくれているんだ。何とかできないか？　カチカリャ」

カチカリャはクシの考えにはまだ半信半疑だった。しかしクシの必死の訴えを聞いたあとでは、それを無碍にすることもできずにいた。

「【くしゃみ】の怪我が良くなったら、本当にそれが出来るのか見せてもらおう。【くしゃみ】の責任でロハをまとめていってもらおうじゃないか。どうだろう、長老」

長老は頷いた。

「少なくとも、この若者はロハのことを思って言ってくれているのだからな。うまくいかなければ、元の生活に戻るまでだ。

チャキ、それまでティトーを追い出すことはできん。それでもい

いか？」

「ぼくは【くしゃみ】を信じるよ！」

チャキはいつにない強い眼差しを向けた。

「【くしゃみ】、責任は重いぞ。早く良くなってロハを助けてくれるのを待っているからな」

荒い息をしながら寝ているクシの髪を撫でながら、オルマは言った。

5、斜陽の都

5，斜陽の都

クスコの街には淀んだ空気が漂っていた。

その頃、皇帝ビラコチャは公の席に出るのを拒むようになり、滅多に人前に顔を出さなくなった。

皇帝の不在にその代理を任されるのは当然、皇太子―ウルコである。しかし怠惰な彼はすべての政（まつりごと）に無関心で、国の重要な会議で居眠りをしていることも珍しくなく、最高位の者が下すべき決議はいつも重臣に任せっきりであった。

上に立つ者が無能であった場合、単に下の者がその責務を負って苦労するといった単純な図式で済むのならまだ良い。国の最高権力者たる者がそうであったときには、必ずやこれを好機とばかりに今まで表舞台に立つことを赦されなかった者たちの台頭が始まる。

クスコも例に漏れず、野心をもつ重臣たちが己に都合の良い方向へと政治を動かし始めていた。彼らに有利となるものなら民が苦しもうとも強引に推し進め、関心の及ばない下々の訴えはすべて切り捨てていった。

さらに目先の甘い汁を吸う方法を覚えた重臣たちにとって、対外的な問題や国の将来などを考えることはまったくもって面倒な話で、そういった案件に対してはほとんど目を逸らしていたのである。

それに加え、事実上最高位であるウルコには誰も意見できない。彼が皇帝の代理としてその位に就いてから、彼の愚行はひどくなるばかりだった。

いつも酔っ払って側に女をはべらせ、気に入らなければ侍従を殴る。酔って乱れた風体を晒し、街を徘徊していることも度々あった。

いまや宮殿内だけではなく、クスコの街全体に不満と憤りの声が高まっていたのだ。

「兄上、ウルコの噂をお聞きになりましたか？」

リョケが、兄のアマルを朝稽古に誘い、手合わせをしながら訊いた。

二人の周囲には、武術の指導を受ける少年たちの威勢の良い掛け声が満ち満ちていて、彼らの声がほかに聞かれる心配はない。

アマルはリョケの斧に自分の斧を押し付けながら言った。

「ああ、知っている。毎晩、陛下の側室たちの部屋を順に渡り歩いているとか……」

「後宮での権威をもつウルコの母が見て見ぬ振りをしているのですから、ウルコは勝手し放題です。

街なかに出て、酔って醜態を晒していることもあるそうで、市民の間にもウルコの悪評は広まっています」

「父上は毎夜キヌアの部屋に入り浸りで、気付いていらっしゃらないのだな……」

賑やかだった少年たちの掛け声がぴたりと止み、彼らは吸い寄せられるように中庭の中心に集まり、中心から放射線を描くように美しく整列して一斉に腰を下ろした。

少年たちの中央にすっと立つ長身の女性。たくさんの羨望の眼差しを受けながら、彼女は武器の構えの模範を示して見せている。

「あの女はクスコに災いをもたらす存在かもしれん……」

中央の女性に気を取られているアマルの斧を思い切りはじいて、リョケが言った。

「兄上、キヌアは関係ないではないですか。むしろ憐れなのはキヌアです。クスコに嫁いでからしばらくは皇帝に相手にされず、ようやく皇帝に認められたかと思えば、皇帝を惑わす存在ではないかと噂され……」

「リョケ、何をムキになっている？」

「別にムキになっているのではありません。キヌアのせいにする前に、我々が何とかしなくてはいけないのではないですか？」

辺りがしんと鎮まってしまったため、アマルはリョケの襟首を掴んで引き寄せると、耳元に顔をぐっと近づけて耳打ちした。

「分かっているが、これはそんな簡単なことではない。今や表立って政治を執り仕切ることのできなかったウリンの貴族たちが、ウルコを傀儡として裏で堂々と政権を握っている。これ以上ウリンの貴族が好き勝手をするのを阻止するには、もはや普通の手段では無理なのだ……」

ケチュア族が生きる大地では、太古よりどの部族も普遍的な自然信仰のもとに暮らしていた。自然は常に相対するふたつの概念の間で均衡を保っていると考えられている。天に対しては地、北に対しては南、昼に対しては夜……。

この自然の摂理に倣い、ほとんどの部族にはふたり、ないし偶数の長が存在したのである。

しかし、急速に勢力を伸ばし、多くの民と異民族を抱えたケチュア族は、太古のしきたりを保っていることが難しくなった。この大部族をひとつにまとめるためには絶対的な求心力が必要であり、やがて権力を握るのは唯一無二の皇帝となったのだ。

建前では皇帝と同じ地位をもつとされる皇族も存在していたのだが、常に戦いと隣り合わせにあったため、やがて、ふたりの中で、武力に長け、多くの功績を為した方が皇帝と認められ、他方の存在は軽んじられることとなった。

しかしかつてふたりの長が存在した名残は未だに存在し、それは貴族の派閥となって受け継がれていた。

ふたつの派閥とは、ハナン（天）とウリン（地）である。

貴族たちはこの大きな二大派閥の中に、それぞれの家系を持っていたのである。

ウリン派はクスコを建国した祖から五代目までの皇帝を輩出し、六代目から現皇帝ビラコチャまではハナン派の出自である。皇帝の地位は特別であるが、その下の皇族、貴族たちになると、どちらの権威も同等である。同等であるがために、権力を巡る争いは熾烈であった。

ビラコチャの子どもたちはそれぞれの母系によってハナンとウリンに分かれていた。

ウルコは、ビラコチャからその母とともにハナン派の新しい家系

を与えられていた。アマルたちの兄弟は母がハナン出身の皇后であるためにハナン派である。

皇位継承を有力視されている皇子たちが全てハナン派である限り、ウリン派から次期皇帝を立てることは叶わない。しかしそのウリン派の者たちにとって、無能なハナンの皇太子が権力を握っていることは好都合であった。

皇太子を蔭でうまく操り、実質上の権威を握ることが可能だからである。同じ家系の者を次々と重臣に取り立てることも、身内の懐が潤うような財政策も、もっともらしく仕立てて申請すれば、皇太子は特に詮索せずに許可を下してくれる。

ウリンの貴族たちは巧みに計画を進行していった。ハナン派の者たちが気付いた頃には、ウリンが宮殿内の決定権をほぼ掌握していたのだ。

もちろん、ハナン派の中にも自分の一族の利になるように、同じような画策をしている者もいた。

私利私欲を貪ろうとする者たちは進んでウルコを指示し、かえってウルコの権力が増大していくという矛盾も生まれていた。

アマルの言葉を聞いて、リョケが呟いた。

「普通の手段ではないとすれば……革命……」

瞬時にアマルははじかれた斧を拾うと、リョケの喉元に突きつけた。

「滅多なことを口にするな、リョケ。お前は口が軽すぎる」

アマルは斧を引いてリョケに鋭く一瞥を与えると、マントを翻し

て足早に中庭を出ていった。

『兄上はいったい何を考えている？』

リョケは去っていくアマルの後ろ姿を見つめて、急に心がざわついた。

指導を終えて部屋に戻ってきたキヌアは、異様な光景を目にして立ちすくんだ。

部屋の前には枯れ草や枯れ枝が山のように積まれていて、入り口を塞いでいた。

「なんですか！　これは！」

ティッカが叫んで枯れ草の山に飛びつくと、狂ったようにそれらを払い退け始めた。

「まあ、御覧なさい。異民族の娘は鳥の巣のようなねぐらに住んでいるんだわ」

「おお、汚らしい。あの娘がいる限り、そのうち宮殿中が鳥の巣のようになってしまうわよ！」

回廊の向こう側から着飾った側室がふたり、こちらを眺めてわざと聞こえるように話していた。

「なんという嫌がらせをするのですか！」

ティッカが彼女たちに向かっていくと、側室たちは抱き合って怯えるような素振りをした。

「まあ、まるで野獣だわ！　恐ろしい。私たちにそんな汚らしい物が運べると思うの？　知らないわよ！」

「自分たちで集めておいて、見つかったら私たちがやったというつもり？　ひどいわ！」

「さっさと片付けなさいよ。ひどい匂いがして堪らないわよ」

ふたりの側室は、甲高い声で笑いながら回廊を走り去った。

ティッカは悔し涙を流しながら戻ってきて再びゴミの山に飛びつくと、その悔しさをぶつけるように太い枝を引っ張り出しては傍らに力いっぱい放った。目の前の悪意の固まりと、嘲笑う側室たちの姿を目の当たりにして、キヌアは深い溜め息を吐き、自らも枯れ草を拾い始めた。

「何故こんな目に遭わなくてはいけないんでしょう！　キヌアさまといえば、キリスカチェでは偉大な天の女王の娘にして指折りの戦士。誰もが跪く存在でした。友好のために将来有望とされた戦士の座を降りてまで嫁いできたというのに、この国の者たちは異民族というだけで私たちをまるで虫けらのように見て！」

キヌアは何も答えずに黙々と片付けをしている。ティッカは大きめの枝を思い切り放りながら、大声で話し続ける。

「でも、キヌアさま。皇帝陛下だけはキヌアさまの味方ですよ。あのように下劣な者など放っておけばいいのです。何と言われようと、

陛下のご寵愛を受けているのはキヌアさまだけなのですから。こんな嫌がらせをするのも、ひとえにキヌアさまが羨ましいんですよ！」

「心配しないでティッカ。このくらい何てことないわ」

キヌアはティッカに笑顔を作ってみせたが、『何でもない』とはとても思えないような悲しげな笑顔だった。

5、斜陽の都（後書き）

（解説）

／／／ハナンとウリンについて／／／

インカ皇族の派閥について、実は私自身もうまく理解できていません。

単なる皇族の系統だけでなく、この地域独特の世界観であり、

このふたつの派閥はクスコ市を二分して上の領域、下の領域に居を構えていました。すべての空間を二分し、それをさらに二分し、その間を三分割するという空間の理念で、それぞれのポジションに人も時間も分類されるという考え方のようです。（セケ・システム）

この派閥が一定の秩序のもとで皇位を継承していたのか、それとも常に争いがあったのかも定かではありませんが、名前の知られている歴代皇帝以外に数十人が存在していたという説や、同時期に二人が同じように権力を握っていたという説、無能な皇帝は伝承から名前とその存在を抹消されたため今記録にあるのは一部の皇帝だという説、さまざまな説が混在し、王位継承の方法について定かな説はまだありません。

最近、Ｗｉｋｉｐｅｄｉａの解説を読んだら、皇帝は同時期に三人存在したと書かれていました。

ますます理解に苦しむ内容になってしまったので、物語の中で述べた解説はこの物語の進行上、私が勝手に解釈し、創作を加えたものと理解してください。

6、　悲しみを越えて　（その1）

6、　悲しみを越えて

クシの体はだいぶ回復し、最も深い傷を負った片腕をリャマの皮でしっかりと固定していれば、大体のことはできるようになった。チャキの方は、体中に痛々しい傷跡は残るものの、もう痛みを感じることはなく、普通に生活できるようになっていた。

一家は、あの悪夢が嘘だったかのように、また穏やかな生活を送るようになっていた。

その日はリャマたちを早めに塒（ねぐら）に帰し、ポコの一家は家の前で雑談をしながら毛糸を紡いでいた。

クシがまだ本調子ではないから放牧のときに自分の苦労が絶えないとオルマがぼやき始め、ほかの三人は日が傾き出したことを好機に、そろそろ家に入ろうと片付けを始めたときだった。

そのとき夕焼けを背にした黒い影が音もなく近づいてきて一家の傍に立った。オルマがギョッとして振り返ったが、その姿を確かめて安心したように呟いた。

「なんだ。カチカリャじゃないか。驚かさないでくれ」

しかしカチカリャはその大きな体を無理やり縮めるかのように小さく背中を丸め、ぐったりとうなだれていた。しばらく一家の前で地面を見つめて立ちすくんでいたカチカリャが、聞こえるか聞こえないかというくらいか細い声で告げた。

「ティトーの子どもが死んだ……」

オルマが聞き違いかと思って、カチカリャに大声で訊き返した。

「何だって？　カチカリャ」

「……ティトーの末の子どもがさっき、死んだんだ」

その衝撃的な内容をカチカリャは繰り返した。聞き間違いではない。

「何でだ？」

ポコが震える低い声でカチカリャに問う。

「飢え死にだ」

「だって！　うちからとうもろこしを奪っていったじゃないか！」

オルマは怒りを向ける先がなく、カチカリャの襟首を掴んで怒鳴った。

「ティトーがポコのとうもろこしを盗んだときはもう手遅れだったんだ。おそらく平原に戻ってきたときにはすでに腹が弱っていたに違いない。弱った腹では干し肉などは受け付けないからな。気付いて盛んに穀物をやろうとしたが遅かったのだろう。それからあっという間だったらしい……」

「ティトーは何で早くにそれを言わなかったんだ！　そうと知って

いればもう少し分けてやることもできたのに」

「あいつは自分で何とかできると思っていたのだ。昨年ポコに何も援助しなかった負い目もあったからな。

高原に来てから末の子どもを見かけないので、どうした？と訊いたことがあったが、ピューマを怖がって外に出ようとしないのだと誤魔化した。そうしてまで隠そうとしていたんだ」

「でも、そうやって意地を張ったために、チャキも【くしゃみ】も死ぬような怪我を負い、最後には自分の子どもを亡くしてしまったんじゃないか！　なんて莫迦なんだ！」

オルマはカチカリャの胸を叩いて泣き叫んだ。激しい後悔と怒りを持っていく場が見つからない。

「【くしゃみ】……いや、クシ……」

カチカリャが弱々しくクシに呼びかけた。

「お前が言ったとおりだ。今までのロハのやり方では、悲劇は繰り返される……」

カチカリャを追ってあとから長老もやってきた。そしてクシの前に立ち、手を取って真剣な眼差しでクシの瞳を覗き込みながら言った。

「クシよ。そなたにはロハを変えていける策があると言ったな。

ロハは、大昔は数家族が寄り合って生活するだけの小さな集団だった。そういう時代なら、各々が自由に土地を手に入れ、ごく僅かな収穫が得られれば十分に生活は潤った。しかし今は多くの家族が

共に生活する大集団だ。畑の割り当ても限られてくる。もはや『自分の糧は自分で』という考えは通用しないのかもしれん。大勢の人間が集まれば争いも起きるが、協力すればそれ以上に大きな力となる。

クシの考えを皆に聞かせてもらえないか？　皆が納得すれば喜んでお前に従おう。この通りだ」

長老が跪いて深々と頭を下げると、カチカリャもそれに従った。

「長老、分かりました。もう悲劇を繰り返さないために知恵を絞りましょう」

クシは長老の前に跪き、その手をしっかりと握って約束した。

幼くして亡くなった命を天に返すためには、高い山に葬らねばならない。ロハたちはそう信じていた。

集落に、女、子どもと数人の留守番を残して、男たちはティトーの子どもを弔うために高い山の頂を目指した。雨季の大移動のときと同じく数日を掛けて山地に向かう。

その隊にはティトーの妻とオルマの姿もあった。子どもが入れられた小さな籠に縋りついて歩くティトーの妻を必死で支えて歩くオルマ。

ティトーが罪悪感を感じて援助を申し入れられなかったのと同じように、今度はオルマがティトーたちに罪悪感を抱いている。本当はオルマもティトーの家族を心配していたのだろう。しかし意地や誤解がティトーもオルマも追い詰めてしまったのだ。

鎮痛な面持ちで黙々と歩き続けるロハの民ひとりひとりを見て、クシは本気でこの民を救う方法を考えねばならないと、決意を新た

にした。

弔いの儀式を終え、山を下りたロハの男たちが小休止を取っているとき、長老が皆の前に立って呼びかけた。

「われわれは大きな過ちを犯していた。しかし長年の習慣に慣れきってその過ちに気付かなかったのだ。その過ちに気付く知恵と変えようとする努力があれば、小さな命を失うことはなかったのかもしれぬ。

ここにいる異民族の青年がそれを教えてくれた。そしてわれわれが救われる道を示そうとしてくれておる。今までの伝統から抜け出すのは勇気がいるが、まずはこの青年の話を聞いてやってほしい」

そうして傍らにクシを立たせた。クシは、自分を見上げるロハの男たちをひととおり見回した。向こう側で膝を抱えて背中を向けているのはティトーだ。彼はしばらく何にも耳を貸さないだろう。しかし、ティトーの妻は寄り添うオルマとともに真剣な顔でクシを見上げていた。

クシは深く息を吸い込むと、ゆっくりと語り始めた。

「私を救ってくれたロハの民に、まずは感謝を述べたい。荒地で死にかけていた私は、あなたたちのお蔭でこうして生き延びることができたのだ。

しかし、あなたたちが災難を受けても何もできなかったことが悔しい。そしてとうとう、幼い命が消えてしまった。

ロハの民は支えあって生きている。しかしそれは個人の好意の範囲でだ。それではどこかで誤解や嫉妬が生まれる。そして今回のような悲劇になることもあるのだ。

私は、ロハの民がすべてひとつの家族となって、労働も収穫も等

しく分け合ってはどうかと思う。天から与えられた土地を皆で協力して耕す。天災を受けた土地があれば、ほかの土地で補うのだ。そして出来た作物はすべてロハの皆の物だ。だからロハの民なら誰にでも、老人も病人も子どもにも、等しく与えられる権利があるのだ。

すべての民に等しく収穫を分けるためにはどうすれば良いのか私は考えた。まずはすべての収穫が収まる大きな倉庫を作り、作物を納める。そこから長が皆に平等に分けるのだ。倉庫には作物が腐らないような工夫を凝らし、余った作物は次の年にも使えるようにするのだ。

天災は人の力ではどうすることもできない。しかし、皆が協力してしのいでいけば、被害を少なくすることもできるのではないだろうか。

私のことを信用してくれる者は一緒に倉庫を建て、いま持っている作物を預けてほしい」

クシの話を聞いて、ロハたちはざわついた。

それがどんな内容であっても、古くからの慣習を切り捨てるには勇気がいる。ロハたちの反応は冷ややかで、クシの案を喜んで受け入れる者はいなかった。

そのときカチカリャが声を上げ、立ち上がった。

「クシは命をかけて村をピューマの脅威から救ってくれた人だ。私はクシを信用する。喜んで作物を預けよう」

カチカリャはロハの中で一番の働き者であり、大家族を抱えている。持っている作物の量も他の者より多いのだ。そのカチカリャがクシに賛成したことで、ぽつぽつと立ち上がって賛成する者が出てきた。

ティトーの妻も、後ろのほうに座るティトーの背中にちらちらと目を遣りながら、それでもオルマとともに立ち上がった。

協力を申し出たのはその場にいた者の三分の二程度だったが、倉庫を建てる人員には十分な数だ。

「ありがとう。では帰ったら早速倉庫を建てる準備をしよう。大事な作物は預けてくれた人すべてに役立てる。二度と悲しい争いが起きないように」

クシは協力を申し出てくれたロハたちの肩を順に抱いて感謝を述べた。

6、悲しみを越えて　（その2）

クシに協力を申し出たロハたちは、村に帰ると早速倉庫を建てるために使う日干しレンガ作りに入った。留守を守っていた者も加わるとそれは盛大な作業となった。交替で放牧をしながら、作業は順調に進んだ。

大勢で協力して同じ仕事を行うのは楽しいものだ。本来陽気なロハたちは、黙々と単純作業をこなすのを味気ないと感じたのだろう。どこからともなく歌声が起こり、そのうち皆が大合唱をしながら作業をするようになった。

その賑やかで楽しそうな様子を目にして、またさらに協力を申し出る家族が増えていった。

ティトーは相変わらず家に篭っていた。しかし彼の妻はティトーが反対してもレンガ作りを手伝いたいと言って進んで働いてくれたのだ。

十分な量の日干しレンガが用意できると、次はいよいよ倉庫を建てていく。流れ作業や分業をうまく活用して建築作業も順調に進んだ。

ある程度の外郭が出来てくると、皆がその使い勝手を真剣に考えるようになった。

「壁には、カビよけに空気穴を多くして風通しを良くしなくては……」

「虫や野ねずみに喰われないように、作物を地面から離して置くためにはどうしたらいいだろう」

クシが何も言わなくても、ロハの民からは様々なアイデアが自然と湧いてくる。ロハの生活に根ざした知恵を絞るのはやはりロハの民でなくてはならない。そう考えたクシは、出されたアイデアをどんどん計画に取り入れていった。

するとクシが当初想像したものよりもずっと立派で使い勝手の良さそうな建物に仕上がっていくではないか。クシが投げかけた案がロハたちの心に届き、大きく膨らんで実現していく様を見ながら、クシは驚きと喜びをおぼえていた。

倉庫が出来上がるころには、ほぼすべてのロハがクシの呼びかけに応じて協力していた。

倉庫が落成し、そこへ収めるためにロハは自分たちの蓄えを差し出した。ロハが持つすべての蓄えを集めるとそれは大変な量となり、乾季が終わるまでに皆の腹を満たし、さらに次の季節に種として使う分には十分に足りそうだ。保存が良ければ次の年に取っておくこともできるだろう。

早速、それらの蓄えからロハひとりひとりに平等に分ける作業が行われた。与えるのは長老とカチカリャだが、分ける量を計算するのはクシの役目だった。クシはすべての蓄えから、植え付けに使う量を差し引いて、ロハの人数分にそれらを割り当てた。不平等のないように、作物の品種や大きさを丁寧に選別して分けていく。クシの正確な計算と細かい配慮にロハの民は不満を漏らすどころか、誰もが感心し、分け前を受け取るときには心から感謝の意を示した。

働き手が少なく、子どもや老人を抱える家族にとっては今までの苦労が嘘のように有難いことだった。今まで他よりも多くの蓄えを持っていた家族は、少ない蓄えでやっと生活していた家族から感謝の言葉を掛けられて良いことをしたと満足した。

「この倉庫はロハの民の生きる力になる。クシのお蔭でロハは生き返った。ありがとう」

カチカリャがクシの手を握った。

「いや、今でも後悔している。もっと早くに私が呼びかけていれば、ティトーの子は死なずに済んだ」

「それはロハの皆が悔やんでいることだ。ロハを変えていくことはティトーの子が命をかけて教えてくれたことなんだよ。クシが悔やむことではない。

クシ、どうだろう。お前さんはまだ若いが、ロハの長になってくれないか？　クシのことは皆が尊敬している。若いからといって反対する者はいないだろう。お前さんこそロハを率いていくのに適している人物だ」

カチカリャがクシの手を両手でさらに強く握って何度も頷いた。

「わしからも頼むよ。クシ」

長老もクシの肩を叩いた。

「わしも賛成だ」

「私も……」

それを聞いていたロハの民がクシの周りにわらわらと集まってきた。

「わしからも頼む……」

低く、静かに響いたひとりの声に、皆の騒ぎが静まった。クシの周りの人間が一斉に振り返る。そこにはティトーが立っていた。

「ティトー……」

ティトーはそれ以上何も言わずにクシの目を見つめて深く頷いた。クシはしばらく考えてから口を開いた。

「私には故郷がある。一度追われた故郷だが、帰ることを赦されたらいずれは帰りたいと思っているのだ。

だから故郷から迎えが来るまでの間で良ければ、ロハの長としてあなたたちの役に立つよう努力しよう。もちろん、カチカリャと長老に支えてもらいながらではあるが」

ロハの民から歓声が上がった。皆、クシを取り囲んで飛び跳ねる。

「しかし！　今までどおりに【くしゃみ】と呼んでくれ。かしこまって呼ばれると調子が狂う！」

一斉に笑い声が上がった。

「なんだか、【くしゃみ】がどんどん遠くなっていくようだな……」

民衆の盛り上がりとは裏腹に、オルマは淋しそうに呟くとひっそりと家に戻って行った。

ロハたちはクシの指導の下で、つぎつぎと新しい習慣を作っていった。

雨季には谷に下りて新たな生活が始まったが、クシは谷の生活を変える方法も考えていた。ロハの持つ谷の畑を労働できる人数で割り、均等に割り当てたのだ。

しかし割り当てられた土地だけに拘らず助け合うことが条件だ。育ちの悪い畑があればほかの者も手伝って肥料を与え、害虫が出ればまた協力し合って駆除をする。土地はロハたちすべての持ち物であるから、労働力の足りないところは補うのが当然と考えたのだ。

そして得た収穫は新たに谷に設置した倉庫に保管して平原と同じように割り振られた。

乾季に谷を移動するときには、以前と同じようにそれぞれが作物を持って平原に移動し、平原の倉庫に納める。

前の年の豊作とまではいかなかったが、皆に割り当てられた食料は十分な量だった。

クシのアイデアはロハの中に浸透していき、それに従うことでロハの絆も深まっていった。

ロハたちは何かに付けクシに頼り、意見を伺うようになった。

季節はひと巡りし、クシがロハにやってきて三度目の乾季が訪れた。平原に乾いた風が吹き、厳しい寒さが訪れた頃、村にひとりの見知らぬ男が迷い込んできた。

彼は一軒のロハの家にふらっと入ってくると、そのまま倒れこんで意識を失った。驚いた住人が急いでクシを呼びにきた。

「ちょっと来てくれ【くしゃみ】。突然見知らぬ男が家に入ってきたんだ。ここらへんの部族ではないようなんだが、ひどく弱って死

にかけているんだ」

「オルマ、長老とカチカリャを呼んできてくれ」

オルマにそう伝えると、クシは急いでその家に行った。ポコとチャキもクシに付いて行った。

敷き藁の上に横たわった男は、ロハでもなくクスコ周辺の部族でもなく、クシもロハたちも見かけたことのない身なりをしていた。体中におびただしい数の痣や擦り傷がある。どこか遠いところから必死で逃げてきたのだろうか。体がすっかり弱っていて、もう虫の息だった。

後から長老とカチカリャが駆け込んできた。

「見慣れない格好だ。この辺りの者ではない」

物知りの長老でさえ首を傾げた。

瀕死の男はいったん意識を取り戻し、弱々しい声で何かを訴えた。その意味は理解できないが、その中に繰り返し出てくる言葉があることにクシは気付いた。

――　チャンカ　――

「この男はその国からやってきたのかもしれない……」

クシが呟いたとき、男が低い唸り声をひとつ上げ、その後はまったく動かなくなってしまった。胸に耳を当てると、もう男の鼓動は聞こえなかった。

「これは……」

クシは男の腕から覗く小さな痣を見つけて袖を捲り上げた。その痣は二の腕にくっきりと何かの図柄を浮かび上がらせていた。明らかに誰かが故意に付けたもの……焼いた石を押し当てて付けられた烙印だ。

「捕虜の印だ。この男はその国に捕虜として捕らえられていたのだ」

捕虜といっても体中の傷や痣を見れば、人の扱いを受けていなかったことが分かる。おそらく虐げられることに耐えられなくなり、やっとのことで逃げ出してきたのだろう。

乾季の夜の冷え込みは厳しく、これだけ弱った体で夜を越せばすぐに凍えてしまう。ここまで逃げ延びて来られたということは、一晩もかからない、それほど遠くない場所から逃げてきたに違いない。

「もしかしたら……」

カチカリャが何かを思い出したようだ。

「随分前のことだが、わしがはぐれたリャマを追って平原の外れまで行ったとき、焼き尽くされた集落を見たのだ。その村の壁にこれと同じ文様が刻まれていたのを見た。もうだいぶ時間が経っていたようだから、昔火事で滅んだ村だと思っていたのだが……。

その集落は火事で滅んだのではなく、この文様を持つ部族の侵略を受けたのかもしれない」

「それはどの辺りだったのか?」

「ここからずっと北西に行ったところだ」

「そういえば……」

ポコも何かを思い出したようだ。

「以前、わしらと同じように放浪の生活をする部族と出会ったことがあるのだが、彼らが言っていた。北寄りの西の荒地には近づくな。ピューマよりも獰猛な人間たちが襲ってくるぞ……と」

ロハのいる土地もケチュアの領域ではある。その先の西の地までも、かつてクスコ軍は遠征したことがあると聞いている。

しかしそこから北の方角へ向かえば、そこはまるで未知の世界だ。ロハの存在さえもクスコではほとんど知られていなかったのだ。北西の未知の世界にはどんな脅威が潜んでいるのかなど全く知り得ない。

そしてその不吉なものはいまや、この村の近くまで来ているのかもしれないのだ。

事切れた男の無残な姿を見ながら、クシは背筋が凍てつくような恐怖を覚えた。

7、混沌とする大地（前書き）

※この回は残虐なシーンが含まれています。苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

7、混沌とする大地

7、混沌とする大地

闇夜の中で窪地に身を潜めながら、アンコワリョは手にした斧の柄をぐっと握り締めた。

いよいよ初陣だ。幼い頃から父親に鍛えられてきた腕前を発揮するときが来た。根拠のない自信と同時にとてつもない不安を抱くのは、経験したことのない世界に飛び込もうとする者にはありがちなことだ。

アンコワリョの胸の内にも、どうにもならない感情の嵐が荒れ狂っていた。とくにまだ十を少し過ぎたばかりの彼には、その感情をうまく調節することは非常に難しかった。

斧の柄が汗でぐっしょりと濡れている。大きな不安から目を背けるには、その斧が滑らない方法だけを考えているのが一番良いと気付き、さらに手に力を込めた。

「大丈夫か？　坊主」

小さな灯りを灯した固形燃料を持って覗き込んできたのは、アンコワリョのいる部隊を率いる隊長だった。がっしりとした体格と、顔中に入れられた青黒い刺青から覗く猛獣のような鋭い目つき、こめかみや頬に刻まれた深い傷跡などは、この部族の人間には珍しくない風貌だが、アンコワリョの目にはどうしても敬愛する父親の姿と重なって映るのだった。

「そんな立派な武器を手にしていながらそんなに震えていちゃあ、ざまあねえな。斧を使うんじゃなくて、斧に使われちまうぞ」

隊長がせせら嗤うのを聞いて、アンコワリョは意地になった。

「これは親父さまからもらった大事な斧だ。親父さまは今までたくさんの敵を倒して、今は大陣営を仕切る首領、アストゥワラカさまのいちばんお側を護っているのだ。おいらはその親父さまから戦い方を仕込まれてきた。戦は初めてだが絶対に手柄を立ててやる！」

隊長は、身の程をわきまえるという言葉をまだ知らないらしいこの少年を一瞬呆れた顔で見たが、それがかえって微笑ましく思え、その顔に似合わない優しい笑みを作った。

「それは頼もしいな。是非その腕前を発揮してもらおうじゃないか。しかしただ敵をなぎ倒すだけでは能がないぞ。首領のトゥマイワラカさまは敵を生かして捕らえた者に褒美をくださるのだ。生かして捕らえるのがいちばん難しいことだからな」

それを聞いてアンコワリョの目が耀いた。

「さすがはわれらが首領さまだ。敵にも慈悲を施されようというのか。それこそ親父さまが言っていた真の勇者だ。おいらも、敵が自ら従うほどの強さを見せ付けてやるんだ」

隊長が一瞬フンと鼻を鳴らしたことに、アンコワリョは気付かなかった。緊張が激しくどうにも役に立たなさそうな一番若い部下が、やる気を見せたことに胸を撫で下ろした隊長は、アンコワリョの気持ちをくじかないように相槌を打った。

「そうとも。お前ならきっとできるさ！」

隊長は大きな掌で無邪気な少年の背中を力いっぱいはたくと、また元の位置に戻っていった。

アンコワリョは、今まで斧の柄を濡らしていた汗が、いつのまにか掌から引いていることに気付くと、「ようし」と呟いて窪地の上に少し顔を出し、敵の集落の様子を窺った。

目標の敵陣はほとんど闇に沈んでいる。集落の正面で数人の見張り役が焚いている焚き火だけがちらちらと見えていた。

夜の戦いなど、幾多の戦を経験してきた父親からも聞いたことはない。どこにでも身を潜めることができる夜闇は、攻め込まれる側に有利ではないだろうか。雄叫びを上げて集団で攻め込めば、潜んでいる敵にはこちらの動きが手に取るように分かる。四方から取り囲まれたら一網打尽だ。

今更ながら解せないものを感じ、隊長に確かめようと思ったとき、隊長が立ち上がって鋭い声を上げた。

その声で隊の兵士全員が立ち上がって鬨(とき)の声を上げた。彼ら独特の、背筋におぞましい物が這い上がってくるような不快な響き。それだけで敵は戦意をくじかれると言われている。

奇声を上げながら一斉に敵陣へと斬り込んでいく兵士たちに遅れを取ったアンコワリョは、滅茶苦茶に叫びながらその後を追いかけた。

先ほどの見張りたちはやっと敵に気付いたというように右往左往し、あっさりと先陣の手に掛かって倒れてしまった。

戦いの前には代表が敵側に出向いて宣戦布告をすることは常識だ。事前に行われたであろう交渉で、いつ襲撃を受けるかもしれないと知っているはずなのに、見張りは備えもしていなかったようだ。彼らはほとんど戦を経験したことのない部族なのだろうか。それとも

秘策があるのだろうか。いまのところその戦略が読めない。

見張りを倒した味方たちは敵を炙り出そうと、手にした燃料を放って集落の建物に火を掛けた。

いくら見張りがあっさりと倒れたといっても、彼らを囮にして万全の準備を整えている可能性もある。アンコワリョは燃え上がる集落に、ただ一直線に攻め込んでいく味方たちの後ろで周囲の様子を慎重に窺っていた。

相変わらず、建物から飛び出してくる敵はどれも闇雲に襲いかかってくるばかりで、何か策があるようには思えない。味方たちは面白いように敵をなぎ倒していく。

いとも簡単に集落の中央まで入り込んだ味方は、次々に建物に火を掛け敵をおびき出す。

火の点いた建物から戦闘態勢の整っていなかった敵がふらふらと這い出てきて味方の手に掛かって倒れこむ。

夜の奇襲は敵の意表を突くためだったのだろうか。しかしここまで警戒が薄いとは、まさか事前の交渉のないまったくの奇襲なのか。

燃え盛る炎の中で敵の姿も味方の姿もみな黒い影となって判別が付かず下手に手出しができない。

味方たちの発する甲高い雄叫びが敵側の威嚇の声や悲鳴をかき消して、戦況がどのようになっているのか、敵がどのような戦いをしているのかが、後方にいるアンコワリョにはまったく分からなかった。

ふと後ろに気配を感じたアンコワリョは、振り向きざまに斧を振るった。アンコワリョの斧をかろうじてかわし、ひとりの少年が両手に槍を握り締めて前屈みで立っている。

炎に照らし出された顔は、自分とそれほど変わらない年齢に見えた。

「ちょうどいい相手だ！」

アンコワリョは斧を構えなおして少年に向かっていった。少年の方もなかなかの腕前らしい。器用にその斧をかわしてしゃがみこむと、槍を地面すれすれに落として勢いよく回しアンコワリョの脚を掬おうとした。

槍の穂先が足先を掠める寸前で飛び上がったアンコワリョは、同時に斧を振り上げて屈んだ少年の背中を狙う。

少年が素早く脇に転がってかわしたため、斧はめいっぱい地面に喰い込んだ。斧を抜くのに手間取っていると、すぐに身を起こした少年が槍の穂先を突き出した。鋭利に削られた石の切っ先がアンコワリョの頬を掠めた。

間髪を入れずに槍を突き出す少年から、斧を取り損なったアンコワリョはひたすら逃げるしかなかった。

相手が大柄の戦士なら、きっと武器を失くした時点で気圧されて観念していただろうが、相手が同じくらいの少年であることで、まだどこかで反撃ができるかもしれないという期待があった。

ぐるぐると逃げ回り、再び地面に刺さった斧に近づくことができたアンコワリョは、槍をかわして仰向けに転んだ瞬間に、斧の柄の根元に足先を掛けてそれを蹴り上げた。

見事に抜けて宙に舞った斧を受け止め、今度は少年に勢い良く斬りかかる。少年は槍の柄でそれを受け止めるが、何度も斧を受け止めているうちに、とうとう槍の柄が折れ、護るものを失ってしまった。

アンコワリョは観念して跪いた少年にそれ以上斧を向けることはしなかった。

少年は、アンコワリョがとどめを刺さず斧を下ろしたことに驚いた顔をした。少年の両腕を掴み、それを背中に回してしっかりと押さえ付ける。少年は抵抗しなかった。

アンコワリョは、少年を引き連れて火の掛からない場所まで退避

し、混戦が治まるのを待った。

夜が明ける頃には、集落は壊滅状態となった。炎はほぼすべての建物を焼き尽くし、もうどこにも敵が潜む場所は残っていなかった。倒された敵の骸もほとんどが焼け焦げ、原型を留めていない。

焼け残った泥レンガの残骸に兵士の一人が勝利の証である刻印を刻んでいた。

結局、敵を生きたまま捕らえたのはアンコワリョだけだった。

手を縛られて隊長の後を付いていく捕虜を眺めて、アンコワリョは誇らしい気分だった。

隊は広大な平原の真ん中にたくさんの幟(のぼり)をはためかせている陣に戻った。アンコワリョのいる部隊の何倍もの数の人間が忙(せわ)しなく立ち回っている。

兵士たちは陣に着くやいなや食事の支度をする女たちの中に紛れ込み、焼きあがったばかりの肉を漁り始めた。女たちが叱咤する声と、兵士たちの労を労(ねぎら)う仲間の声、兵士が自分の武勇伝を大声で語って聞かせる声が交じり合う。

賑やかな野営地を抜けて、アンコワリョは隊長と捕虜を連れた兵士の後を付いていった。

陣の中央には立派な設(しつら)えの天幕が張られていた。四方に立てられた柱に梁が渡され、部族の紋章を織り込んだ幅の広い布が何枚も、少しずつ重なるように掛けられている。

隊長は中央の布を押し上げてその天幕の中に入っていった。

アンコワリョはひどく緊張した。その天幕の中には、無数の小部隊を取り纏める首領トゥマイワラカが居るのだ。

垂れ幕の向こうに消えた隊長が再び顔を出し、なかなか入ってこないアンコワリョを急かした。

「何をやっておる！　早く来い！」

アンコワリョがおずおずと垂れ幕を持ち上げて中へ入ると、そこは外で見るよりもずっと広い空間になっていた。布を透かして入ってくる陽の光と、上座に煌々と焚かれた松明の灯りに、天幕の鮮やかな模様が浮かび上がり、埃っぽい野営地とはまるで別世界のようだ。

中央の木の椅子に、隊長の貫禄とは比べ物にもならないほどの威厳を感じさせる人物が座っていた。周囲にも屈強な戦士が大勢居並んでいるが、その人物は全く別格だった。

今までアンコワリョが誰も適うことがないと思っていた自分の父親でさえ、足許にも及ばないと思った。

直視してはいけないと慌てて跪き、視線を地面に向ける。その視線の先に、突然大きな塊が滑り込んできた。

大振りの鹿の腿肉だ。

驚いて顔を上げると、隊長がアンコワリョを振り返って言った。

「首領さまからの褒美だ。大変な手柄だとおっしゃっている」

アンコワリョは慌ててその腿肉を抱え込むと、何度も頭を下げた。その姿が滑稽だったのか、天幕に集う屈強な戦士たちから低い笑い声が上がった。

アンコワリョが肉を抱えて正面を向いたまま、後ろ歩きで下がっていくと、今度は捕虜の少年が首領の前に押し出された。両腕を兵士に掴まれている少年は、背後からも兵士に抱え込まれ、身動きが出来ない状態になった。

まだ自分と同じくらいの年の捕虜に対しては、おそらく寛大な沙汰があるのだろうと気安く考えていたアンコワリョの目に、信じ難い光景が飛び込んでくる。

玉座の脇の松明の中にくべられていた棒を兵士の一人が取り出し、少年に向けた。棒の先には真っ赤に燃えた石が付いている。石には部族の紋章が彫られていた。

それを見た少年は突然大声を上げて暴れだした。三人の兵士が少年の体を羽交い絞めにして、片袖を捲り上げて二の腕を晒した。

まだ細いその腕に熱した石が押し付けられると同時に、天幕を切り裂くような悲鳴が響き渡った。

アンコワリョは肉を放り出し両耳を塞いだが、その光景を見つめる眼を逸らすことはできなかった。

自分の立てた手柄とは、神に捧げる貴重な生贄を捕らえてきたことだったのだと、そのときになってやっと知ったのだ。

8、　月夜の宴

8、月夜の宴

「【くしゃみ】、是非に頼みたいことがあるんだ」

倉庫の作物を点検していたクシのところに、チャキが顔を出しておずおずと言ったのは、高原から谷へと移る準備を始めた乾季の終わりだった。

いつもは一緒に作業をしているカチカリャがその日はほかの用で忙しかったので、クシはひとりで倉庫の中身を調べて、種として使う分と来年まで保管する分に分けなくてはいけなかった。

そんな忙しい時に声をかけられても気が回らない。クシは作業の手を休めずに適当に返事をした。

「なんだ？　私にできることなら別にいいが……」

「じゃあ、今夜月が昇ったら、ぼくの代わりに長老の家の前の広場に行っておくれよ。それだけでいいんだ」

クシは訳が分からなかったが、理由を聞いている暇はない。

「ああ、分かったよ」

そう安請け合いしてしまったのが運のつきだった。

月が昇るころ、村中がざわざわと騒がしくなった。そういえばオルマが明日は何かがあると言って昨晩からそわそわとしていたのだが、倉庫のことで頭がいっぱいで肝心な内容を聞きそびれていたのだ。

チャキに言われたとおり長老の家の前の広場にやってくると、そこにはたくさんの人が集まっていた。ロハたちがほとんどそこに集まっていると言ってもいいくらいだ。

人だかりを掻き分けて長老を探し、「チャキの代わりに来ました」と告げると、長老はしかめ面をして溜め息をついた。

「チャキのやつは、やっぱり逃げおったか……」

「逃げる？」

クシは何かまずいことに首を突っ込んでしまったのだろうかと、急に不安になった。

「うむ。しかし、クシが参加すれば宴も盛り上がるだろう」

そう言うと、長老はクシの手を引いて広場の中央に連れて行った。広場の中央に大きな焚き火が焚かれていて、それを囲むように若者たちが立っていた。

若い男たちがぐるりと大きな外円を描くように立っており、クシはその円の一部に入れられた。

男たちの円に囲まれる形で、若い女たちが内円を作って男たちと見合うように立っていた。その若者たちの円を遠巻きに囲んで、ロハの皆が大騒ぎをして盛り上がっていた。

「それでは、今年はようやく年頃の男女の数が揃ったので、三年振りの『求婚の宴』を始めることとしよう」

長老が声を張り上げると、円を見つめる野次馬たちの歓声が一気に高まった。

「『求婚の宴』とはなんだ?」

隣に立つ小太りの男にクシは訊いた。

「なんだ、【くしゃみ】は知らないで参加したのかい?」

「チャキの代理なんだよ」

「あはは、チャキに嵌められたんだな。あいつはこの宴が嫌いだからな。

これは男女が結婚相手を決める祭りなんだ。歌に合わせて踊りながら男と女の輪が逆方向になるように回っていく。女は自分の意中の相手のところに来たらその場で踊り続けるのさ。男の方にも気があれば相手の手を取り、そこで婚約が決まるのさ」

「そんな! 私は結婚するつもりなんてない。下りるよ!」

円から外れようとするクシの腕を、隣の男はきつく掴んだ。

「だめだよ、【くしゃみ】。男女の数が揃わなければ宴は中止だ。こんなに盛り上がっているのに、皆をがっかりさせるつもりか?」

小太りの男はこの祭りに賭けているのか、殺気立った様子でクシを諭した。

「なに、別に求婚に応じなければいいのさ。求婚者が来るかどうか

も分からないしな」

反対隣りの男が笑って言った。クシはもう逃げ出すことが出来なかった。

ほどなく円の周りの観客から、リャマの皮を張った太鼓を打ち鳴らす音に合わせて大合唱が始まった。手拍子や掛け声も入って大変な盛り上がりだ。

その歌に合わせて円になっている男女が愉しげに踊り出す。隣の小太りの男も陶酔したように夢中で踊っている。

もうこうなったら愉しむしかないと、クシも一緒になって踊り出した。

ふと目の前の女がクシの前で立ち止まって踊り続けているのに気付いた。ほどなく彼女を押し退けるように別の女もやってきて、クシのすぐ目の前で踊り始めた。

やがてぞくぞくと集まってきた女たちは、クシの周りで団子になって踊り続けた。観客からどっと笑いが起こる。

今やほかの男たちは皆ひとりで虚しく踊り続け、クシの周りに集まった女たちはもみくちゃになりながら、かわるがわるクシに愛想を振りまくのだった。

「【くしゃみ】ー！　さっさと相手を決めろ！　ほかの男に迷惑だぞ！」

「いいぞ、いいぞ。【くしゃみ】を取り合って踊れ踊れー」

円の男たちからは罵声が、観客からは野次が飛び、笑いが起こる。

クシはほとほと困り果てた。とにかくこの場から逃げ出さなくてはいけない。どうしたものかと考えながら辺りを見回していると、女たちの集団の後ろ側に見慣れた顔を見つけた。オルマだ。

ひしめいている女たちを掻き分けて必死にオルマの手を掴むと、

そのまま広場を抜けて平原の暗闇の中に走り去った。
クシとオルマの背中をロハたちの大きな歓声が追いかけてきた。

「最初の一組が決まったぞ！」

「幸せになれよー」

「オルマを大切にするんだぞー」

野次を聞いて、また笑いがどっと起こる。
残された女たちは拗ねた顔でしばらく立ちすくんでいたが、再び円を作ると、最初のように踊りながら再び回り始めた。

広場を外れて誰もいない平原にやってきたクシは、ようやくオルマの手を離した。全力で走るクシに引っ張られてきたのでオルマは息も絶え絶えだ。肩で息をして話をすることもできない。
オルマが倒れこむように草地に座り込んだので、クシもオルマの横に腰を下ろすと、彼女の背中を優しくさすった。
ほとんど満ちた月は明るく、ふたりの姿をくっきりと照らし出していた。

「すまない、オルマ。あの場から逃げ出すにはこうするしかなくて……」

「なんだ……そういう……ことか……」

オルマは胸に手を当てて、必死で息を整えようとしていた。しばらく経ってようやく呼吸が整うと、オルマは再び口を開いた。

「チャキが【くしゃみ】に代わりをさせたんだな。故郷に帰りたいと言っていた【くしゃみ】が、ロハで結婚するはずはないから、おかしいとは思っていたんだが」

「オルマにもあの場で求婚したい相手がいたんだろうに。私が連れ出してしまったから、せっかくのチャンスが無駄になってしまったな。申し訳ない」

「最初からそんな相手などいやしないさ。困っていたところに【くしゃみ】の姿を見つけたから、まさかとは思いつつあんたの前に行ったのさ。

【くしゃみ】の気が変わってロハで結婚してもいいと思っているなら、あたしを選んでほしくて……」

オルマが真顔になって、クシの瞳をまっすぐ覗き込んだ。

「ねえ、【くしゃみ】。あんたを捨てた故郷にどうして帰りたいのさ。あんたはここで楽しく暮らしているじゃないか。ロハの生活は嫌いか？」

「そんなことはない。私はロハの民もここの生活も気に入っている」

「だったら、あたしと結婚してずっとここにいてくれないか？」

思わぬオルマからの求婚だった。答えを待ってオルマはじっとクシの顔を見つめた。

月明かりに照らされて、健康的な艶のある褐色の肌が蒼ざめて見える。いつもは強気なその瞳は、今は不安気に揺れていた。胸の前に合わせた手を強く握り締め、クシの瞳を真摯に見つめるその健気な姿に、クシの心は揺れた。

故郷は自分を陥れ、無理矢理罪を着せて追い出した。未だになんの音沙汰もないうえ、あと何年こうして放っておかれるのか分からない。クシが生きていようがいまいが、故郷の人間には何も関係のないことなのだ。

そんな故郷に何故帰りたいと思うのだろうか。

オルマのことは妹のように思っていたが、気の置けない仲であることには変わりない。二人でいるときはいつも心から笑える。この先夫婦になったとしても何も変わらないだろう。いやむしろ、いつまでも仲良く幸せに暮らせるのではないだろうか。

「そうだな。それがいいのかもしれない……」

しかしオルマに返事をしようとすると、何故かクシの中のもうひとりの自分が、オルマとの結婚を止めようとした。クシの心は激しく葛藤した。

瞬きもせずに見つめるオルマの視線から逃れようと、思わず顔を逸らしてきつく目を閉じる。すると瞼の中にぼんやりと人影が浮かんできた。その人影はゆっくりと近づいてくる。少しずつその姿がはっきりとしてきた……。

「キヌア……」

言われて、クシははっと目を開けた。怪訝な顔をオルマに向けると、彼女の表情にわずかに翳が差したのが分かった。

「やっぱりそうなんだ。【くしゃみ】には想う人がいるんだね」

「何故、その名を知っている？」

「なんだ。あたしも女の端くれだったんだな。なかなか鋭いじゃないか」

オルマは答えをじらすように、独り言を言った。

「キヌアという名はどこで?」

クシは焦ってもう一度聞く。オルマは溜め息をひとつつくと、月を見上げた。

「【くしゃみ】がピューマにやられて生死の境をさまよっているときに、何度もうわ言で呼んでいたんだよ。そのときピンと来たんだ。きっとそれは故郷にいる恋人の名じゃないかって。生きるか死ぬかというときに呼ぶくらいだから、よほど想っている相手なんだろうなって」

「そうか。私はそんなことを……。でも恋人なんかじゃないよ。彼女は恋してはいけない相手だから」

オルマは心配そうにまたクシを見た。

「どういうこと?」

「詳しくは話せないが、決して結ばれる相手ではないんだ。彼女は私の武術の師だ。尊敬こそすれ、恋することなど……」

「でもクシは生死の境を彷徨いながら、彼女を呼び続けていた。もしあれが最期だったとしたら、いちばん会いたい相手だったんだろう。ただ尊敬しているだけの相手ならあんな風に呼び続けたりしないさ」

「……私が彼女のことを想っているなどと、オルマに言われるまで気付かなかった」

「気付かなかったんじゃなくて、気付いちゃいけないと無理に気持ちを押さえ込んでいたんじゃないのか？

あたしが、いつかは帰ってしまう【くしゃみ】に恋しちゃいけないと思っていたのと同じように」

「オルマ……」

「嫌だな。そんなところまで気が合うのか」

オルマは下を向いて自嘲するようにふふっと短く笑うと、さっと顔を上げて明るい口調で言った。

「ねえ、【くしゃみ】。約束しよっ！

あんたは故郷に帰って、ちゃんと彼女に想いを伝えるんだ。それで振られてすっきりしたら、ロハに帰って来る。あたしはそれまで待っているから」

「私が戻って来なかったら？」

「あたしもそんな間抜けじゃないよ。【くしゃみ】は帰ってこないと思ったら、さっさと結婚するさ」

オルマはいつもの調子を取り戻して、クシの肩を思い切りはたいた。

「分かった。約束するよ」

クシはオルマに頷き、微笑んだ。

『リュウゼツランが咲く前に、クスコも忘れ、キヌアも忘れ、ロハの民となって暮らすことになるかもしれないな』

オルマとふたり寄り添うように並んで、月明かりにぼんやりと青く輝く草原を眺めながら、クシは思っていた。

広場に戻ってきたときには、もうすでに焚き火の周りに円はなく、お祭り騒ぎもおさまっていた。

数組の男女がその焚き火の周りで座り込んで談笑する姿や、解散した観客たちがぽつぽつと寄り集まり井戸端会議に花を咲かせている姿が見えた。

クシとオルマの姿に気付いた男が素早く寄ってきて冷やかした。

「愛の語らいは楽しかったかい？」

「なんで今更、あたしが家族同様の【くしゃみ】と結婚するんだい。勘違いもいいところだ！」

オルマがからかった男を怒鳴りつけた。

「騒がせてすまなかった。『求婚の宴』もよく知らずに参加してしまったものだから、オルマに頼って逃げ出すしかなかったんだ」

「まあ、あの状況じゃ仕方ないよなー。俺も分かるが、色男は大変なんだよなぁ」

クシの肩を抱いてそう言った男に皆が大笑いして、とりあえず騒動はおさまった。クシとオルマは顔を見合わせて苦笑した。

8、　月夜の宴（後書き）

※むかし、アンデス地方の暮らしを紹介するドキュメンタリーでこの『求婚の宴』のような行事を観た覚えがありました。

その後、アンデス地方を舞台にした小説（作者は日本人）にもこんな宴の様子が描かれていました。

残念ながら、何の番組か、どういう題名の小説か忘れてしまい、本当に今もあるのか、どの地方の風習なのかも忘れてしまったのですが、ところ変わればいろいろな習慣があるものだなと、印象に残ったものです。

アンデス流の婚活ですが、単純明快で陽気なところがさすがラテン流！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5493w/

皇子クシ　―　太陽の都を築いた若きインカの伝説　―

2011年11月18日14時14分発行